時 報

No.12

1963. 9

大阪大学山岳会

時　報　第12号　目　次

巻　頭　言　篠　田　軍　治

リーダー所感「37年度を回顧して」　梶　本　孝　治

富士山遭難報告（1961年１１月）

　報　告　酒　井　次　郎

　日　誌

　会 計 報 告

　追 悼 登 山

1960年度報告

　夏山合宿報告　広　瀬　貞　雄

　「千丈沢をベースとして」

　冬山合宿報告　田　村　俊　秀

　①　両 俣 隊　②　千枚岳・赤石岳隊

　③　西 俣 隊　④　北 沢 隊　⑤　鋸　隊

　春山合宿報告　酒　井　次　郎

　「剣岳八ッ峰を末端から」

　一般山行報告

1961年度報告

　夏山合宿報告

　「剣岳一峰東面を中心として」

　冬山合宿報告　広　瀬　貞　雄

　「ゼミナールと近畿の山歩き」

　春山合宿報告　梶　本　孝　治

　「北又小屋－イブリ山－朝日岳－白馬岳」

　一般山行報告

　会 計 報 告

1962年度報告

　夏山合宿報告　梶　本　孝　治

　「山小屋建設ボッカ及び穂高岳涸沢定着合宿」

冬山合宿報告　梶　本　孝　治
「栂池－白馬三山往復」
春山合宿報告　横　尾　秀次郎
「日本海より五竜岳へ」
一般山行報告
部会、トレーニング報告
会　計　報　告

黒部川立石周辺より　（1960 年 8 月）　佐藤　毅・保母武彦
北アルプス中央横断　（1961 年 5 月）　玉　井　康　雄
赤牛岳より黒部川　（1962 年 5 月）　牧　野　大　輔
黒部川上の廊下　（1962 年 8 月）　高　田　邦　雄

山小屋「栂ノ木寮」に関して
Ⅰ　栂ノ木寮建設候補地決定の過程　浜　田　彰　三
Ⅱ　設計に関して　木　原　秀　幸
Ⅲ　山小屋での生活　栗　原　完　治
ピーク 29 峰遠征日誌
ピーク 29 峰遠征会計報告
文献邦訳　徳永篤司・松久　博・坪井圭之助共訳
「高度の人体に及ぼす影響」（L.G.C. ピュウ、M.P. ウォード著）
会員名簿（省略）
編集後記

山 の 家 そ の 他

篠 田 軍 治

ヒマラヤから帰ると、さっそく山の家建設事業が待っていた。山の家は体育会でつくるのだが山岳部は重要な役割りを果たさなければならない。候補地も正式にきまり、村との下交渉も順調に進行したので、三十六年十一月二十日過ぎ、長野県庁へ行き栂池一帯の間発計画を聞き、国立公園地帯なので建築許可などに種々の手続きがあるので、それらの打合せを済まし、細野で浜田君と落ち合って沓掛に向った。

山の家の予定地、神の田圃は小谷村の五部落の入会地なので借地のためには五部落代表の諒解が必要である。手続きも無事済ませ、沓掛の猪股直衛宅で一席設けた。これから宴もたけなわになろうというとき、有線電話は富士山遭難を伝えて来た。詳細はもちろんわからない。しかし一名死亡ということはどうやら確からしい。中央線の方はもう夜半まで汽車がない。糸魚川廻りで帰阪することにして、富山で毎日支局の佐藤 OB と会って情報を聞く手配をした

富山で準急に乗換える時間を利用して佐藤君に会ったが詳しいことはわからない。大阪へ着いてみると間もなく遺骨が到着したので駅のプラットフォームで迎えた。富士山遭難のことは酒井君の詳しい報告があるから、ここではあまり触れないことにする。富士山では今までに何回も大学山岳部が遭難を起こしているだけに相当警成したつもりであつた。リーダーから出発前に計画その他を聞いていて、これ攻ら大体間違いはなかろうと思っていたが、遭難を起こした後で隊の構成、その他今までと違った点が多かったことを知って、それならば今までと違った行き方をしたければならなかった、もう少し突っ込んで詳細を聞いて検討して、適切な指示をすべきだったと残念でならなかった。

八方尾根も黒菱の上までリフトで行けるようになると唐松も簡単になり、今まで八方池附近で冬山のトレーニングができていたのが今度はどうしても、もっと上の方に持って行かなくてはならなくなった。富士山の冬山訓練の場も確かに今までよりも上の方に選ばなくてはならないようになって来た。しかし一旦荒れ出したら山は山で、交通が便利になっても、むつかしさは少しも減っていない。

今度、阪大の山の家も神の田圃にできて、交通もこれから便利になる一方である。栂池を中心とした優れた山山が阪大生になじみの深いものになることは大いによいことであり、学生々活に大きなプラスになることは明らかだが、一面、交通が便利にな

って大勢の人に利用されるようになると、遭難を起こさないような対策が益々重要なものになって来る。今まで山岳部は部の活動が全く中心で、一般学生を対象とした事業はあまり行なっていない。栂の木寮は体育会に所属し、建設にはスキー部、ワンダーフォーゲル部が山岳部と共に参加したわけであるが、今後、山の家の利用者に遭難者を出さない対策とか、環境整備の問題などになると山岳部の果たすべき役割りは大きい。山岳部としては部の活動に山の家を大いに利用して成果を挙げると共に、このような対学生社会への責任を果たすことが重要であり、また大いに意義のあるものと思われる。

——・——・——・——・——・——

私事に亘って恐縮だがヒマラヤ遠征中ベースキャンプで発病して大勢の方達に御心配をお掛けしたことを深く御詫びする次第であります。

リーダー所感

—三十七年度を回顧して—

梶　本　孝　治

富士山で堀井君を失って、早や一年数ヶ月になる。当時、この事故はまさに部にとって青天へきれきの出来事であった。これ以前にもチンネの事故などかなり危ない事もあったが、好運にも我々にとって、死という事は全く他人事に思われていた。それだけに堀井君の死に直面した時、遺体を前にただ呆然と立ちすくむまゝであった。あの時の光景は今も消え難く、胸をえぐられる思いだ。

私は今は亡さ堀井君の追悼のふさわしい言葉を知らない。たゞたゞ、山岳部の活動に再びこのような不幸な事故を断じて起してはならない。

我々は、山岳部創立以来の始めて大きな壁につき当たったような気がする。幸い事故後、数ヶ月、先輩の温かい援助で事後処理もかたずき、山岳部の活動も再び始まった。私がチーフリーダーを受け継いだのはこの当時である。この時、我々は再出発を期して、絶対事故のない山行、部活動をと、胸に深く秘めて三月に春山合宿に向ったのであつた。事故の無い山行、これは当然の事ながら、過去、部が出来て以来ずっと死亡事故か無かった事は何ものにも勝る記録であった。記録的な山行といわれるものも、無事故の活動のもとに価値のある事で、一度事故の苦杯をなめた我々には、記録的とか、高度な、とかいう事が取るにたらないようにさえも思われたのである。

ともかく、富士遭難を始め、事故が相次いで起った今までの活動の失敗の原因を明らかにし今後の活動の確固たる基盤をなす事がリーダーとしての責任であると考えた。事故後幾度かなされた反省会、先輩の批判と指導を受け、さらに私自身、「時報」を一号より徹底的に読んで、先輩達が山行を通し何を学び、何を考えて来たかを知り、この問題を少しでも明らかにし、解決しようとした。又、私なりに再び山への自信を持てるようにと努めた。以後一年周の部活動の一貫した考えは、これらの問題を一つ一つ確実に解決する事であった。

この間、大学山岳部というものを白紙の立場から考え直し、納得の行くまで論議し合ったのも、今後、有形無形に意義のある事と思う。

我々、大学山岳部は常にチームプレーとして山を登っている。部活動も自然と合宿が中心である。だが、このチームという、かくれみのをかぶって、各自が力をかいかぶったり、その中の個人個人がコンプリート・マクンティニアーとしての性格が失わ

れていないだろうか、そして一部のリーダーグループのもとにある者はポーターに甘んじてはいないだろうか。合宿形態や山行計画について議論するよりも、山岳部の活動の中にあって、各個人は「コンプリート・マウンティニアーを目ざして基礎を修得する」という自覚に徹したらどうだろう。これを前提として、初めて大学山岳部というチームの意義と、その特性が生かされると思う。

阪大山岳郎は過去十数年、後立東面、稜線、そして黒部周辺へと脈々と流れる伝統のもと発展して来た。だが現在、我々がこの記録に接する時、先輩達の厳しい自己批判と、ひたむきな努力を知らずして、いたずらに伝統を追うならば、再び奈落の底につき落されるだろう。

大学山岳郎はその構成メンバーが毎年代る、しかも、新入部員は登山はほとんどずぶの素人である。従って、山岳部の活動主目標は先に述べた「基礎の習得」であるべきだ。上級部員が、或いはリーダーがそれを軽視し、記録的と言う名目のもと新人の訓練をおろそかにするようなことがあれば、これは山岳部の前途を憂うべきことだ。

一方、山の方も、北アルプス等について言うならば、主なルートはトレースされ尽した感がする。先輩達があこがれた「黒部」もすっかり未知のヴエールをはがれてしまった。しかし、我々大学山岳部は目標もなく、ひたすら先人の足跡をたどることに甘んずべきでないと思う。あくまで「将来の高い目標を目ざしての基礎の習得」に励むべきだと強調しよう。

私は、日本の山でいたずらに手をこまぬいていたり、一人よがりな悪あがきの山行に走るより、一歩、大きく前進して、この将来の高い目標として、ヒマラヤを主張したい。今後幾度も阪大山岳会のヒマラヤ遠征隊がこの可能性を十分裏づけて来れるだろう。このように夢をヒマラヤの高峰にはせ、常に新しい登山を、立派な登山を目ざして、ひたむきな努力をすることこそ、スポーツアルピニズムの本筋だと思う。

富　士　山　遭　難　報　告
（1961 年 11 月）

一九六一年十一月
富 士 山 遭 難 報 告

酒　井　次　郎

－はじめに－

一九六一年十一月廿五日、我々は遂に富士山で岳友堀井昭彦君を失った。創立以来、無遭難という輝かしい伝統を遂に守り切る事ができなかった我々山岳部員一同は、亡き岳友の冥福を祈り、再び事改を起すがのない様尽さねばなら次い。

夏山シーズンに、岡久、大川、打出と三つのスリップ事故を起した後、我々は度重なる反省会を持ち、その原因を追求し、部長、先輩諸氏の注意を求め、決して犠牲者を出すまいと、今後の部のあり方を根本的に考え直した。その結果僥幸に恵まれなくとも、自力で成しとげられる対象を選び、先人の歩んだ道をたどって、登山たるものを考え直し、且つ基礎から復習しなおそうとして、遠見尾根のポーラーを冬山合宿に決定した。十一月初旬に冬山偵察、及び、春山合宿の為の荷上げを行なった。

そして十一月下旬の連休を利用した、昨年は行けなかった富士山への雪上訓練の為の山行がリーダー会で立案された。参加者が確定して十一月十六日の部会に、上級部員によって集められた参考資料・スライドによって、富士山の概念をつかみ、気象、地形、及び諸注意を検討した。チーフリーダーを含めた十四名のメンバー構成も整い、廿一日に最終打合せを行って廿二日の夜行で大阪を出発した。

〔予　定　期　間〕

十一月廿三日～十一月廿六日

{参　　加　　者}

酒井（リーダー・工四年）

前沢（工四）・梶本（工三）・山本（法三）・横尾（工二）・高田（経二）・笠原（法三）・桑原（工二）・吉川（理一）・牧野（理一）・豊坂（医二）・秋濃（基礎工一）・田井（OB）

堀井昭彦（工教・一）

〔経　過　報　告〕

十一月廿二日夜、大阪発。

十一月廿三日（曇）富士古田より小型バスで富士山五合目迄入る。五・五合目から雪があった。七合目にテントを三張設営。午後大沢でアイゼンを着用して登降訓練、ピッケルによる滑路停止の訓練に力を入れた。

十一月廿四日（晴）　一名テントキーパーを残し、堀井君を含む十三名で、夏道より富士頂上を往復。雪は固くしまっておりアイゼンがよく利いた。午後から強風となる。

十一月廿五日（快晴）三名（L 梶本）は大沢より山頂往復。他十名（L 酒井。堀井君を含む）は八合目まで雪上訓練の予定で七時卅分テント発。大沢を通って状態がよかったので九合目に到達した。昼食後十一時廿分下降にかゝった。夏道は風当りが強い為、ツバクロ沢側に下り、八・五合目附近で再びツバクロ沢を右岸から左岸に渡ろうとした。このルートは昨日通ったルートであった。十一時三十分突風待避の姿勢から歩行に移る際、二年部員の間にいた堀井君は右足を滑らしてバランスを崩して滑落、二十米程滑ってピッケルによるストップ動作を行ったが、ピッケルから手が離れた為、そのまゝツバクロ沢下部へ滑落して行った。田井 OB・前沢は直ぐその後を追って下降した。酒井倅は他のメンバーをテント地に誘導後、現地に急行。

十二時十分、前沢・田井は六合目ツバクロ沢下郎で堀井君を発見。頭蓋骨々折、既に脈なし、直ちに人工呼吸を始めた。（人工呼吸は一時半まで行ったが、残念ながら効果はなかった。）

十二時三十分。大町山の会の医師が通りかゝり、カンフル注射を行なう。堀井君を安定した場所に移し、各人ヤツケ、セーターをぬいで保温に努めた。

十三時三十分。医師により、死亡確認。小屋から戸板を運びシュラフに納めて、十四時より収容に移った。

十六時、五合目佐藤小屋に収容。

十七時三十分、下からの自動車到着。田井、酒井がつきそって富士吉田市の吉祥寺に納めた。夜になりテントは撤収困難の為、明朝撤収する事にした。
吉祥寺にて、直ちに検死を受け安置。通夜。

十一月二十六日
九時、御家族四名、及び大工原、西川 OB 到着。対面、納棺、説経をしていたゞく。だび、葬儀については富士吉田市観光課の方に一切りお世話になる。広瀬 OB、高橋、大阪より着。全員そろって市火葬場で十三時十五分だびを行った。

十七時。富士吉田発。・

十一月二十七日

急行第二摂津で遺骨と共に帰阪。尚、残務整理の為二名富士吉田市に残り残務整理を終えた夜帰阪した。

十一月廿八日

午後四時～五時自宅で葬儀を行い、午後六時から学生部会議室で事故処理、打合せ会を行った。

〔反　　省〕

十一月二十九日のリーダー会に於て、今度の事改についてあらゆる面から我々リーダーグループの非を反省した。

先ず富士山に於ける事故反省の主問題点を日を追って取り上げて行く。

二十三日。

〇小型バスに便乗した事は、雪上訓練を主諜題とした山行であったので、時間をその目的に使う為であった。しかし結果的にみると、堀井君の場合は、純然たる素人をいきなり冬の稜線へ連れて上った事になる。

〇アイゼン技術の練習を、ピッケルによる滑落停止の練習の前に行った事。当日は、アイゼンをつけてテント設営地まで来ていた為、アイゼンをはずして滑落停止の練習をする前にアイゼンをはいた登降を練習した。その場の雰囲気によって判断を左右された感じが強く、リーダーは小さな事柄にまで細心の注意を払って、正当な判断をしなければならないということを全員強く反省しあった。又、テント地の選定についても、”団体行動の際は、最も弱い人の調子に合わせる”という原則を厳格に守っていれば、初めての人にアイゼンをつけさせてまで高所に上らなくても、適切なテント地を選べたであろう。

二十四日。

〇ザイルを使用して、コンティニアスで歩行する事は、我々上級部員でも、まだ習熟していないので、安全度をます物と断言する事が出来ないため、一応コンティニアスによる歩行を行っていない。しかし、今回の山行は雪上訓練を目的とした山行であったから、リーダーズメンバーが、状況判断をして、十分検討しあった上でない限り、一年生を登頂させるべきではなかった。

二十五日。

○昨日の経験で、富士山の強風を十分警戒し、他のパーティの事故を知っていたのであるから、より慎重に、パーティの能力を見極めた上で、雪上訓練を行うべきであった。

○ピッケルによる滑落停止は前日までの練習を見ていると一寸のスリップぐらいとめる事が出来るだろうと判新していたが、実際にはいざとなったら夏山合宿なり、これまで経験した人に比べて、格段の差が現れるという事を、頭においておくべきであった。

以上の主問題だけに限らず、最も強く反省しなければならない事は

”部員の状況の把握・状況判断に対するリーダーズメンバーの認識がルーズである”という事であった。現在まで、痛ましい犠牲者が出なかったのは、全くの幸運であったにすぎない。再びこの様な不幸を繰り返さないよう、先ずリーダー会のあり方を根本から再確認し、一年生の年間トレーニングの計画を再検討して行く事を、全員心から誓いあった。それが、もはや山行を共にする事の出来ない岳友への我々の使命である。

概　要　日　誌

	富士吉田	大阪・大阪連絡本部	堀井家	篠田部長
22（水） 23（木） 24（金） 25（土）	 7 合目天幕設営・技術訓練 本峰往復 11:30 事故発生 13:30 死亡確認 18:00 吉祥寺に安置 18:30 大阪田村宅に打電 検死 通夜	夜大阪発 18:00 警察より電話連絡 20:00 現地より入電 21:45 遺族 4 名・部員 1 名現地へ急行 22:40 OB1 名現地へ 田村宅を連絡本部とする	 18:00 警察より電話連絡 21:00 部員 1 名うかがうも現地へ出発された后だった。	
26（日）		1:00 部長宅 OB 宅に打電 2:50 OB1 名現役 1 名現地へ 現役部員留守宅・体育会・在阪部員へ打電 8:30 学生課へ連絡員配置	 6:30 部員 1 名おくやみに訪問	

	9:30 遺族部員1名遺体対面 10:00 OB1 名着納棺式 10:45 OB1 名帰阪 12:00 遺体火葬場へ 13:00 火葬 13:45 大阪へ連絡 17:00 遺族・部員富士吉田発、2 名は残務整理の為残留 22:00 大阪へ TEL	12:30 細野へ TEL 13:10 沼津の西川 OB より入電 16:00 篠田部長より入電 18:00 学生課の連絡員引上げる 22:00 現地より TEL	9:00 森川学生部長・OB 現役 1 名訪問 10:30 大島 OB おくやみに	15:20 南小谷より打電
27（月）	病院・市役所佐藤氏・吉祥寺へ 12:00 残留部員大阪へ	6:40 遺骨帰阪 7:00 ステーションパーラーで現況報告 13:30 学生課へ挨拶 18:00 JAC ルームで葬儀打合せ 22:00 富士吉田より 2 名帰阪	5:40 在阪遺族大阪駅へ 7:30 遺族帰宅 15:00 酒井・西垣・前沢・木村 堀井宅へ 通夜 葬儀打合せ	5:35 帰阪
28（火） 29（水） 30（木） 12/1（金） 3（日） 4（月） 5（火） 6（水） 7（木） 8（金） 10（日） 12（火） 14（木）	堀井家にて告別式 18:00 OB をまじえて反省会、於学生部会議室 リーダー会、報告会案内通知発送、顛末書同時に発送 初七日。部会（現役反省会） 工業教員養成所事務室へ死亡届提出 リーダー会（報告会準備・其他残務整理） 公式報告会 リーダー会 リーダー会 十四日（前沢・横尾 遺宅）部会・リーダー会 現地への礼状投函 OB と懇談会 リーダー会 廿一日（田井・田村 遺宅へ）			

会　計　報　告

責任者　高　田　邦　雄

三十六年度は、夏山合宿、富士山行に於さまして、不名誉な遭難を起し、その収拾の為の出費を唸出すべく、極力、現役部員から徴収致しましたが、やはり負担致しかね、先輩諸兄に御援助をお願い致しました。

多大な擲迷惑をおかけしたにも拘らず、快よく御協力下さいました事を深く感謝致します。お蔭で収拾に導く事ができましたので、御報告させて頂きます。

〔総支出額〕

夏山・富士山行出資合計　　一三八、二八〇円

〔収　　入〕

現　役　負　担	八九、七九一円
先　輩　寄　附	六〇、〇〇〇円
堀井家より寄附	五、〇〇〇円
（計）	一五四、七九一円
〔残　　高〕	一六、五一一円

尚、残高一六、五一一円は遭難対策基金として積立てさせて頂きました。

富 士 追 悼 登 山

参加者　堀井君の御両親、吉川吉文君（堀井君の友人）
　　梶木、山本、豊坂、OB 広瀬、田井、前沢、
　　以上九名

期　間　一九六二年八月二十六日～二十八日

記　録

八月二十六日、夜大阪発。台風の影響で列車が取り消しになり、一時間遅れて大阪駅を発つ。

八月二十七日、富士、富士宮を経てバスで富士吉田に。一入る。東海道線の延着のため予定よりも四時間遅れて、前夜より来ていた前沢と落ち合う。タクシーで馬返しまで行き、そこから登り出す。台風の直後なので、登山者がほとんどなく、五合目の佐藤小屋までは比較的眺望もきゝ、追悼登山ではあるが、爽快な登りであった。日頃山に登っている私達よりも、堀井君のお父さんやお母さんの方が植物をよく知っておられるのに驚く、佐藤小屋で休憩の後、お中道よりツバクロ沢に向う。夏のツバクロ沢は荒涼としたガレ場で、一つ石を落すと囲りの石が全部落ちてしまいそうな所だった。

お中道から少し登ったところでケルンを積み、花と線香と、生前堀井君の好きだったビールを供えて冥福を祈る。夕暮れの迫る頃、後髪をひかれる思いで往路をひきかえす。

五合目佐藤小屋泊り。

八月二十八日、朝佐藤小屋を出て七合目附近まで登る。以前お父さんはよくハイキングに行かれた旨、三〇〇〇米まで来たのは初めてだそうである。自分が山に登ってみると皆さんが山にひかれるのがわかるような気がするというお話を聞くと一層堀井君を失ったことに対する責任を感じる。

午後は富士吉田に下り、昨年色々お世話戴いた富士吉田市観光課の渡辺課長さんの所にお礼に伺う。富士吉田で解散。お母さんと田井、前沢は急行”富士”で東京へ出て帰路につく、お父さんと吉川君と広瀬の三人は御殿場を経て沼津へぬける。山中湖で途中下車すると暫くして雨が降り出す。昨年十一月この附近から見た富士は新雪に夕日を浴びて、これが遭難のあった山かと思う程美しかったが、今日は雨雲にかくれて、何処にあるかすらもわからなかった。（広瀬記）

＝＝ 1960 年 度 報 告 ＝＝

1960 年夏山合宿
—— 千丈沢をベースとして ——

広　瀬　貞　雄

昨年にひきつづき千丈沢で合宿を行った。参加人員は三十八名で期間は七月二十日から十日間の予定であった。このような多人数の合宿には当然二パーティ以上の分散合宿も考えられたが、結局一ヶ所に集中する事になり、そのかわり行動半径を拡大し、単なる基礎的トレーニング以上の研究を課することにした。

（1）合宿地選定について

昨年の合宿の結果、千丈沢周辺はあらゆる意味で、未開拓のところが多いと思われた。そしてこれを更に開拓しようという意欲があった。また剣沢、涸沢の混雑な雰囲気をさけたかったのである。

（2）目　　的

A・新人部員の基礎技術・中堅以上の強化

B・更に千丈沢周辺・北鎌尾根を一つの山系として開拓研究するため総括的な登攀を行う。従って岩登りはこの一部にすぎない。

C・中堅部員の課題として将来の展望もかね次の方面の別動隊を出す事にした。

1．南岳附近にキャンプして、北穂・槍間の飛弾側の斜面の偵察及びその登はん。

2．中東沢の遡行。

但し、これらは必ずしも差し当っての偵察の必要から出たのではなく、以上多様の目的の達成に期待が持たれたわけである。

（3）参加者

CL 田村、SL 広瀬、SL 佐藤茂、大工原、笠松、保母、五百蔵、西垣、佐藤毅、金子、打出、酒井、前沢、白井、米沢、宇野、高橋、大角、森、三沢、梶本、浜田、清水、三田、山本、岡久、辻、笠原、藤森、桑原、横尾、高田、浅井、池畑、岡田 OB、野田 OB

（4）行動概要。

七月十五日　先発隊、出発。

七月十七日　本隊、大阪発。

七月十八日　湯股に幕営。

七月十九日　千丈沢にキャンプを張る。

七月二十日　雪上技術の練習。

七月廿一日　八パーティに分れて出て行ったが、田村 L が落石事故に遭い負傷し、上高地へ下った。

七月廿二日　広瀬が CL、佐藤茂が SL となって合宿を続行する事になった。

廿二日～廿三日　A、C、D 稜、小槍を岩登りの対象とし、又奥丸山、双六、天井沢等広く歩く。

七月廿四日　佐藤茂以下五名の南岳パーティと西垣、白井、金子の中東沢パーティ出発。

他の者がこれをサポートして行った。

廿六日　中東沢パーティが下る事に成功してテントに帰って来た。

廿八日　南岳パーティが帰って来る。

廿九日　千丈沢合宿を解散し、各々の縦走パーティに別れた。

（5）あとがさ。

夏山合宿を終ってふりかえってみるとき、検討すべき点が多々ある。

１．CL の田村が合宿二日目に負傷して合宿から脱けたが、SL の広瀬が代って合宿を続け、一応最初の予定と目標をほぼ達成することが出来た。しかし CL が合宿早々に脱けなければならなかったことは大いに問題である。

２．三〇数名の大合宿であり、落石の危険から、かなりの範囲の登はんを計画から除外したので、単に岩場トレーニングの見地からいささか手狭な感がした。夏山合宿に於て基本的なトレーニングに加えて新しい岩場、その他の開拓をはかるのは負担が大きく危険を伴う、例えば新しい岩場は必ず落遷の危険を伴う。その為に最初独標を中心に千丈沢側を試登することを目論んだが、断念せざるを得なかった。

３．山系の研究という点では別動隊の行動で示されるように効果があった。黒部川を遡つて来た阪大山岳部の次のテーマとして、槍ヶ岳を中心として、硫黄尾根の赤岳、弓折岳、中崎尾根、南岳、西岳、常念山脈、北鎌独標を結ぶアラウンド槍あるいは槍ヶ岳を中心にした綜合登山といったアイデアがこの山系の研究の背景にあった。色々な事情でこのプランは日のめを見なかったが、いつの日かまた問題にされてしかるべきと思う。この合宿では赤岳→千丈沢、中崎尾根上部、千丈沢→独標→天井沢日大小

屋附近、日大小屋→西岳、横尾尾根取付、及び上部、南岳西尾根上部についてかなりの資料を得た。

４．毎年問題になっている夏山合宿のあり方というものについても一考を要する。いったい合宿そのものに重点をおくのか、それとも縦走の成果により大きな期待をかけるのか。また合宿はどのように運営すべきかという点についてである。この千丈沢合宿では、各コースを新人向、上級部員向、長く歩くコースの三つに分けて、特に新人に対しては、独標沢より北鎌の稜線歩き、天井沢、中崎尾根、奥の丸山往復、A 稜、小槍、双六往復をさせた。しかもなるべく個人差を作らないようにする為にしたので、たまたま新人のお守りに当った上級部員はかなり疲労した様である。雪渓技術の訓練についてもかなり意識的に階梯をくんでみた。ゆるい斜面を歩くことから始めて、踵をきかして下ること、アイゼンをつけての歩行、滑落停止、グリセードと進めて行った。この練習において強調したいことは、岩場での静的なバランスに対して、動的なバランス、すなわち、いつも安定と不安定が繰返えされて全体として安定でなければならぬということ、絶対にこけてはいけないということ、完全にバランスをくずしてしまうと、たとえ滑落停止の稽古が充分つめていても、実際にはそんなに簡単に止れるものではないということ、グリセードは絶対に安全であるという見通しの上に立って行うこと、実用技術というよりは壮快さを味う種類に属するということ、etc.である。練習時の安全装置というのは従来当部でそれ程考慮が払われていなかったうらみがあるが、今回は。ステップを切り、ザイルをはるなどの方法を試みた。今後更に改善せねばならぬ問題である。

夏山合宿そのものは、夏山までのトレーニングの総仕上げとして欠くことはできない。一つの行き方として、夏山までのトレーニングが充分であれば、夏山は縦走だけでもよさそうであるが、北アルプスのあのスケール、雪渓そして一定期間合宿することが可能な点、やはり欠くことはできない。定着合宿の内容は、グレーディング付を行ない、毎年検討を加えつつ、よい意味のマンネリズムを打ち立てることが望ましい。そして縦走は、定着合宿が基礎的な面を強調するのに対し、応用として、ただ漫然と縦走するのでなく、意欲的なものにして行きたい。その点で、酒井らの立石パーティは非常に好しかった。

1960年冬山合宿
―― 南 ア ル プ ス ――

田　村　俊　秀

今回の冬山には次のような背景があつた。

１．海外遠征を控えて特に慎重な山行が望まれる。

２．遠征準備の為かなりの上級部員が参加出来ないかもしれない事。

３．同じく準備の為、山行期間が限られる事。又南アルプスを選んだのは、

(1) 以前から南アルプスに興味があった事。

(2) 比較的安全な範囲でスケールの大きいコースがとれる事。

(3) 北アルプスより行動可能な日数が多い事。

合宿の形式について

(1) 一支稜や岩稜よりも一人一人が大きな機動性と体力をもって雪中を広く行動する事。

(2) 日程のかぎられた者や忙しいOB達でも最小限の参加が出来る事。

(3) 南アルプスの冬の概念をつかむ事。

以上の理由から部員独自の判断と意欲に期待する分散合宿とし、次の五隊が南アルプスを広く抜渉することになった。1. 両俣隊（一〇名） 2. 千枚赤石隊（五名） 3. 西俣隊（七名） 4. 北沢隊（四名後にOB三名） 5. 鋸隊（二名）

当初我々としてはいささかセーブした積りであったが例年の南アルプスらしからぬ悪天に鍛えられ、まずまずの合宿であった。又遠路九州からこられた関本OBを始め、岡田、野田、広橋の各OBの参加がえられたのは大きな収穫であった。しかし短い期間に、欲張ったプランをもちすぎた感もある。なお、このプランは、八月の佐藤等（三伏以南)、十月田村等（三伏以北）の偵察と、昨年冬の野田等による白根三山縦走の成果をもとによる白根三山縦走の成果をもとにした。

１．両俣隊。

メンバー　L田村、広橋OB、打出Ⅲ（装備)、黒木Ⅲ、浜田Ⅱ（食糧)、藤森Ⅰ、山本Ⅰ、笠原Ⅰ、辻Ⅰ、高田Ⅰ。

目標。前半北岳・間岳。後半北沢峠周辺。

五人用テント二張携行、食糧十日分。スキー無し。

行動

十二月廿四日　大阪発。

十二月廿五日　雨後雪。戸台－丹溪山荘－北沢峠－長衛小屋。黒木、川にはまる。

十二月廿六日　曇後晴。長衛小屋－野呂川－両俣小屋

このコースは今冬我々が殆んど始めてらしく、終始障害物競争のような倒木越えとラッセル。野呂川の氷結（最も危ぐしていた）は不完全で、危険はないようなので月明りを利して強行し十時小屋到着。所要時間十五時間で、無雪期間の三倍。全員全く腰をぬかし。辻は途中で荷をデポ、高田はピッケルを落した。

十二月廿七日　晴後曇。昨日の強行がたゝって本日は休養、午後から薪取り。田村、打出、広橋 OB は野呂川乗越を往復。高田はピッケルをひろってきた。

十二月廿八日　雪。田村、広橋、打出、高田、山本は右俣をつめ三峰岳下にテントを出した。黒木等はサポート。意地の悪い倒木と、ふかふかの雪のラッセル。七時発。四時テント設営、サポートを帰す。

十二月廿九日　雪、間岳をアタックせんものと、吹雪の中胸までのラッセルを 5 時間、三峰岳と間の岳のコルとおぼしきに出たらしいが、風雪にまかれて退散した。黒木等は両俣から北岳をアタックするはずであったが停滞。

十二月三〇日　雪。日程が限られているので、両俣へ撤収。黒木等は停滞。どうも北西季節風の偉力強大で南アまで悪天をもたらしているらしい。噂にきいた北岳の甲府側と異り、ここはまるで、南アの吹きだまりの様に雪が積る。（後で西俣隊もすごいラッセルに苦しんだときく）両俣小屋は、寒く、わびしく、一年部員達はわななきかぼそい歌をうたっていた。

十二卅一日　晴。北沢小屋へひきあげる。来る時とうってかわり、野呂川は美しく氷結し、アイスパレスの廊下のよう。おまけに誰かがラッセルしてくれていて六時同程で帰ってしまった。北沢峠附近はテントのオンパレード。六〇まで数えて止めた。一番みすぼらしいテントから玉井が顔を出し、「ナンダ。モウカエツタカ。」関本 OB 等も顔を出して急ににぎやかになった。

一月一日　晴、元旦でめでたいので OB 達と談笑しながらソロゾロと甲斐駒を往復した。摩利支天がすばらしい。風が強いので浜田の鼻が白く氷結し、大騒ぎとなった。

玉井と米沢は、鋸岳をアタックすべく七合小屋に入った。

一月二日　晴。二隊に分れてアサヨ、仙丈を往復、まるでハイキング。北岳、塩見まで晴れ上り、人並みにくやしかった。

一月三日　晴。　撤収。

以上失敗したが、期間の上から、本来無理であった。一年部員は、前半、後半の鮮かな対照から冬山の多様性を知ってくれたろうし、ラッセルもよかった。

（田村記）

２．千枚赤石隊。

メンバー　佐藤（4、L）保母（4）酒井（3）前沢（3）梶本（2）。

期間　十二月廿五日～一月三日

十二月廿四日　大阪発、

十二月廿五日　雨。田代入口（九時）－堀沢小屋（十二時三〇分）。相当の土砂降りで飯場のテントにとめてもらう。

十二月廿六日　快晴。堀沢小屋（八時）－転付峠（十時）－二軒小屋（十時五十分）－同、昼食後出発（十二時）－マンボウ頭下方にテントを張る（十五時二〇分）。西俣パーティは二軒小屋に荷をおいてテント地まで我々のサポートをしてもらった。

十二月廿七日　晴後曇。出発（九時）－千枚岳（十五時〇四分）。午後から曇りとなり弱い風雪の為に又途中まであったトレースが全く途絶え相当に深いラッセルとなった為に、千枚岳のピークまで行けず少し下方でテントを張る。

十二月廿八日　吹雪。停滞。

十二月廿九日　吹雪。出発（八時四十五分）－悪沢岳（十一時〇五分）－テント（十一時十五分）。前日と同じ悪天候で悪沢岳のピークを少し越した所で強風の為に顔面に軽い凍傷を起したのでただちにテントを張り逃げ込む。

十二月三〇日　停滞。非常な強風でテントのポールが曲り、心細い。

十二月卅一日　吹書。出発（十一時）－荒川岳（十二時）－テント（十三時二〇分）。ガスの為と、雪崩の危険をさけて荒川岳の下りは夏道をさけ稜線を行く。

一月一日　晴後ガス後晴。停滞。朝晴れていたので出発の準備をしたがすぐに濃霧となったので停滞する。しかし二時頃晴間が見え出した。

一月二日　曇後快晴。出発（十三時）－大聖寺平（十四時）－赤石岳（十六時三〇分）－テント（十七時十分）。午前中相変らずガスと強風であるが準備を整えて待機。午後から快晴となり今回の山行で始めての“来てよかった”の気分になる。赤石岳のピークを下り切ったあたりでテントを張る。

一月三日　晴。出発（八時四十五分）－百間洞小屋（十時）－大沢岳コル（十二時）－大沢度（十六時）－木沢（二十一時十五分）。大沢岳の登りは実に堂々のラッセルが

あり助かる。大沢渡－木沢間の三十八 km、夜の軌道を歩くのはうんざりするどころの騒ぎではなかった。

　天候に比べよく行動したと思う。北アルプスがドカ雪と悪天の戦いならば、南アルプスは強風にふかれながら稜線をドンドン縦走することだ。　　（前沢記）

３．西俣隊。

メンバー　L 西垣、白井、三沢、三田、清水、横尾、岡久

期間　十二月廿五日～一月二日

十二月廿五日　雨。荒川三山を縦走するパーティと共にびしょぬれとなって保利沢小屋へ入り込んだ。

十二月廿六日　晴。伝付峠をへて二軒小屋へ。雪は峠でひざぐらい。赤石へ行くパーティをマンボーの頭の下までサポートする。

十二月廿七日　晴。二軒小屋から小西俣まで立派な道がつづいている。昼すぎ小西俣についたので、二手にわかれて塩見、悪沢のルートを見に行く。

十二月廿八日　吹雪。小石尾根より悪沢へ行かんと、小屋のすぐ前のつり橋を渡った所から尾根に取付いて森林帯の中を急登する。二千三百ｍあたりからさらに雪が深く、おまけに吹雪が強くなってきたので、新蛇抜沢の頭までのぼって引きかえす。

十二月廿九日　（吹雪）六時吹雪がおさまりかけたので悪沢にむけて出発する。だが 1 ピッチ登った所で又吹雪き、全員退却。

十二月三十日　吹雪。停滞。小屋は四棟あり、事務所が一番しっかりしている。電蓄もあったが残念な事に電気がない。

十二月世一日　曇。悪沢をあきらめて三伏峠へ向う。雪はどんどん深くなり、予想以上に時間をくい、一時すぎ西池の沢出合の小屋につき泊る事にし、空身で三時間程ラッセルにゆく。

一月一日　晴。昨日ラッセルしたところをあっというまに通りすぎる。荷を持ってのラッセルはなかなかはかどらない。やむを得ず二組に分れて、一組が荷をおいてラッセルし、他の一組がラッセルしている間に荷をとりに返る方法にする。空身でも雪は胸をこえ、その上倒木が多く、その上に雪がつもって雪の壁がいくつもできている。目の前の沢がなかなか曲れない。薄暗くなっても三伏小屋へつかず、月光、光々たる中に十九時すぎやっと小屋にたどりついた。

一月二日　晴。どこかのパーティが残していったパンを頂戴して出発の用意をしていると峠の方から二人づれが下りて来て「パンが残っていませんでしたか。」と来た。頭をかいてこちらの残りのクラッカーをおいた。三伏峠は冬テンの展覧会。あとは気持のよいラッセルのついた道を沢井へ走りおりた。途中、東大の遭難者と会う。遺体をおろす人連は皆顔面凍傷にやられていた。

　最初は欲張って三伏峠につくまでに、悪沢と塩見をのぼるはずだったが天候にめぐまれず、ドカ雪と倒木で三伏峠につくのがようやくであった。　　（西垣記）

4.　北沢隊。

メンバー　笠松 L、金子、宇野、桑原。

期間　十二月廿六日～三〇日、

目的　時間的都合がつかず全期間合宿に参加できなくても、一日でも山に入った方がよいという意見に従って、四人がより集つて一パーティを作った。

行　動　概　要

廿六日　晴。数人パーティが一緒に戸台で下りた。峠をこえて北沢小屋に向う途中樹々の間に北岳が望まれた。この山行中北岳をみたのはこの日だけである。北沢小屋には管理人はいない。我々のテントは峠と小屋の中程の平にひらけた樹林帯の中に決めた。水場はテント地から少し北沢小屋の方に下った所。沢に水が流れていた。

廿七日　晴。五時三〇分起床－七時四〇分出発－十一時十五分仙丈岳頂（ガス）－十一時四〇分（下山）－十二時十五分樹林帯－十三時十分テント帰着。樹林帯をぬけたとたんに西風にあおられたので感覚的にはかなりきびしく感じられた。トレースもあり、ある程度しまっていてもぐらず、雪はややしめっているが固りにくい。

廿八日　高曇り。－吹雪。五時（起床）－六時四〇分出発—八時仙水峠－九時十五分駒津岳－十時十五分駒ヶ岳頂－十一時十五分駒津岳－十二時仙水峠着－十二時五〇分北沢小屋－十三時テント残着。きつい西風が小雪をはこんでくる仙水峠に立てば、摩利支天が所々に雪をつけてみえる。ここにも登るルートがあるという。一時々晴間がみえていた。駒の上に出れば猛烈な風、たまりかねてカンパンをくわえたままとんでおりた。予備食糧もなかったし、天気もよくなかったのでアサヨ行はやめて下る。同じ仙水峠までくるのなら一度に二つ片付けてしまおうか等と話し合っていたのだが。

廿九日　高曇り。四時五〇分起床－六時三〇分出発－（テント地は無風）－七時四〇分仙水峠－九時二〇分アサヨ登頂－十時峠－十時四十五分テント地。森林帯をぬけれ

ば例によってすごい風。地吹雪。はたしてピークをふんできたのかどうか、テントに帰ってからももめた。夜遅くまでカードをして遊んだ。解禁煙した。
三十日　曇。十一時十分テント地出発－十二時四十分丹溪山荘着－十三時十分同発－十四時五〇分戸台。一日おくれて今日の十時入れかえのメンバーがついた。岡田 OB、玉井、米沢である。丹溪山荘では関本、野田両 OB に会った。廿九日から三十日にかけてどっと登山客がおしかけてきた。我々のテントのまわりにもすごいカマボコ天がはられた。
後記。　私自身も南アといわれる山にくるのははじめて。テントを一ヶ所にすえて空身で動いたせい心あるが、一言でいうと手軽すぎた山行であった。アイゼンはつけた方が快適なのではいたがザイルはサブザックにしまつたきり。晴れた日の風の強いのが特に印象に残る。我々の隊は合宿といえない程ささやかなものであるがオール・ナッシングより、僅かでも参加する事に意義があると思っていたし事実風に吹かれて満足して帰った。　（笠松記）

5.　鋸岳隊。

メンバー　玉井、米沢。

一月一日　晴強風。甲斐駒頂上でサポートして頂いた OB の方や新人に別れると急に重くなったザックをしょって六合目石室に下り始めた。風が強く、雪がしっかりしていないので難儀する。七合目の針金の所ではナイロンのミトンの為すべってしまった。六合目石室はかなり雪が吹きこんでおり、風通しも良いので、カートンボックスを下に敷き、ラーメンで一息入れてからツエルトを張った。三つ頭の方へ偵察に行って見たがトレスがあるのでやれやれと引返した。なさけない事だが僕は大阪を出る時からここのラッセルをひどくおそれていた。気温が下ってカメラが凍つてしまう。石室には僕等の他に二パーティ、六合の頭にテントが三張程ある。
一月二日　晴。三時米沢に起されるととても寒い。ツエルト中霜だらけである。五時二〇分アイゼンを岩にきしませて岩登り。長野県側はオーギヒラキからの風であまり雪がついていない。三つ頭の手前でちよつと休み、キジを打つ。七時三つ頭。ブッシュの中を山梨側をまいて風がするどく吹きぬけている中の川乗越へ下る。この鞍部から第二高点へは急なルンゼ状の雪面で気分が悪い。急いで登り、ブッシュをぬけると第二高点に着く。

大ギヤツプをさける為に中央稜を左に下り、薄い雪の乗ったガレを丁寧に下ると圧倒的なゴルジュの底に着く。風穴側のバンドの下で一回目の昼食。風穴は針金が半分程切れていたので念の為にザイルを出して二ピッチで稜線に出た。雪がしまっていないので帰途を考えると心配である。風穴からはブッシュの中を急に下ると小ギャップの底に出る。ここでも慎重に一〇m 程スタカットで登る。九時四〇分第一高点に着く。二回目の昼食。小ギャップは帰りは山梨側を懸垂する。風穴は三ピッチだけザイルを使う。あとは何でもなかったが登り下りに疲れて十四時廿八分石室に戻る。九時間で往後できたのはラッセルのあつたおかげである。

一月三日　曇。余った食糧を雄嶺の人にあげて第四尾根を丹溪山荘へと下る。七丈滝は完全に凍結している。戸台川の一合目出合からはところどころ凍った川を歩く。山荘までは意外に遠い。米沢がズボンを完全にさいていたので他のパーティが近づくと僕等はぴったりと並んで歩いた。　（玉井記）

1961 年春山合宿

－八つ峰を末端から－

酒　井　次　郎

Ⅰ・前書き。

木年度、春山の計画にあたり色。々なプランが立てられたが、結局剣岳八ツ峰末端より本峰への完登をめざす計画に決定した。これは、昨年来の我が部の懸案であるのと同時に、特に本年はヒマラヤ遠征中の中でもあり、余裕のある行動を必要としたからである。

なお昨年度の経過を略記すると

1. 三十四年秋　ボッカ
2. 三十五年春　悪天候と偵察不充分の為、三稜に登路の見通しをつけたにすぎない。
3. 三十五年五月　四の沢から三稜に取付いたか雪質が悪く中止。
4. 三十五年秋　四の沢から三稜をへて一峰までの無雪期トレース。

Ⅱ・計画概要。

真砂沢出合に ABC を設け、次いで八ツ峰末端より取りつき、尾根の途中二〇〇〇m 附近に AC を建設、アタックはここから八ツ峰を縦走して剣本峰のサポートテントに入り、後単独で早月尾根を下る。その間、ABC では一峰東面の四本の尾根のトレースをする。又、剣御前小屋 BC には一年が主体として入り、奥大日往復及び本峰サポート・テント建設の役目を果たす。計画遂行に当っての問題点は、

1. 千寿ケ原から剣御前までの長いアプローチ。
2. 急峻な一峰東面における雪崩。
3. アタック隊の大きな負担。

等である。

Ⅲ・行動記録。

(1)　アプローチ期間。（千寿ケ原→剣御前小屋）

三月十三日　先発の打出、高橋大阪発。

三月十四日　本隊大阪発。

先発。美女平から三ピッチでビバーク。

十五日　晴。千寿ヶ原・美女平間二回に分けてボッカ。先発。追分小屋。
十六日　晴。六時三〇分美女平－十四時五〇分立山荘－十六時三〇分美女平。半量を立山荘にボッカ。スキー不慣れの為予想外に時間がかかる。先発は天狗。
十七日　快晴。六時五〇分美女平－十三時四十五分立山荘－十七時天狗。弘法まで歩く。クラストと前日のトレースのため快調。追分より美松荘をへて天狗にいたる。先発は房治小屋。
十八日　快晴。七時天狗－八時立山荘（スキー練習）十時十分出発－十二時天狗－十三時出－十四時房治－十四時三〇分出—十五時三〇分天狗着。
　天狗－追分間はスキーで下ったが、スキーを二本折り二本流す。房治で先発と合流。先発は乗越までトレースして房治に戻る。
十九日。停滞。
二十日　晴。七時三〇分天狗－八時十分房治－九時三十五分出－十一時四十五分御前小屋－十二時四〇分出－十三時二十分房治－十四時五十五分出－十六時二十五分御前小屋、
　全員御前小屋に集結し、これより各パーティに分散する。
(2)　分散期間。
イ・真砂パーティ。
　L 酒井、広瀬、高橋、前沢、佐藤、五百蔵、金子、白井、梶木
三月廿一日　曇後晴。一四時二〇分出－五時四十五分真砂沢。
　約一時間で剣沢を下る。平蔵、長次郎からのデブリが出ていたが、剣沢はよくしまつており、あまりもぐらなかかった。一峰東面の雪の状態よく、又、好天が続きそうなので、計画を変更して、AC を出さず、ABC より直接アタック二名を出し、二・三のコルまで二名がサポートし、又、残り五名は東面を知る為 AC 予定地まで同行する事にする。

◎アタックの記録
　　アタック　広瀬、高橋
　　サポート　前沢、五百蔵
三月廿二日　晴・夜より風雪。
　真砂平キャンプ地三時三〇分→四の沢入り三時四十五分→四の沢のど四時十五分→三稜岩穴四峙五十五分→天幕予定地六時十分→昨年引返し点七時二〇分→一峰頂上九

時十五分→ⅠⅡのコルで中食（十峙三〇分～十一時廿五分）→二・三のコル十四時二〇分→Ⅴ峰で食事（十六時十分～十六峙四〇分）→ビバーク地決定十八時十分。

昨年五月ヤバかった岩稜は例年にない雪の為かえって、容易に通週でき、その上の引返し点も何なく過ぎてしまった。

そのあとは昨年の推察通りだった。兎に角たんたんとした登りであった。一峰に出る直前、四稜の一番後の処は、時間的にかなりおそく少し気味が悪かった。

ここで我々の考えが甘かったのは、かえって八つ峰そのものに対してであった。特にⅠ峰、二・三の窓の間は急な斜面、それも長いやせた尾根の連続であった。これは昨年五月の偵察で明らかであったにも拘らず、左程問題にしていなかつたのは考えの甘さを示すものであろう。

サポートの前沢、五百蔵は、ⅡⅢのコル迄来てくれたが彼等のサポートがなければⅠ峰、ⅡⅢの間も動けなかったのではないか。全く心から感謝する。

ⅡⅢの窓からあとはⅣ峰の下りが急でであった。普通に考えてこれは懸垂すべき所である。Ⅴ峰まで来ると、空腹に耐えられなくなつて、二回目の食事にした。ⅡⅢの窓でサポートと別れる頃から雲行きがあやしかったが次第に風が出て来た。

Ⅴ峰から懸垂すべくのぞいてみたら二～三回の中継か必要なのと、最初のピンがない。途中でテラスにヒヴァークというのは困るので、長次郎側をまいておりる事を考えた。しかしのぞいて見ると全部シユークリーム状でまず不可能。やがて日も暮れかけて来たので一応Ⅱ・Ⅲの窓に引き返してⅤⅥのコルに行くか、そこでビバークするか迷った挙句、ビバークに決定。Ⅴ峰三の窓側の斜面に位置決定。本峰から懐中電灯の合図あり、こちらから応答する。ツエルトを張り終った頃より雪が降り出した。

三月廿三日　風雪。

停滞。朝方少し。ほんの少し晴れ間がみえたが、あとは一日風雪。足首までしかもぐらなかったのが八ッ峰の稜線へ出るのに腰までのラッセルに変った。天気がいつ回復するかわからないので食い延ばしをする事を考えた。昨夜もそうだったがマッチが直きにつかなくなる。携燃はうまく燃えない。通気性がないので、すぐ息づかいが荒くなる。色んな事をするのがめんどうくさい。従って水はつくれない。運動を兼ねて雪かきに表へ出る。キジは二匹うった。夜になって冷えこんでくる。これは天気がよくなって来た証拠である。

三月廿四日　晴。Ⅴ峰八時二〇分→Ⅳ・Ⅴのコル八時三〇分→長次郎の出合九時三〇分→真砂テント地十一時。

Ⅴ・Ⅵのコルへおりられない事はわかったが一度長次郎へ降りてあらためてⅤⅣの窓より上半をやりたいという気持に悩む。とにかく引返すのがたまらなくつらかった。上半の様子を見ると登れぬのは自明であるが、尚かつ気がかりであった。無事に引返す事が第一と考えて何度かぐらついてたが引き返した。しかし帰る時には殆んど水を飲んでいない為に二晩もビバークしている事によって体がまいっている事はヒシヒシと感じられた。下る際、本峰の連中はずっと見ていてくれた。何とも言えず有難かった。

疲れてもいたし、又引返したというひけ目からじつに馬鹿気た事なのだが、テントに着くまで声をかける気にはなれなかった。幸か不幸かテントの連中は黒部別山へ行っていた。

一方真砂パーティは、先日五〇cm の積雪があったので一峰東面はやめ、七名黒部別山へ行く。ABC 発八時五十五分—黒部別山一時－ABC 着十五時十五分。

ハシゴ谷乗越へ向ったが、沢をまちがえ、黒部別山よりに登った為、尾根へ取付く直前、雪庇につっこみ、二名が約二〇〇m 流される。

アタックがⅤ峰まで行きながらⅤ峰を下れずビバーク二日の後 ABC に帰った事を知る。アタック出発当時は昨年の事も考えると雪の状態は最良であり再度のアタックもそれ以上望めないと考え、アタックは断念する。又一峰東面のトレースも今後長く天候が悪化しそうなので打切り、ABC を撤収する事に決定する。

三月廿五日　曇。ABC 出十五時三〇分－御前小屋 BC 着二〇時三十五分。

ロ・本峰隊。打出、保母、三沢、浜田。

三月廿一日　晴後高曇り。乗越－本峰。

前夜は殆んど寝ていないのでふらふらした。四人共頂上についた時にはバテていた。カニの横ばいもたいした事はなかつた。頂上のすぐ北にテントを張った。田村、田井が頂上までサポートしてくれた。

三月廿二日（快晴）逆ボッカ)。

八ッ峰はトレースが完全についているので、万一アタックが来ても大丈夫だったので逆ボッカした。前剣の下まで。昼過ぎてⅣ峰附近にアタック隊を発見。夜電池で確認した。アタックはⅤ峰の上でビバーク。

三月廿三日　吹雪ガス。停滞。

晴の予想が見事にはずれ、朝から吹雪。八時三〇分アタック隊を気遣い、八峰に向けて出かけていこうとしたが、粉雪で危険なので、引返した。一日中八峰を注視したがアクッタの姿は発見出来なかった。心配した。

三月廿四日　快晴。停滞。

サラサラの粉雪が五〇cm 程つもり、行動出来なかった。十時頃、ⅤⅥのコル附近から下降するアタック隊を発見無事を喜ぶ。台湾坊主か発生したので明日真砂沢パーティが撤収したら、我々も撤収する事にする。

二十五日　高曇り。停滞。

パッキングをして、テントの内張まではずしたが、剣沢にトレースがなく、真砂沢が撤収したかどうかもわからず、判断に迷ったが、停滞とする。

二十六日　曇後風雪。停滞。

九時の予報で、北高南低の気圧配置となり悪天が長びきそうな気配となる。成城のテントが撤収し、うまいビスケットを置いていってくれた。気温が異常に高い。

二十七日　雪。停滞。

異常に高い気温に驚きつつ、ポンを打っていると、粉雪がしんしんと降りつづき、テントの半分まで埋った。いくら雪のけしきも、まわりに土手が出来てあまり効果がない。

二十八日　吹雪後晴。停滞。

一夜降りつづいたドカ雪で朝おきるとベンチレーターの所まで埋っていた。気温は下って来た。夜、快晴となり雲海が美しい。

二十九日　ガス後快晴。撤収。

積雪多く、動きたくなかったが又天気がくずれそうなので撤収を行う。停滞疲れで歩きはじめは息ぎれがした。鎖場附近はひどいラッセルで前剣頂上より少し剣よりのところでサポートに来た西垣、広瀬、金子、梶本に会いほっとする。剣御前ののぼりは雪崩の心配から、尾根通しにかかった。サポートがなかったらラッセルの為、もっと時間がかかっていたろう。乗越小屋でゆっくりと飯を食い星空をみあげながら雷鳥沢を下った。房治では皆が、歓迎してくれた。

〇頂上附近は動けそうで動けない所だ。その判断の基準によって行動は非常に異ったものとなる。今回はサポートが目的だから無理は絶対にさけた。

〇スコップとは名ばかりのジユウノウを持たされた為、除雪に苦労した。

○連絡方法を決めていなかったことは今回の最大の欠点である。難しいことだが研究の必要がある。

ハ・乗越パーティ

メンバー　L西垣、黒木、田井、清水、山本、横尾、高田、辻、岡久、浅井、大川、佐藤茂、田村、三田。

三月廿一日。黒木他新人五名前剣中腹までサポート。

BH 出発七時、前剣デボ点着八時四十五分、出発九時十五分、BH 着十時五十五分。

田井及び房治よりの田村は剣頂上までサポート。平蔵のコル十時三〇分、頂上着十一時四十五分、出発十一時五十五分、BH 着十四時三〇分。西垣他三名停滞。佐藤下山。田村房治へ。

三月廿二日。西垣、田井、他六名雄山往復。三名停滞。

BH 発七時二〇分、別山着七時四〇分、雄山着九時四〇分、出発十時十五分、BH 着十一時四十五分。午前中快晴風強し。午後風強くガス。

三月廿三日　風雪停滞。

三月廿四日　快晴。奥大日へ六名。五名サポート。BH 発七時十五分。奥大日ピーク、十時五分。雪洞を堀り始める。サポート隊は奥大日登頂後 BH へ。十二時雪庇の割目にぶち当り中止。十二時四〇分場所を替えて堀る。十五時三〇分完成。この頃より薄雲が出始める。

今日はラッセル深く、雪はしまっていないためワカンもアイゼンも変りなし。腰までのラッセル珍らしくなし。

三月廿五日。七時十分雪洞発、七時廿五分奥大日、七時四〇分雪洞着。八時十五分出発、十時四〇分 BH。

この日、台湾坊主と日本海の低気圧に挟まれて悪天候の続く見込みなので食糧は三日分残つていたが、大日に行かずに引きあげることにする。朝から急激に悪化して日本海に雲の山脈の押し寄せてくるのをみたが、結局一日中もつた。二〇時真砂パーティ帰着。

Ⅲ・撤　　収。

三月廿六日　雪。　停滞。

三月廿七日　雪。　停滞。

三月廿八日　雪。　停滞。

三月廿九日　晴。　九時十分発　房治着十一時十五分。

　剣本峰隊を除き全員下る。

三月三〇日　時。　スキー練習。

　剣本峰隊が撤収したので合宿を解散する。

☆　　☆
☆　一般山行報告　☆
☆　　☆

五　月

〇剣Ｉ峰東面第三稜

広瀬、佐藤茂、西垣、五百蔵。

〇後立山縦走。鹿島槍－朝日－北又。

里木、佐藤毅、酒井、金子、峰田。

〇海谷山塊

田井、玉井、三沢。

〇比良山新人山行

村井、大工原他新入部員。

〇立山山行

大工原、保母。

〇比良山

三沢。

六　月

〇涸沢－奥穂－前穂高縦山

三沢、峰田。

〇西穂－北穂－涸沢縦走。

梶本、浜田。

〇尾瀬

梶本他一名。

〇大山

三沢。

七　月

〇三俣蓮華－剣岳縦走

高橋、梶本、浜田、高田、横尾、浅井、岡久、堀井

〇後立山　針木―朝日縦走

五百蔵、米沢、三沢、山本、桑原、藤森、池畑。

〇立石周辺・薬師南稜バットレス。（後述）

酒井、西垣、保母、佐藤、黒木。

〇南アルプス南半縦走

佐藤、宇野。

八　月

〇祖母溪

黒木。

〇穂高岳山行

前沢、打出、白井。

〇薬師岳山行

篠田先生、徳永、西川 OB、広瀬、大工原、田村。

九　月

〇穂高岳……田村、保母、玉井。

〇八ケ岳……梶本。

十　月

〇南アルプス北半縦走

田村、大工原、山本、藤森、浅井、笠原、横尾。

〇穂高山行

佐藤、玉井、笠松、保母、酒井、佐藤、打出、梶木、三沢、浜田、峰田。

十一月

〇燕－大天井　新人雪上訓練山行

田村、佐藤、玉井、酒井、峯田、高田、桑原、横尾、杢中 OB、兼清 OB。

〇剣岳・偵察及びボッカ

高橋、西垣、白井、保母、打出、金子、黒木、五百蔵、梶本。

〇剣岳－平－針木縦走

田村、三沢、浜田、山木、高田、横尾、浅井、池畑。

１９６１年度報告

監　　督	木　村　裕　一
	広　橋　　茂
	岡　田　博　司

役　　員

チーフ・リーダ	酒　井　次　郎
サブリーダ	西　垣　圭　二
マネージャー	高　橋　雄　二
新　人　係	打　出　英　樹
岳　連　係	梶　本　孝　治
装　備　係	前　沢　祐　一
食　糧　係	白　井　達　郎
会　計　係	黒　木　隆　憲
体　育　会	浜　田　彰　三
記録・図書	三　沢　日出夫

1961 年夏山合宿

－剣一峰東面を中心として－

夏山合宿をここ二年槍ヶ岳千丈沢で行ったが今年は剣沢、真砂沢出合にテントを張り剣岳東面を中心に行われた。これは剣岳が豊かな岩と雪渓をもつと共に、我部がここ数回登はんを試みている八つ峰Ｉ峰東面の開拓を回指した。

参加人員は上級部員がかなり不参加の為、減少し、その構成も一・二年部員の基礎技術、二・三年の中堅部員のリーダーシップの養成に重点がおかれた。

アプローチは体力養成の点から、従来に比較してかなり強烈なルートである大日岳を越えて剣沢に入った。

合宿中は連日の好天に思まれ、Ｉ峰東面の沢・稜のトレースを初めとし、一年を対象に八つ峰、源次郎尾根縦走、中級部員は八つ峰側壁、チンネ、ジャンダルム等の岩登り、さらに内蔵助谷を下り黒部へ、大タテガビンの偵察も行われた。

だが二十一日チンネで岡久が転落、大窓で大川がスリップと、同時に二つの事故を起してしまった。特に岡久は大腿骨骨折という大けがで、チンネ中央バンドよりザイルでつり下すと言った大がかりな救助作業が行われた。この事故は当人の過失というより部の失敗である。又この夏山合宿の失敗だけに片付けきれない。

この合宿後、我々はいく度かこの事故の原因を論じた。その反省の中には岡久の場合を考えても、直接原因は一本のハーケンが抜けたのだから、単なる技術的な失敗と片付けるよりも、もっとその根底にある山登りに全般に関して我々の進み方、考え方が誤っていたという事である。それは山登りの大原則であるべき「step by step の登山」を忘れていたのではないか。言い代えれば、基礎技術も不十分な者が「さるまね的」な山登りに走ったということである。この点、今後のトレーニングの方法についてもかなり考えてみる必要がある。

リーダーメンバーも部員の力を過信していたのは失敗である。しかしこれはこの合宿のリーダーシップの失敗だけではなく、平常の部の運営を考えなおす点が多い。この事等、改めたいものだ。

なお合宿の後半は事故の後片付けに終始し、又、上級部員が帰阪したので縦走は少々予定を変更し、四パーティに分れて行われた。

合宿参加者

酒井（CL)、西垣（SL)、大工原、黒木、五百蔵、梶本、浜田、横尾、高田、辻、岡久、桑原、藤森、山本、笠原、清水、三田、大川、牧野、吉川、播本、柳井、秋濃、竹本。

行動概要

七月十二日　先発隊大阪発。。

十三日　本隊酒井ら二十名大阪発。

十四日　曇。小型トラックで称名一ピッチ手前まで入る。十一時発－大日平キャンプ十七時。

十五日　晴。大日平発六時二〇分－室堂乗越しにキャンプ十七時。

十六日　晴。出発七時―真砂沢出合少し下にテント地を作る十四時～十四時三〇分。

十七日　晴。新人雪上訓練。一の沢より・マイナービークⅠ峰へ。二の沢。三の沢マイナー側壁、Ⅰ峰へ。四の沢より八つ峰下半。

十八日　晴。二の沢より。マイナー。三の沢よりⅠ峰。四稜三の窓側偵察。八つ峰上半。源次郎尾根。チンネ。ジャンダルム。Ⅵ峰Ｃフエイス。

十九日　晴。四稜よりⅠ峰へ。一の沢よりマイナー。三の沢よりⅠ峰。チンネ。八つ峰上半。源次郎尾根。Ⅵ峰Ａ・Ｃフェイス。

七月二十日　快晴。晴天停滞。

七月廿一日　晴。源次郎尾根、本峰南壁。Ⅵ峰Ａ・Ｃフエイス。チンネ。剣尾根。ハシゴ谷より内蔵助谷、黒部。小窓周辺。チンネ上部Ｅクラック登はん中岡久転落。大窓にて大川スリップ。

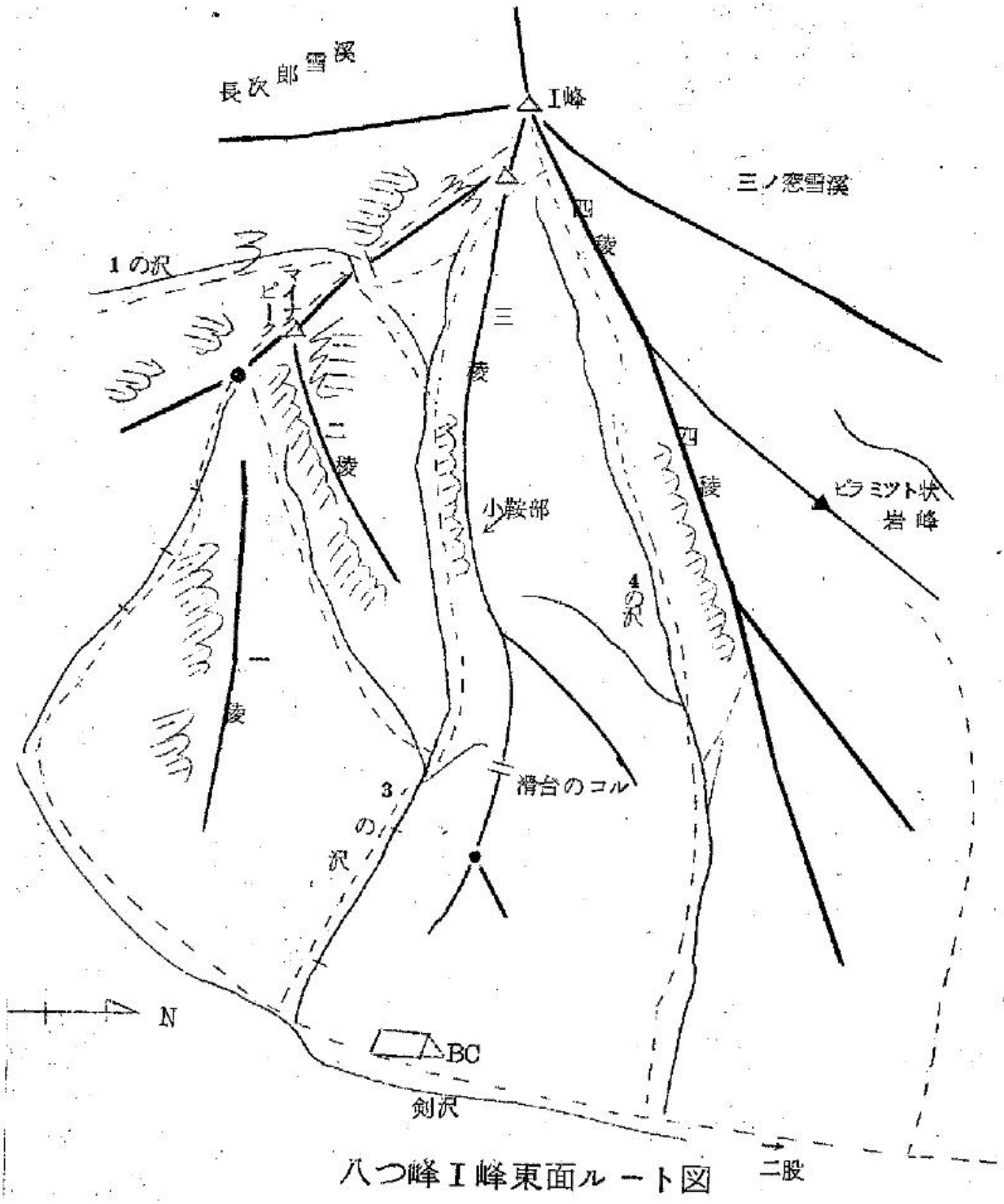
廿二日　晴。岡久チンネより二股へ。

廿三日　晴。岡久二股より剣沢小屋横へ。大川、大工原帰阪。

廿四日　曇。岡久、ミダカ原ホテルへ。

廿五日　雨。岡久、ヘリコプターで富山病院へ。全員美松荘より真砂沢テント地へ。

廿六日　晴。合宿解散。



八つ峰I峰東面ルート図

事　故　報　告

〔チンネの事故〕

七月廿一日　晴。

西垣、清水、岡久中央チムニーを登り、中央バンドで昼食（十時）。その後Ｇチムニーを登り、Ｅ クラックを岡久がトップでつり上げ登はん中、ハーケンが抜けて二〇m転落してザイルにぶらさがつて止る。この時、西垣がジッヘルし、カラビナ五個使用していた。岡久すぐに意識をとりもどし苦しがる。左稜線を登つてきた高田、藤森が

その場にきて、東北学院パーティの援助で中央バンドまで下る（十四時）。右足骨折で、かなり出血したが問もなく止る。チンネ上で事故を知った三田、梶本は左方ルンゼより中央バンドに登る（十四時）。その後梶本は剣山荘、剣山小屋に急報、警察、学生課に連絡（十九時）。同時に同小屋の金沢大学医療班に依頼し、真砂沢テントには東北学院パーティに伝言を依頼する。

チンネでは農工大、立命大パーティの応援により岡久を左方ルンゼまで運ぶ。西垣、三田は岡久に付き添い、他は三の窓へ下る（〇時）。テントでは伝言を受けて（十七時）辻、笠原は食糧、ザイル、ハーケン等を持って三の窓に向う。明日救出にひかえ、三の窓に泊る。

七月廿二日　晴。

黒木、梶本、藤森、横尾チンネに向う（十五時）。三の窓に泊っていたものと合流し、又農工大、立命大の援助により左方ルンゼより岡久を下す。これはハイマツで作られたタンカに岡久を固定し、四本のザイルでつり下げ、一歩一歩おろしていった。左方ルンゼには落石が多く、特にハングした部分は困難であった。又、約一〇m 毎ハーケンを打ってザイルを fix する為、意外に時間がかかった。十六時三〇分左方ルンゼの下の雪渓におろし、朝からまっていた金沢大の医師の方に診断を受ける。新たにタンカを作り三の窓の雪渓をピッケルを打ち込んで、ザイルでジッヘルしながらすべりおろす（十八時～〇時三〇分）。二股の一年部員の待つテントにつく。この間池の平に行った浜田ら佐藤 OB が来て下さる。

七月廿三日　晴。

二股より真砂沢出合まで、全員汗と泥にまみれてタンカを担ぐ。ここ二日間満足に寝ていないので足がふらふらする。この間、梶本は雷鳥荘よりスノーボートをはこんでくる。真砂沢出合からは立命大パーティが一気にスノーボートを引き上げて下さったのでずい分助かった。広橋 OB、坪井 OB が待つ剣沢小屋に到着し、小屋横にテントを張り岡久を休ませる。（十七時）

七月廿四日　曇。

タンカを交替で担ぎながら、小雨の中をミダガ原ホテルへ。二十二時。

七月廿五日　雨。

岡久、自衛隊のヘリコプターで富山中央病院へ（十一時）。OB、岡久の御家族、黒木、高田は共に、他は全員真砂沢テントへ戻る。雨の中、どろの中を敗残兵の如く。だがテントには一年部員が飯をつくって待っているのだ。

〔大窓の事故〕

七月廿一日

五時二〇分に宇野、桑原、大川パーティが出発。池の平小屋より小黒部谷を約40分下り、雪渓をつめ、大窓に出る（九時三〇分）。

昼良をとり十時に出発、稜線ぞいに本峰の方へ同う。踏跡を求めて岩まじりの草付をトラバース中、最後部にいた大川スリップする（十時十五分）。傾斜五〇度－六〇度のガレたルンゼを三〇m程すべり雪渓のシュルンドに落ちたが、額から鼻への裂傷の出血は間もなく止った。

その後、桑原は、池の平小屋に救助依頼、居合せた大工、石工の方々三名が現場に向って下さる。桑原はテントに連絡に帰ったが一年部員のみで、間もなく源次郎に行っていた酒井に会う（十五時三〇分）。

事故現場では救助の人が十五時三〇分に大窓に善き、マーキユロで消毒後材木とザイルで作ったタンカで出発する（十八時）。十八時三〇分、雪渓を出合まで下ったがそこからの登りは四人の力では遅々として進まず、救援を待つ。（二〇時三〇分）大工原、小屋の管理人の田中正篠氏ら六名が着き、小屋へ向う。

七月廿二日。

二時十分頃ようやく小屋にたどり着く。朝になり、六時三〇分浜田、桑原がテントから到着し、酒井に連絡をつく。大川は名大インターンの方に傷の手当をしていただく。その日、宇野、清水と共に小屋に泊る。

七月廿三日。

七時三〇分、大工原、浜田らが小屋に到着し宇野ら八名を阿曾原に下す。大川はぼつぼつ歩けるようになっていた。大工原がつきそって帰阪する。

1961年度
冬山合宿
ゼミナールと近畿の山歩き
’61年12月－’62年1月

広　瀬　貞　雄

’61年11月富士山行における手痛い遭難事故の後、我々は今迄の山行につき根本的に考え直した。

そして冬山合宿を次の様に行った。

1.　ゼミナール合宿

期日　’61年12月25日～27日

場所　大阪大学教養学部石橋分校明道館

パネルディスカッション　PM 6.00～9.00

講師　篠田先生・赤尾先生・西川OB・徳永OB

2.　冬　山　山　行

近畿の山遊き

期間　’62年1月5日～7日

（A）曾爾パーティ

メンバー　佐藤（L)、大工原、高橋、三沢、横尾、牧野。

行動記録

〇一月五日　近鉄鶴橋九時五十三分発、室生口大野下車、十二時三〇分室生寺発、十三時三〇分宇野川橋。こゝより左に折れ国見岳西側をまく、積雲三〇cm程。テント地（国見岳南下）着十五時。夏テンを雪上にはる。

〇一月六日　七時三〇分発。テント地より屏風岩を見てツラバース。積雪五〇cmで足をとられて進まず十一時屏風岩直下で昼食。こゝより長野へ下りバス道を太郎路まで行き、亀山への途中の栗林の中にテント設営。

〇一月七日　九時四〇分発、落合着十一時赤目十四時着。

赤目滝を見て十七時三〇分のバスで近鉄赤目口迄。

（B）　段ヶ峰、峯山高原パーティ。

メンバー　広瀬（L)、保母、金子、辻。

行動記録

○一月五日（晴）　新井駅に十二時三〇分着、十三時出発、十四時四〇分奥田路、十六時十五分千町と段ヶ峯へ行く別れ道にある神社にて泊る、村人はとても親切で炭等をもらって世話になったが、次の日には案内してやろうという人が来たのには閉口した。

○一月六日　晴後曇　八時三〇分出発。

始め木こりの人達のラッセルがありそれについてまちがった沢をつめる。十時四〇分木こりに出合い段ヶ峯はここからは行けないと聞く、引き返すことに決め正しい沢にもどる。ここからはラッセルなく笹の上に雪がのっている状態でふみぬくと腰から胸のあたり迄もぐるのでひどく時間をロス。十七時稜線の少し手前にてテント泊。下が笹のためテント地作りにくく水が流れないため食事に時間がかかる。

○一月七日　曇。十三時出発、段ヶ峯を少し下った所で道標を発見。それによると地図にでている段ヶ峯は倉谷岳である。ハタギリ越十七時、川上十八時最後バスに間にあわず長谷駅までタクシーでる。

今回は思わぬ雪に悩まされて峰山高原迄行かなかったがぜひ一度行きたい。

（C）　鈴鹿パーティ

メンバー　白井（L）、田村、豊坂。

行動記録

○一月四日　快晴後曇　十一時四日市着－バス－十二時甲津畑－十五時十五分フジトリ谷－十七時十五分杉峠－テント地十八時。

杉峠に近づくにつれ雪は次第に深くなり炭焼の人のラッセルはあったが、杉峠がせい一杯、杉峠では一 m 程度の積雪。風をよけ峠より少し下ったところでキャンプ。杉峠に至り意外に積雪が多いのを知った。雪上に夏天をはったので寒さは相当こたえた。

○一月五日　曇時々小雪。十一時四十五分発―十三時四十五分御池鉱山営業所－十五時三十五分愛知川―十七時十分根平峠－十九時四〇分千草－二〇時二〇分菰野。

朝起きて稜線は風が強いことが分り冬山装備を要するものと思われたので安全を期して直接峠越えに向つた。杉峠から愛知川までは相当のラッセルで部分的にはむねまで達した。

（D）京都北山パーティ。

メンバー〔A パーティ〕黒木（L）、浜田、高田、大川、田井

〔B パーティ〕打出（L)、笠松、前沢、山本、桑原、播本。

当初 A・B パーティ全く別個の予定であったが予想外の雪量の為合流という形式をとる。

〇一月五日　晴。

ＡＭ十時出町柳に集合貴船口に下車バスで貴船へ。谷沼の広い自動車浦を進む、一ピッチ後昼食、アゾカ谷入り雪道となる。アゾカ谷の上部は地形が複雑細い

ふみあとにったって行くと広い道に出る。地蔵堂があり旧花背峠の西側、芹生への分岐点だ。谷一つ地図のとはまちがえていた。積雪多量の為 B パーティ天ヶ岳往復中止花背谷を降る。沢筋の道を少し行くと杉林の中に格好のテント地ありここをならして設営、テント小さい為Ｂパーティは近くの屋根だけの小屋にテントを利用して小屋がけす。

〇一月六日　晴一時小雪。

八時出発。樹林帯をゆく、一ピッチで芹生部落通過。やがて医生谷へと入る。魚谷峠分岐を見捨ててしばらく行くとラッセルも消え木馬道の厄介なラッセルとなる。積雪膝ぐらいまで両パーティ唯一のストックが効力を発揮す。十一時十分狼峠への分岐着昼食をとる。狼峠は難なく通過祖父谷に降る。途中の道標に従って祖父谷峠のすぐ西側ナベクロ峠に向う。道は雪にうもれてわからず右手の支尾根にとっつく。ブッシュの中のラッセルにいじめられたが主稜線に出た所がナベクロ峠（三時）反木谷に下る。谷は広がり合流点をすぎるとトラック道に出る。雪はこのへんで姿を消してしまう。少し下り道路わきの杉林に設営。

〇一月七日　晴一時小雪。

短い山行でも帰路は楽しい。大分軽くなった、ザックにペースも快調。大森東町に入る所で左に折れ薬師峠へ尾根の取付きで少し迷ったがやがて薬師峠。桟敷岳へのよい道がついている。時間もまだはやいので桟敷往復とし全員荷を置いてゆく。この道は意外に長く雪も相当深い。やっと頂上に着いたがあまり展望も利かずただ遠くに真白な坊主頭をのぞかせている比良の山々がなかなかよい。桟敷登頂にともかくも満足して下る。薬師峠に着いた頃よりしばらく小雪がちらつく。峠から一ピッチ足らず下るともう岩屋不動目の下にバスが見えている。案外あっ気ない終幕であった。

1961 年度
春山合宿
『北又－イブリ山－朝日岳－白馬岳』
’62 年 3 月

梶　本　孝　治

はじめに

昨年の事故後、再び積雪期のアルプスで合宿を持つ機会を得た。この苦しい経験によって、事故のない山登りを目ざして、いや、無事故を前提条件として山登りをするべくこの合宿にのぞんだ。

春山合宿の計画に当って、冬山合宿を行わなかったため当然、部員の多数が積雪期の経験が少なく、自然と春山合宿には積雪期の初歩的な技術の習得がのぞまれた。しかしこのようにトレーニン的要素が多いとは言え、一つの計画のもとに完全な山行を行うことを熱望した。この完全な山行を成し遂げることこそ、再出発の第一歩として重要であると感じると共に、これが事故後の長期間の我々の努力の成果を示すものであると考えた。

この意味で計画された合宿を事故もなく、十二分の成果を上げて終えた事は、その間に若干の不手際があろうとも、春山合宿は成功したと言えると思う。

計画を立てる際、部員の脚力内で出来るだけ稜線を長く歩き、その基礎的な力を養うことに目標をおいた。それと同時にあまりトレースされていない所、これは人が入らない事、そのものが魅力であるとともに、いくら秀れたコースであっても他人のトレースに導かれたり、他のパーティのフイクスの力をかりてでは興味が半減してしまうからだ。この二点を考えて見ると、白馬岳の北方稜線がふさわしく、又その周囲に広がっている未知の地域に魅力を感じた。

泊で下車し、小川温泉に入り、北又小屋を経て、イブリ山、朝日岳、白馬岳のコースを考えて見ると、従走形式でも成し得るかも知れないが、先にも述べたように部員全体の積雪期の基礎技術の習得すると言う意味からポーラーで成すのが適当であると思われた。そこで北又小屋を BH として、イブリ山にＣＩ、朝日岳に C2、雪倉岳附近に C3 を設け、白馬岳をアタックする計画が出来たのである。

期　　間　’61 年 3 月 16 日～4 月 2 日

メンバー　梶本（CL3)、三沢（SL3)、浜田（3)、山木（食 3)、横尾（食 2)、高田（装 2)、桑原（気象)、大川（医 2)、牧野（1)、豊坂（2)、木原（3)、広瀬（OB)、田村（5)、三田（5)、米沢（4）

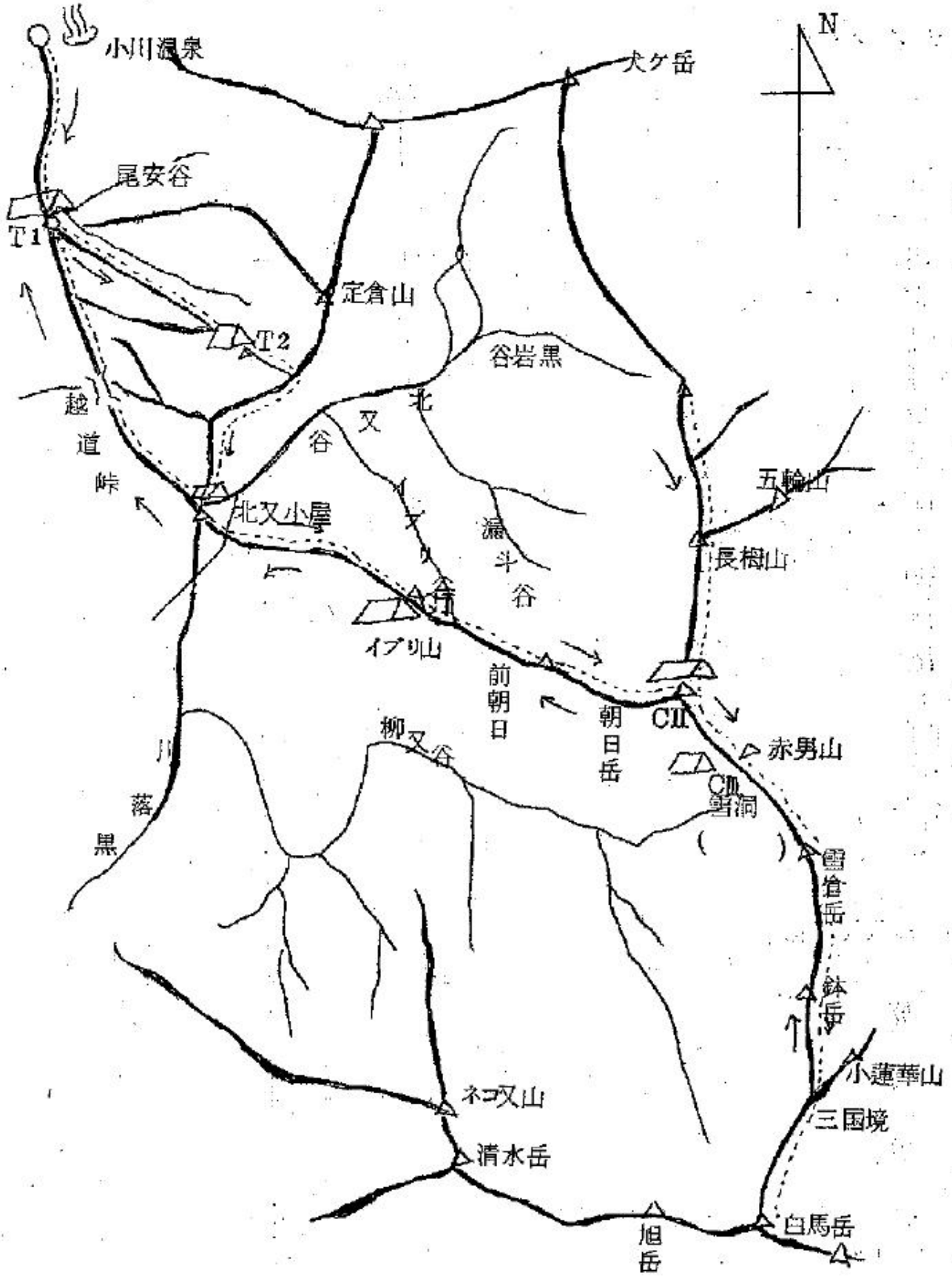
先発隊報告

メンバー　三沢、横尾。

三月七日午後八時十分大阪発。八日七時泊着。八時四十分小川温泉着。十時発。快晴。自動車道をスキーをつけて歩き出したが左岸からのデブリがひどくワツパに変える。先に猟師達が歩いている。十三時夏道との分岐点。又道の沢筋は両岸から雪崩の危険があり日中は通れそうにない。自動車道通しに進むが到る所形跡を留めない程の急斜面に変っていて遅々として進まない。十八時を過ぎるも越道の小屋は遙か。しかたなく自動車道の上の台地で十八時十五分ビバークと決める。タテ穴を掘りツエルトをかぶつてシュラーフにもぐり込む。幸い星空で無風。九日。七時に起き、周りを見てもこれ以上自動車道通しには進めそうにない。荷はそのままにして尾根に取付き稜線に出る。左岸の尾根づたいに稜線に出れば越道峠へ出れそう。だが取付きは雪崩の危険が少しある。

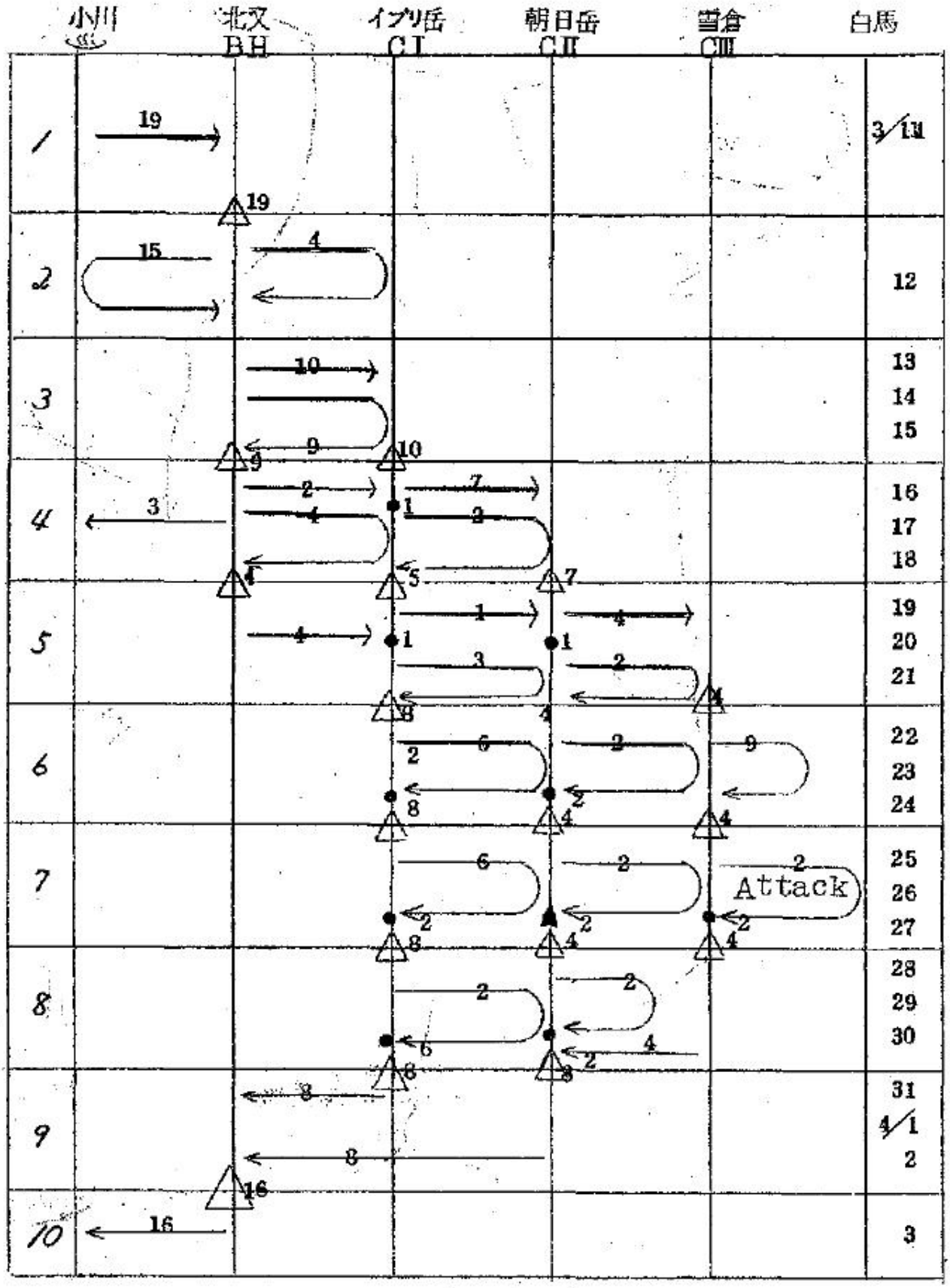
対岸を見ると尾安谷右股左岸の尾根づたいに定倉山下り小ピークへ出てそのまま北又小屋へ尾根づたいに下れそう。更に上へ登ると、イブリ、朝日や対岸の尾根が一望出来る展望台へ出た。結局尾安谷よりのルートが最も安全であるとの結論を得た。ビバーク地へ戻り、直ちに尾安谷出合まで下り河原のドテに雪洞を堀る。餞別にもらつたピーカンが旨い。十日。沢筋のルートを求めたが雪崩の危険を感じて引き返す。十三時温泉へ向う。十四時六湯着。宿主へ一晩の宿を乞う。（横尾記）

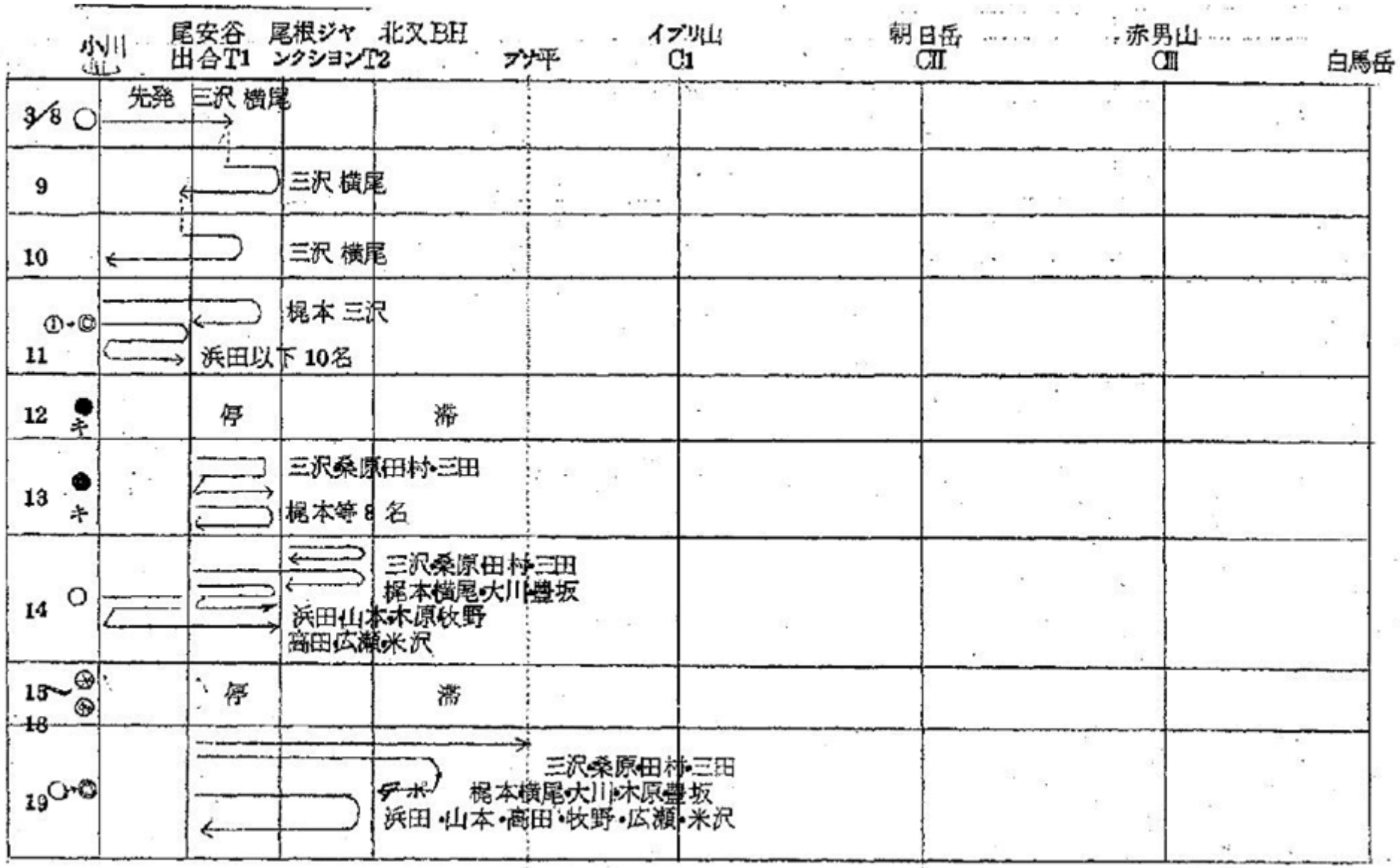
〔白馬岳北部稜線〕


小川温泉
犬ケ岳
N
尾安谷
T1
定倉山
T2
谷岩黒
北
又
谷
越
道
峠
北又小屋
五輪山
長桐山
漏
斗
谷
イブリ山
前朝日
朝日岳
CII
赤男山
柳又谷
CIII
雪洞
落
黒
雪倉岳
鉢岳
小蓮華山
ネコ又山
三国境
清水岳
白馬岳
旭岳

行動予定表及びポッカ表

〔（太線はポッカ）数字は人員数〕




小川
尾安谷 出合T1
尾根ジャンクションT2
北又BH
ブナ平
イブリ山 C1
朝日岳 CII
赤男山 CIII
白馬岳
3/8
先発 三沢 横尾
9
三沢 横尾
10
三沢 横尾
11
梶本 三沢
浜田以下 10名
12
停 滞
13
三沢桑原田村・三田
梶本等 8 名
14
三沢桑原田村・三田
梶本横尾・大川・豊坂
浜田山本・木原牧野
高田広瀬米沢
15~18
停 滞
19
三沢桑原田村・三田
ダボ
梶本横尾・大川・木原豊坂
浜田・山本・高田・牧野・広瀬・米沢

	小川	北又BH	イブリ山CI	朝日岳CII	赤男山CIII
20 ◎		デポ 牧ノ	三沢・桑原・田村・三田 山本・大川 広瀬・米沢 浜田・高田		
21 ◎ ● キ	木原・豊坂 （田村・三田・木原 豊坂下山）	田村・三田 梶本・横尾・山本 大川 牧野・広瀬・米沢	三沢・桑原・浜田・高田		
22 ⊛	停	滞			
23 ○↓ガス		牧野・広瀬・米沢	三沢・浜田・山本・桑原・高田	梶本・横尾・大川	
24 ○↓◎			三沢・浜田・山本 広瀬・桑原・高田	梶本・横尾	
24 ○↓ガス			米沢・高田	梶本・大川	三沢・浜田・山本

	小川	北又BH	イブリ山CI	朝日岳CII	赤男山CIII	白馬岳
26	○→ガス○ ㊥		桑原・広瀬 ←	横尾・大川 ←	停滞	
27	㊥		停	停	停	
28	○→ガス		高田・桑原・牧野・広瀬 米沢 ←	梶本・横尾 ←	三沢・山本 ←	
29	㊥		停	停	停	
30	ガス		桑原・高田 →	停	停	
31	○	(ビバーク) 広瀬・米沢 ←	牧野・広瀬 ← 横尾・大川 ← 三沢・山本 ←	梶本・高田・桑原 → (雪倉岳往復) ← 浜田 ←		
4/1	○	広瀬・米沢 ←	(デポ回収) 山本・牧野 → ←	横尾・大川 ← 三沢・山本・横尾・大川・牧野 (黒岩平往復)		
4/2	○→①	梶本等9名 ←	梶本・浜田・桑原・高田 ←			

〔行動概要〕

三月十日　　二〇時十二分　大阪発。

三月十一日　晴後曇。列車延着で、泊駅にて少し手間どる。小川温泉にて先発、横尾、三沢と落ち合う。（九時四十五分）。十時三十分第一次ボッカ出。十三時三〇分尾安谷出合にテントを張る。ＴＩナダレを考慮して、梶本、三沢は尾根の偵察。他十名は第二次ボッカを行う。

三月十二日　小雨・霧。昨日 ＣＩ建設迄の偵察隊として三沢、桑原、田村、三田の四名を指名。

本日は停滞。下界は晴の模様。

三月十三日 霧雨・ガス。＜偵察隊＞六時三〇分尾安谷出合出。十一時十五分尾安谷横尾根（実際は少し違う）かジャンクシヨンにテント。TⅡ途中四ヶ所 fix をもうける。十二時五分二回ボッカの為、テント出。十二時四十五分尾安谷出合。十三時同出。一人二〇Kg。十五時三〇分これより三十六分偵察するも視界五〇m で引き返す。＜後発八名＞六時五〇分出。一人二十五 Kg ボッカ。偵察隊の fix を利用して十一時二〇分尾根のＴⅡ着。十三時三十分下山して尾安谷出合。ＴＩ。

三月十四日　快晴無風。＜偵察隊＞八時十分 ＴⅡ出。北又小屋へ C1、C2 の㋑の食料、装備ボッカ。十時五〇分北又小屋着。十一時北又小屋にて、レンズ雲を見る。十二時同出。十五時三〇分 ＴⅡに戻る。＜ＴＩ8 名＞六時三十分 ＴＩ出。八時三十分頃に剣上空に上層雲を見る。九時 ＴⅡ着。浜田、山本、木原、牧野は直ちに ＴＩへ。梶木、横尾、大川、豊坂は偵察隊の後を北又へ、十四時四〇分北又小屋着。十七時四〇分梶木等四名 ＴⅡに戻る。十八時浜田等四名ならびに大阪の後発、広瀬、米沢、高田 ＴⅡ入り。ここに ＴⅡに全員集結。

三月十五日　西南西の風。終日雨強く、停滞十四時四〇分春雷が雪崩の如く通過。十八時直径七 mm 程のあられ。ニンニクと粉ミルクのコンデンスはモツさんの風邪によくきいた

三月十六日　風雲強く停。西南西の風。地吹雪＋雪の天気。テント、食糧の雪かき、及び新人の歩行訓練に一日くれる。

三月十七日　風雪強く停。風向ははつきりつかめぬが息の問隔長くなる。そうでなくても、ガスられるのに、本日は六名もガス中で、名医の世話になつた。

三月十八日　雪後高曇。アゝ今日も停。ニンニクと塩の特効薬を用いた日也。

三月十九日　快晴後曇。十二名全員七時三〇分出、十一時北又小屋。ガス中の五名はＴⅡへ戻る。偵察隊四名及びサポート四名は十二時五〇分北又小屋出。C1 建設に向かう。北又の渡渉は、ひざ程度。サポート十五時ブナ平へ一Ｋの地にデポて引き返す。十六時北又小屋 BH 着。偵察隊は十六時ブナ平にてドスン。本日、出発時快晴なるも一ピッチ後、剣上空に上層雲を見る。

三月二十日　高曇。＜偵察隊＞イブリにＣＩ建設。
＜BH 隊＞身体の調子を乱したものが多く、二名だけＣＩへボッカ。八時三〇分出、十一時ブナ平。奴さん等のテント後に、ウイスキーボンボン。午後雨の懸念あるも思い切って進む。十二時三〇分 ＣＩイブリテント地。朝日、前朝日を目前に絶好の場所。十三時三〇分 ＣＩ出。二〇分程下ると浜田以下五名に会う。浜田、高田は ＣＩに向かう。他三名はデポして、共に北又へ。（十五時）。この頃雨ショボショボ。＜TⅡ隊＞四時出。ローソク行列空しく懐電行列。八時北又小屋。

三月二十一日　北又 BH は一日高曇。イブリ ＣＩは曇十五時より霧・小雨。＜北又隊＞危ぶまれた天候がもち続けて、木原、豊坂を残して、七名出（七時三〇分）。デポ地（九時五分）下山する田村、三田と出会う。温泉に浸るな、奴等は！十一時ブナ平で昼食、日本海にワタ菓子現われる。十三時二〇分 ＣＩ着。広瀬等三人は北又 BH へ。本日 ＣＩは八名。直、田村、三田は木原、豊坂を連れて小川温泉へ遊びに帰った。

三月二十二日　ガス・雪。視界二〇m。南部のオッチャン曰く、「シリ寒シ、クラストしている。ちよつと雪が吹つてるよ、テントにエビの尻尾がついてるよ、雪が吹つてきたよ、風速十ｍ位。シリは剣を向いてる。風は剣からくるよ」以上六時。気温マイナス四℃。本日停。

三月二十三日　快晴後ガス。ＣＩ隊、有明の月に剣岳黙して語る。七時二〇分 ＣＩ出。三ピッチで夕日ヶ原。この当りスキーに快適。十時四〇分 CⅡ朝日テント地。梶本等三人 CⅡ入り、他五名は ＣＩへ。前朝日からの白馬、雪倉、特に雪倉のスケールは大きい。＜北又隊＞

三月二十四日　快晴後曇。＜ＣＩ＞六時四〇分出。十時三〇分 CⅡ着。アタック隊三名 CⅡ入り。サポート三名はＣＩへ戻る。CⅡのテント大入り満員のめざし。＜CⅡ＞朝日の出が素晴らしい。日本海の雲海、妙高、焼、戸隠の連山に夜が明けゆく。梶本、横尾 CⅢ建設の偵察に向かう。六時十分出。七時五〇分雪倉岩稜とっつき。十一時十五分雪倉ピーク。十四時十五分 CⅡテント帰着。昨日もだが、今日も又、十一時三〇

分頃からガスりだす。梶本、横尾氷壁に相当苦闘したらしくガスに巻かれて、ふらりと戻る。

三月二十五日　快晴後晴後ガス。＜CⅡ＞梶木、大川サポートで、赤男と雪倉のあたりに CⅢ建設に出かける。七時出。八時二〇分赤男ピーク手前に CⅢ雪洞を設ける。山本、三沢、浜田の CⅢ入り。＜CⅠ＞米沢、高田七時出。十時 CⅡ着。十時十五分 CⅡ出、十一時四十五分 CⅠに戻る。

三月二十六日　快晴後晴・ガス・地吹雪。

＜CⅠ＞広順、桑原。

＜CⅡ＞横尾 大川六時五〇分出。七時二〇分 CⅢ。八時十分 CⅢ出。九時十五分 CⅡ。南西の風が猛烈に強い。

＜CⅢ＞雪洞の入口に地獄への入口がある。fix ザイルを使用。アタック日和も、寝過しで取り止め。

三月二十七日　ガス地吹雪。南西の風強く、CⅠCⅡCⅢ共に停。

三月二十八日　快晴後ガス＜CⅠ＞広瀬以下五名勢ぞろい。六時五〇分 CⅠ出。十時 CⅡ。皆モク助。＜CⅡ＞梶本、横尾、六時三〇分出。七時三十五分 CⅢ。ビフテキ、ホットケーキを浜田に御馳走になる。その上アクック食をどっさり CⅡへパスつてきた。

＜CⅢ＞アタックの記録。

メンバー　三沢、山本。

風はあったが快晴で、五時出発。雪倉の頂上に着いた頃はかなり風が強まって来たが、暖かい風ではあり、天気も十分もちそうだったのでそのまゝ進んだ。三国境からは蓮華からのトレースが、白馬主稜にもトレースがあつたけれども、他のパーティは居なかった。

広い尾根は風の吹き通しで休憩もせず三国境まで下りて昼食をとった。鉢の鞍部から雪倉山にかけて猛烈な風で四つんばいになってがん張った。CⅢに着いてまもなくガスが出てきた。

タイム記録。

四時五〇分 CⅢ発。六時五〇分雪倉山。九時五分三国境。九時四十五分白馬岳着。十時十分白馬発－十一時四〇分鉢岳。十三時雪倉山。十四時十五分 CⅢ帰着。（三沢記）

三月二十九日　ガス、地吹雪。停滞

三月三十日　ガス、＜ＣＩ＞高田、桑原、八時四〇分ＣＩ出。十一時五〇分ＣⅡ入り。ＣＩの二人が入る迄に、ＣⅡの三人はすごく物を食べたらしい。

三月三十一日　快晴＜ＣＩ＞広瀬、牧野六時十分ＣＩ出。九時ＣⅡ。牧野は三沢、山本とＣＩへ下る。（十二時五十六分）。広瀬は梶本に相談後、北又から小川温泉へ遊びに行く（十四時三十六分）＜ＣⅡ＞横尾、大川、ＣＩへ都落ち。梶本、桑原、高田、六時三十六分ＣⅡ出。七時十五分ＣⅡ。十一時十五分雪倉ピーク。三〇分昼寝してＣⅡへ。＜CⅢ＞三沢、山本、浜田、九時CⅢ出。三沢、山本はＣＩへ（十二時五〇分）。浜田はＣⅡに残る。

四月一日　快晴。＜ＣＩ＞横尾、大川、六時三十六分出。八時四〇分ＣⅡ。伝言に依り今日中に北又へ撤収する旨直ちにＣＩ。四月バカ?!。＜ＣⅡ＞梶本等四名、六時十分出。黒岩平へ向かう。九時過ＣⅡに戻り、撤収の準備。十一時出。十二時三〇分ＣＩへ。十三時十五分合宿最后の敗残兵九名北又向け出。十四時四十五分小屋。十八時お休み。

四月二日　快晴後晴。越道を早目にというので、懐電行列。四時出。五時四〇分越道峠。八時小川温泉。全員湯につかつて、合宿のあかをおとすも、あまりみばえがしない。でも、いゝお湯加減でした。　（大川記）

装　備　報　告

今回新調したものV1、V2、V3各テントの内張とスコップ、テルモスなどであったが、スコップは小型のものを二本、一本は角型で穴のあいているもの、もう一本は先のとがったもので、これは接続部の木ネジがとんでしまったが、雪洞用を別としては十分使えるものであった。又、テルモスは安物を買ったせいか、割れたり、すぐに冷めたりして使用不能となつてしまった。やはり中級以上のものでなければだめであろう。

次にボッカ方法であるが、今回は炊事用具などの常時使用するものを別にして、その他の装備は各テント毎に段ボールの箱にパッキングしておいたが、途中で計画変更の際に開けたり、汗でぬれたりして、結局バラバラになってしまつたが、ポーラーの際、装備に関してぼ各テント毎に分けてしまうのも考えものである。かえって、度々使用するものはバラしたままで、途中で使う必要のない細かいもの（メタ、ローソクなど）だけを缶につめておき、適宜分配するほうがよい様な気もする。この点は今後も研究の価値があろう。

それから、ケロシンの量は従来通り一人当り一日一三〇cc で計算し、全体量は十分であったが、CⅢのごとき三名であったので、一日約四〇〇cc とした。所が実際は一日七〇〇cc ほど必要であったので、後から補充をした。この原因として、三人でも五人でも家際の炊事の量（どちらの場合もコッフエルに最大限の量をつくる）には大差がない事が考えられる。この点に留意して、今後は各テント毎に（テント単位に）一日何ℓと計算すべきである。

その他、二、三気付いた事を簡単に記す。

〇ポリタンク C2、C3 の全量、その他の一部のケロシンをポリタンクで運んだが、ボッカ中にもれたりする事もなく、ラジウスに移す際にも便利で、ロスが少なかった。缶と併用しても、缶からまずポリタンクに移し、それからラジウスに入れる事により、ロスが防げる。

〇メタ、ラジウスの加熱用のメタは全部共同装備とした。これは、非常パックのメタを使わせない為であった。

〇マンドリン　十分な量を用意したっもりであったが、スペアーも心もとない程消耗がひどかった。各人の取扱いに今少しの丁寧さを要望したい。

小生にとって始めてのポーラーメソッドでもあり、色々不慣れな点も多かったが。計画が成功したのは何よりもうれしかった。今回特に感じた事は、ポーラーが計画通りに進行する事はまずないという事だ。だから、どんな計画変更にも直ちに応じられる様に、装備計画の機動性という事に予め十分注意を払つておくべきである。

最後に簡単な装備表を記す。　（高田記）

装　備　表

品　　名	数　量
テント	4
ツエルト	3
グランシー（雪洞用）	2
スコップ	4
ザイル麻	1
ナイロン	3
Fix 用	2
ラジウス	4
石油コンロ	1
なべ	1
コッフェル	3
テルモス	3
三つ道具	1 組
ケロシン	60ℓ
ローソク	80 本
メタ	30
竹ざお	60
その他	
総重量	約 150Kg

食　料　報　告

積雪期の食料計画は、出来るだけ軽く、調理は簡単に、栄養価はいうにおよばず、しかもうまくということを念頭において作るべきである。さらにこの上に金銭上の制約が非常に大きい。これ等相矛盾する諸点をどう調和させるかが問題である。

今度の合宿は秋の荷上げ食料が使えず、そのため全部の食料を買い集めさらにそれをボッカしなければならなくなったため、重量、費用に特に留意したつもりであったが、一人一日当り一 Kg 弱、百五十五円という結果で例年とあまり変りなかった。（梱包重量も含めて）当初はもつと軽く、安くするつもりであったがこれがせい一杯であった。

次に各点について反省してみる。

1.　献立内容について

(1)　調理を簡単にし、さらに食事をうまくしようとの意図からスープ袋なるものを作ってみた。これは肉（豚又鶏又鯨）一〇〇g を野菜（キャベツ、ボーレン草、ねぎ、にんじん）をラードでいため塩で味をつけてポリ袋の中に入れたものであり、一袋四人分である。ラードも一しょに入れてある。これを朝夕湯の中へほうり込み味つけをすれば、うまいスープが出来るようにと考えたのである。これは一応成功し好評だった様である。しかし塩味がうすく、温度も高かったため最後には野菜がすっぱくなり、又途中デポしておいた分は帰途みると腐っていた。完全な失敗である。使った肉の内鯨肉はしょう油をたっぷり使い、にんにくとしようがで味をつけたがこれは最後まで大丈大であった。豚肉を主に用い鯨および鶏肉を従にしたが鯨を主にすればよい。又味もよい。味を極度に濃くしておけば長期の保存にも十分であろう。改良の余地は十分あるが、改良してよいものにすればこれからも使ってよいと思う。又昼食用の魚ハムも廃し鯨肉でテキを作った。これは時間等の関係から生協にたのんで作ってもらった。一人約七〇g である。行動日に使用したが割合好評だった様である。今度は魚ハムは極力廃して肉類を使うことに力を入れたが、魚ハムのあのいやなにおいが食欲を減じているような気がしたからである。その点、肉にはくせがなく玉らん、ビーフンも美味く食べられたと思う。値段も鯨肉で 100g 十二円程度豚肉だと四〇円程度、鯨肉を使えばずっと安上りだろう。

(2)　停滞日の昼食には米を使った。停滞日は時間をもてあますのが常であり、せめて米でもたいて舌づつみをうってもらおうと思ったのである。調味料はチャーハンの

素と即席カレーを使った。ここでも例のスープ袋がものをいった。行動日と停滞日の比は一対二であったが停滞日二のうち一のみ米を使った、つまり八日分である。そして米は各自の個人装備としておいた、梱包するのはめんどうであり、八日分といえば一日一、五合だから一・二升、Kg になおして一・七 Kg さして負担にならないと思ったからである。時たまたべる米はうまかった。今度の食糧計画は昼のみ行動食と停滞食の区別をつくった。しかし停滞食を行動食より悪くするという意味での停滞食は作らなかった。

(3)　めざしをなくしたためカルシユームはスキムミルクからとった。スキムミルクはミルクにして飲むと同時にメリケン粉と共にホットケーキにした。

(4)　油はラードを用いスープ袋の中にほうり込んでおいた。一人一日三十 g である。昼にはマーガリンは食べにくくスープに多く入れるのがよいと思う。

(5)　調味料はコンソメを主にしたがチャーハンの素をスープにしてもうまく、粉末袋入りであり、コンソメのチユーブのむだもはぶけ又安い、考える必要がある。

(6)　朝および昼の主食にビスケットを用いたがクラッカー、かんぱんより食べやすく好評であった。

以上献立内容について気のついた事を書いてみたが詳しい献立については献立表を参照されたい。与えられた範囲の中で出来るだけ、美味しく食べられるように心がけたつもりである。

2.　梱包について。

一斗缶を用いた、しかし、BH 用にはダンボールを用いた、BH までのアプローチが短かく一斗缶の必要はないと思ったからである。しかし BH に入るのに予定より手間どり多少破損した。梱包は辻が行った。

3.　アタック食について

ビバークする時の事を考えて、調理せずして食べれるものにした。又体積が小さく軽いという事に留意した。一人一日一 Kg 弱である。献立は朝昼晩共ビスケットにした。それにチーズ・ハム・バター・チョコレート・ミカン等をつけ、朝ココアをわかして水筒、テルモスに入れて行った。アタック食は特にアタックメンバーの嗜好を考慮すべきであろう。今回の場合ビバークするに至らなかったのでその良否については判断が下せない。　　（山本）

献　立　表

朝	ビスケット	1	玉らん 1/6	昼	ビスケット、粟コシ	3	夜	玉らん 1/2
	クラッカー	1	玉らん 〃		鯨テキ（4 人分）	1/4		もち 300g
	塩せんべい	1/2	玉らん 1/4		レーズン	1/4		ビーフン 1/2
	スープ袋（4 人分）		1/4	間	スキムミルク	20g		スープ袋
	コンソメ・塩コショ				紅茶			コンソメ 1/15
					砂糖	30g		味　噌 30g
					メリケン粉			カレー粉塩コショ

注　｛ 印をつけたものはそのうちのいずれか選択

昼食には停滞食として米とかんぱんを使った、それぞれ 8 日分づつである。

全　食　料　表

品　名	BH	C1	C2	C3	合　計
クラッカー	53	47	18	12	130
ビスケット	106	94	36	24	260
塩せんべい	32	24	10	―	66
玉　ら　ん	63	55	23	9	150
モ　　チ	300	282	108 コ	90 コ	780
ビ ー フ ン	29	24	10	3	66
米	各	自	持	参	
粟 お こ し	157	145	58	40	400
か ん ぱ ん	25	24	10	6	66
ス ー プ 袋	102	86	28	22	236
鯨　テ　キ	13	12	5	3	33
ハ　　ム	12	12	7	2	33
ラ　ー　ド	3	3	2	1	9
コ ン ソ メ	10	8	3	2	23
カレー（即席）	3	3	2	1	9
チャーハンの素	8	8	6	2	24
味　　噌	3	3	2	1	9
レ ー ズ ン	13	12	5	3	33
ジ　ャ　ム	20	16	6	2	44
砂　　糖	11	11	5	3	30
スキムミルク	6	7	4	5	22
紅　　茶	3	3	2	1	9
茶	1	1	1	1	4
塩	1	1	1	1	4
コ　シ　ヨ	2	2	1	1	6
メリケン粉	―	14	9	7	30
カ レ ー 粉	1	1	1	1	4
重　　量	157	140	54	27	378kg

注　重量には缶の重さも含む　他に Attack 用 7kg（缶も入れて）がある

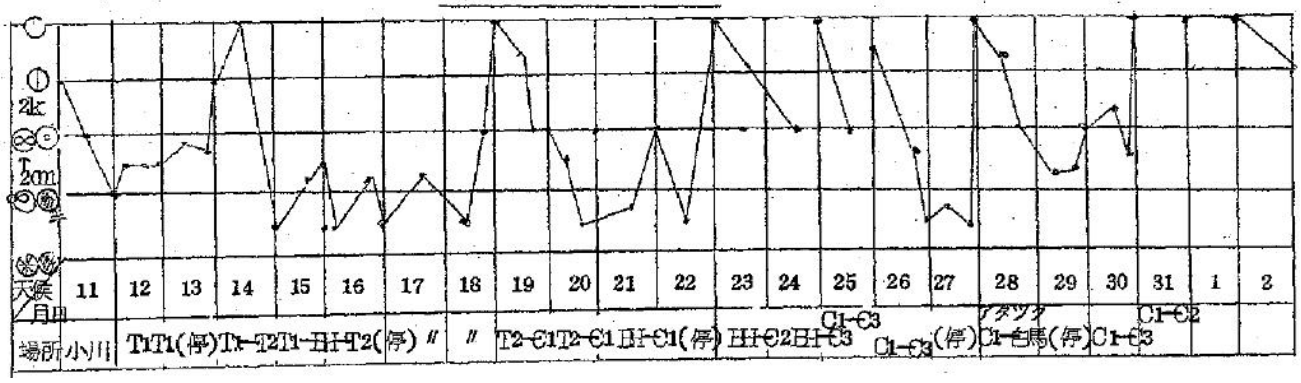
気 象 報 告

春山の美しさそれは何といっても真白な雪と真青な空のコントラストによるものが多い。だから誰しも明日の行動のための天気ではなく春山の美を楽しむための天気に大いに感心をよせる。

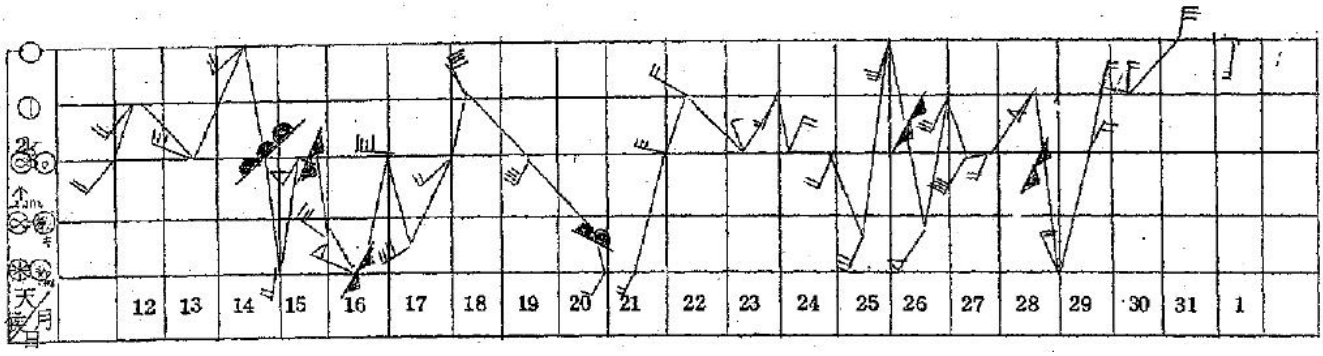
今度の合宿において我々は大いに感心は示したが多分気象係の行いが悪るかったのか天候には恵まれていたとは言えない。一応ここに合宿中の天気変化を表に表わしそれを第一表とする。第一表によってもわかる様に一日中快晴の日はほとんどなく午后になるとガスが出て午后の行動に支障をきたしたのは単に天候にめぐまれてなかったと言うだけでなく日本海に面し朝日から北又小屋に向う尾根を左右から吹き上げて来る黒部でも有数の谷北又、柳又に囲れている地形的な関係によるものも否定する事が出来ない。

ここで高地の気候と低地の気候を比較見当してみる意味で、第二表に合宿期間中の輪島の天気変化を表にしてみた。一見似てない様でも多分にグラフとして大まかに共通点がつかめる。又大部異なる点も表われているのは誰しもこの表から感ずくであろ

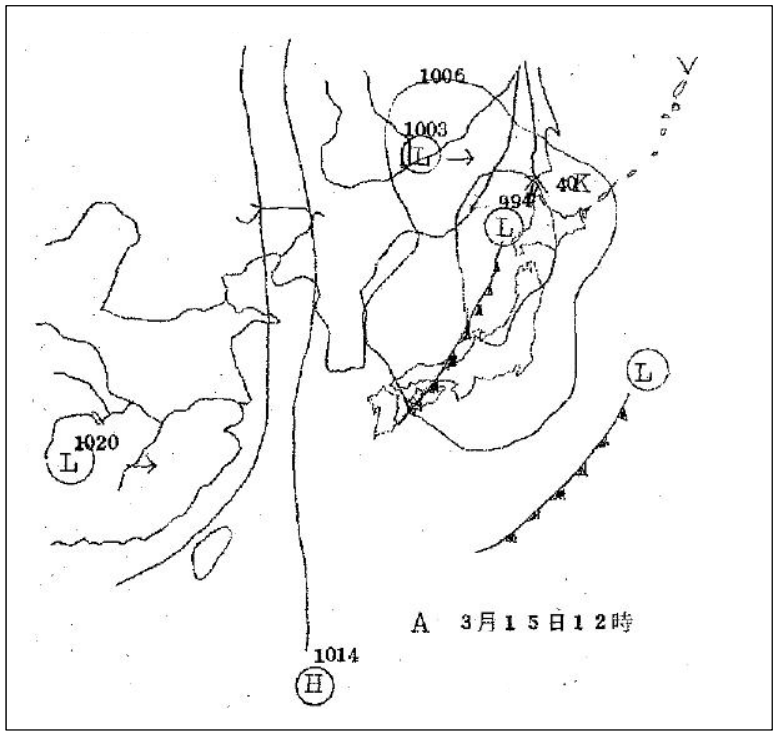
第1表　合宿間天気変化



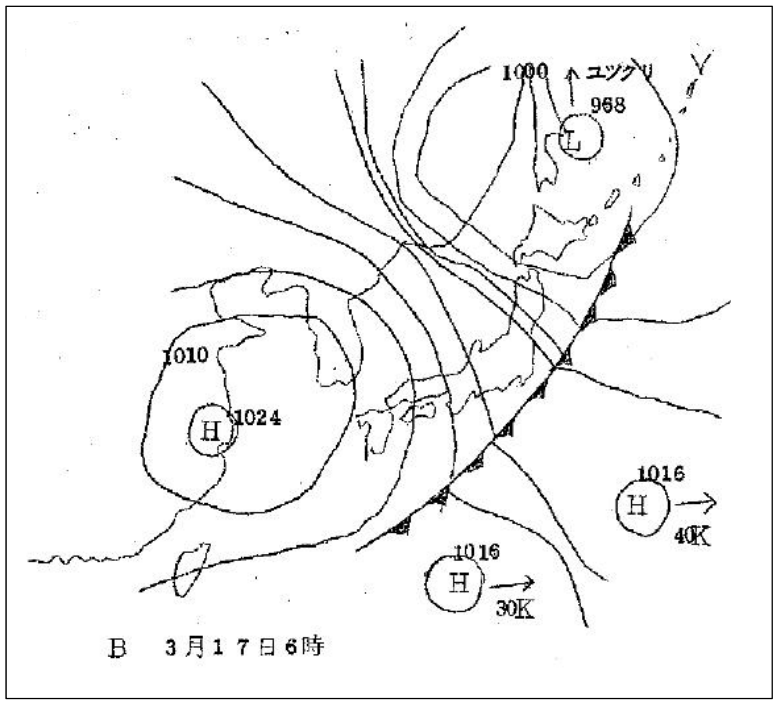
第2表　合宿間の輪島の天気変化



う。日々の行動と天候の関係は行動記路と先の表を比較してみてもらう事としここでは気候変化として興味ありそうな日々をかいつんで一考してみたい。三月十四日北又小屋への偵察隊が AM 十一時にレンズ雲を見ている。これは温暖前線の接近を意味している。そして輪島ではその明朝六時にすでに前線通過後の雨となっている。十五日から十六日にかけてはアムール河及び日本海の低気圧の引いる寒冷前線の東進により風雪及び雪をもたらし我々は T2 に停滞のめにあった。十五日十四時四〇分その一つの前線の通過のさい激しい春雷があたかも我らの向いの山に雪崩が起ったごとく我々のテントをゆさぶって通過した。その時直径七 mm 程のアラレが降った。A 図はそのすこし前の天気図である。さらに十七日にいたっては天気図 B で示すごとく冬型の西高東低型となり十七日も停滞、次に一、二表の二十一日の天気を比較してみよう。輪島の天候によれば二十日はともかくも二十一日は動けそうにないが二十二日は動けそうである。しかし我々はまったく逆であった。天気図 C を見ても一〇三〇mb の引い前線のたしかに降水域にあると考えられる。ここに平面的な天気図により立休的な山の気象を考えるむっかしさがあるのだろうか。僕はクマ先輩とのカケに負け百円取られるめに合ったのも彼の立体的な考えに僕の平ベツタイ考えとあっては百円の負けもやむえない。又二十一日（天気図 C）に日本海上にかた菓子の様な雲を見た。これは一〇三〇mb の低気圧による降水域の最南端を表わしている様に思える。さて第一表の二十三、四、五日にかけての変化をみると毎日同じ様に凸凹をくり返している。これは D 図によつてもわかる様にこの頃決って午

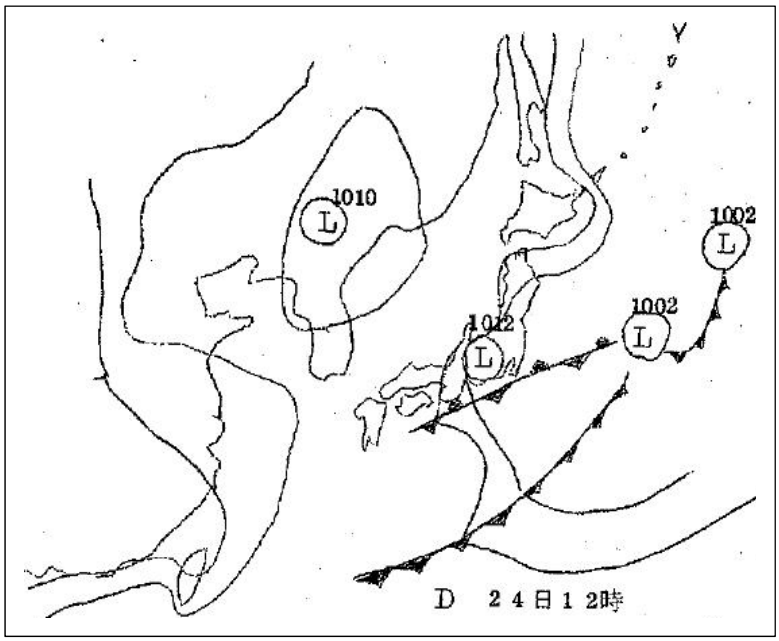


A　3月15日12時



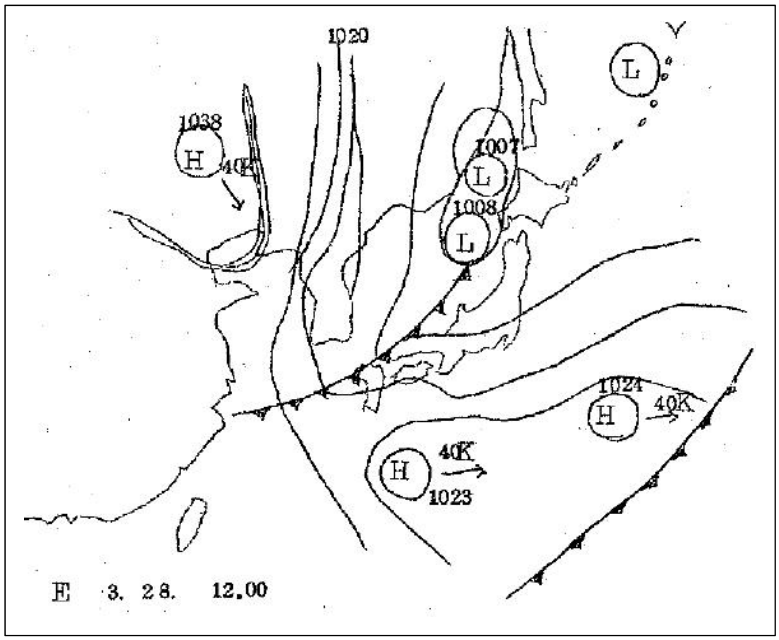
B　3月17日6時

前中は晴れてて中部地方にはない低気圧が三日間続けて午后になると現れる。そしていつもはナタ・毛勝の方からガスつて行きつゞいてこちらがガスるのだがこの頃は白馬の南から雲がむくむくと上り後立北部の我々の方がガスつてくるというぐあいだつた。このたびの合宿で先にも書いたが午后になると大半の日ガスられた。天気図上では前稿あたりに地形的低気圧が出来ている。



しかし天気図には表れない程の低圧部となる様にこのあたりは地形的に作られているのかもしれない。

最後に合宿の最高目的であるアタックの日の天気図も参加までに記しておこう。



その日の天候の説明はアタック隊の報告の方にまかした方が天候の実感のわいた説明となると思うので省す。

このたびの気象を考えてみるとき、もよりの観測所のデーターを最大限に利用しそれとまわりの雲を利用する事により立体的にハアクして山行に於ける気象判断に役立てる事は無理だろうか。

（桑原記）

あ　と　が　き

我が部としては久しぶりのポーラである為、リーダー初めメンバーがポーラは無経験で、ポーラの特性を十分にのみこんで行うように気を配った。

結果としては非常にうまく連営され、テント問の連絡、食糧、装備のボッカとともに満足される状態であった。

特に気象条件の悪いこの地域では、朝晴れていても、正午頃にはガスり出し、午后には吹雪出している。その為行動は午前中に終らねばならない。その点を考えると C1 と C2、C2 と C3 の間の距離は適当だった。

ここの稜線は広く技術的に困難さはないが、少しでもガスにまかれると盲同然となってしまうやっかいな所だ。そこで全行動が気象に支配される為、天候の予想が重要になり、気象係のみならず、全員が常に関心をもって正しい判断を下して行動した点は今度の合宿の成功の一因であった。

この春山合宿で唯一遺憾であったことは、新人の参加が少なく、又二年部員の一部が急に不参加になった為、計画達成に目指す為、新人の訓練が OB の広瀬氏にまかせきりになった点である。　　（梶本記。）

一九六一年度
一　般　山　行

後　立　山	大谷原上流－布引－白馬岳
期　　間	四月二十八日～五月五日
メンバー	前沢、白井、清水、横尾、頭森。

穂　高　岳	西穂－奥穂－北穂－涸沢
期　　間	四月二十九日～五月四日
メンバー	酒井、佐藤

黒部・横断	七倉－烏帽子－泉沢―赤牛岳－金作谷－薬師岳－トビ谷
期　　間	四月二十九日～五月四日（後出）
メンバー	田村、笠松、玉井、田井、梶本、三沢

中央アルプス	宝剣－空木
期　　間	四月二十九日～五月六日
メンバー	山本、笠原、岡久、辻、広橋 OB、岡田 OB

御　　岳	黒沢口－御岳－濁川
期　　間	四月二十九日～五月一日
メンバー	西垣、大川、森、吉川。

黒菱－唐松	
期　　間	五月三日～五月五日
メンバー	打出。

上　高　地	槍見－焼－蝶・大滝
期　　間	五月四日～五月八日
メンバー	梶本。

穂　　高	西穂－北穂－槍－徳本峠－島々
期　　間	六月七日～六月十二日
メンバー	高田、岡久、辻

西　穂　高	
期　　間	五月三十一日～六月一日
メンバー	黒木。

赤　谷　山	ブナクク谷－赤谷山－大窓－バンバ島
期　　間	六月九日～六月十二日
メンバー	酒井、保母。

大　峰　山	坪内－弥山－深仙
期　　間	六月九日～六月十一日
メンバー	浅井、吉川、牧野、播本。

夏　山　縦　走

○東沢－雲ノ平－笠ヶ岳

期　　間	七月二十七日～七月三十一日
メンバー	横尾、桑原。

○太郎山－薬師沢－雲ノ平－笠ヶ岳

期　　間	七月二十七日～八月三日
メンバー	三田、藤森、牧野、吉川。

○薬師沢－雲ノ平－槍ヶ岳－穂高岳

期　　間	七月二十六日～八月二日
メンバー	宇野、山本、笠原、柳井。

○剣岳－雲ノ平－鉢ノ木－唐松岳
期　　間　　七月二十六日～八月六日
メンバー　　浜田、辻、秋濃、竹本。

○レンゲ温泉－白馬岳
期　　間　　八月二十五日～八月二十八日
メンバー　　大工原、岡田 OB。

○北俣谷
期　　間　　八月二十六日～八月二十八日
メンバー　　打出、横尾。

○広河原―荒川岳－二軒茶屋
期　　間　　十月六日～十月九日
メンバー　　横尾、浅井、大川、木原。

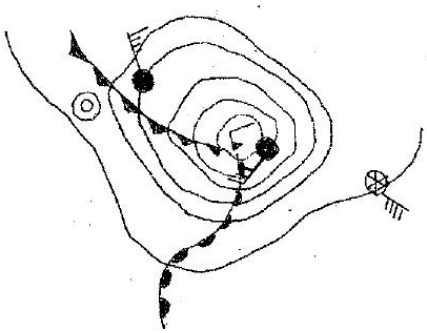
○夜叉神－農鳥岳－塩見岳－広河原
期　　間　　十月八日～十月十六日
メンバー　　高田、吉川、牧野、秋濃、豊坂。

○双六岳－笠ヶ岳
期　　間　　十一月一日～十一月二日
メンバー　　山本、浅井、豊坂、木原、竹本。

○双六岳－槍ヶ岳－西岳
期　　間　　十一月一日～十一月三日
メンバー　　横尾、桑原、秋濃、吉川、柳井。

○新穂高－双六岳－鷲羽山－雲平－薬師南稜－有峰
　（春山の偵察）

期　　間　　十月二十九日～十一月四日
メンバー　　梶木、高田、三沢。



○新穂高－三ツ俣小屋－黒部五郎－薬師岳－房治
（春山偵察）
期　　間　　十月二十八日～十一月五日
メンバー　　保母、浜田。

1991　年　度

会　計　報　告

高　田　邦　雄

収　入　の　部	
前　期　繰　越	8,728.-
部　　費	35,500.-
体育会より	12,700.-
ダンスパーティ利益金	52,013.-
そ　の　他	3,210.-
計	112,061.-
支　出　の　部	
通　信　費	6,104.-
交　際　費	7,600.-
装　　備	37,553.-
備　　品	6,225.-
（ノート・紙・その他）	
交　通　費	2,480.-
そ　の　他	2,670.-
計	62,632.-
残　高	49,429.-

１９６２年度報告

監　　督	宍戸　　元
	木村裕一
	広瀬貞雄

役　　員

チーフ・リーダ	梶本孝治
サブリーダ	三沢日出夫
マネージャー	浜田彰三
新人係	高田邦雄
会計係	
岳連係	横尾秀次郎
装備係	牧野大輔
食糧係	山本久夫
記録係	大川和秋
気象係	桑原昭夫
体育会	辻　　光弘

1962 年度

夏　山　合　宿

’62 年 7 月～8 月

「山小屋建設のボッカと穂高岳涸沢合宿」

梶　本　孝　治

最初、夏山定着合宿地として、鹿島槍大冷沢を中心として一部カクネ里へ分散と考えて、調査研究を進めていたのであるが、六月末になり急に栂池の山小屋建設のボッカをしなければならなくなった。一方メンバーも上級部員が少く、初級、中級のルートか多くとれるという点で涸沢に決定した。従って七月後半は栂池でボッカ生活。続いて八月に入り、涸沢定着合宿。そして縦走と一ヶ月に渡るかなり苦しい計画となった。

涸沢合宿では、当然栂池での半月にわたるボッカの疲労から来る不注意による事故を最も恐れた。夏山合宿の第一の目的は一、二年部員のトレーニングとし、上級部員はその指導性の面に重点を置いた、そこであまり極部的で困難なルートは避け、穂高を広く歩き、岩を登るように努めた。時期が少し遅かったため涸沢の残雪少く、岩場への往復に十分の雪上歩行が出来なかったので、特に、従来以上に雪上訓練に時間をかけた。これはかなりの成果があったと思う。

結果として、夏の穂高は予想以上に登山者で混乱し、人工落石の危険性から滝谷等秀れた岩場に手を出しかねた。涸沢のテント地の人間くさいのもあまりいただけない。穂高にしろ、剣にしろ、他の山々に比較出来ない豊富な岩場と残雪を蔵し、ルート図、グレーデインクも明確で秀れたトレーニング地であるのだが、あまりそれに依存すると、人にわずらわされ、形式主義に流れやすく、岩は登れても、山を総括的に見る力のない登山に陥る。これは夏山合宿に限ず、一考を要することである。

縦走はあまり日数もとれず、意欲的なものが出来なかつたのは少々残念である。

「ボッカから涸沢合宿へ」

今年の夏山合宿は、前半は山小屋建設の為のボッカにスキー部、ワンゲル、一般の協力者等と共に当り、後半は涸沢で定着合宿という形式をとった。

ボッカにあたっては、神ノ田圃早大小屋を中心として行動し、涸沢合宿に入る数日前に下山して、猪股氏宅を中心にした。ボッカの毎日を如何に暮らすか、又ボッカの疲労が涸沢合宿に残らない様にどの様に配慮すべきかこの辺りが、前半のキーポイントである。ボッカ時間は平均三時間程度であるが、砂利、小石等を七貫～十六貫運ぶのであるから、大変である。しかし、これは豊坂の治療が物を言った。

毎日の自由時間は、高山植物の理解とか、山の雲の観察、あるいは、ヒマラヤ夢物語にと過した。今後この様な場合、山の地質的な面に触れる者が、部員に一人位あってもよいと患う。

又、疲労の問題は、猪股氏宅で、数日布団で寝ること及び、ボッカ量を制限すること及び、涸沢へ出発する前日は休養にあてることとして、涸沢合宿へと引継いだ。

次に合宿記録を簡単に印す。

＜ボッカ記録＞

浜田、辻、木原は部よりも、山小屋建設の為の全体的な面から、働いている。

参加者　L 三沢（T4)、山本（J4)、高田（E3)、桑原（T2)、大川（T3)、牧野(2)、吉川(S2)、播本(J2)、秋濃(Σ2)、豊坂(M3)、栗原(J1)、原(S1)、大笹(T2)、中村(S2)、石浜(T1)

行動　7 月 16 日～25 日　栗原、原、猪股氏宅にてボッカ

7 月 16 日～25 日　全員早大小ヤにてボッカ

7 月 26 日～31 日　全員猪股氏宅

＜涸沢定着合宿＞

期　日　8 月 1 日～8 月 9 日

メンバー　L 梶本(T4)、山本(J4)、三沢(T4)、高田(E3)、横尾(T3)、大川(T3)、桑原(T2)、牧野(S2)、吉川(S2)、播本(J2)、秋濃（Σ2)、木原(T3)、豊坂(M3)、中村（S2)、大笹(T2)、栗原（J1)、原(S1)、石浜(T1)、畑中(M1)、田村(M6)、笠松(M6)、宇野(M5)、広橋(OB)、田井(OB)、兼清(OB)、広瀬(OB)、玉井(OB)、佐藤(OB)、米沢(OB)

記　録

8 月 1 日（快晴）ボッカ連中　南小谷駅より一路大糸線で松本へ。徳沢園。

8 月 2 日（晴）後発梶本等 10 名共に涸沢定着（19・36）

8 月 3 日（快晴後雨）第一回雪上訓練全員。TK 宇野・米沢。この日三沢下山。

8 月 4 日（雨ッ後快晴）台風九号の為停滞。玉井下山。

8月5日（快晴）北尾根、東稜、明神岳、天狗のコルと4パーティに分かれて歩く。木原・桑原・下山、広橋・田井・入山。

8月6日（後後雨）昨日の一般ルートの他にジャンダルム岩登り、奥穂東北稜を加える。兼清・佐藤下山。

8月7日（曇）更に又白池、涸沢東稜、北穂北壁、滝谷第二尾根にパーティを出す。

8月8日（曇後晴）第二回雪上訓練。田村、宇野、米沢下山。

8月9日（雨ッ）停滞　定着合宿終了。広橋、笠松下山。

合宿終了後、直ちにその場で反省会を開いてみた。主な内容を次に個条書きに示す。

一、大バカ天が、台風に惨々であった。又、青天のポールが折れた。

一、新人のザイルの必要性、ザイルさばき。又トレーニングの基本がおろそかになる。

一。落石が多い。ヘルメットの使用を考えねばならない。縦走路で事故が起こっている。目撃者には非常なショックを与える。

一、テントへ戻る時間の厳守。

一、二年生のルートファインディングに不安がある。

一、ガス、雨中での岩登りとその判断。又雨具のつけ時について。行動中での天候判断。

（大川記）

夏山涸沢定着合宿個人行動表

	雪上訓練		北尾根	東稜	天狗コル	奥穂東山稜	ジャンダルム	涸沢槍東稜	北陸	又白池	滝谷第2尾根	横尾本谷	明神	TK	下山日
梶本	3日	8日	5日	6日							7日				10日
山本	3日	8日	5日			6日	7日						5日		
高田	3日	8日	7日	5日			6日								
横尾	3日	8日	6日		5日			7日	7日						
大川	3日	8日	5日	7日	6日							7日			
牧野	3日	8日	6日	5日				7日	7日						
吉川	3日	8日	7日	6日	5日										
播本	3日	8日	5日			6日	7日								
秋濃	3日	8日	5日	7日			6日					7日	5日		
豊坂	3日	8日	6日	5日							7日				
中村	3日	8日			5日									6,7日	
栗原	3日	8日	6日	7日								7日		5日	

石浜	3日	8日	7日	5日										6日	
原	3日	8日	5日	6日						7日					
畑中	3日	8日	5日			6日								7日	
大笹	3日	8日		6日										5,7日	
田村	3日		5日	7日			6日					7日	5日		8日
笠松	3日		6日		5日					7日				8日	9日
宇野			6日	7日	5日							7日		3日	8日
広瀬	3日	8日		5日		6日				7日					10日
広橋		8日	7日	6日											9日
田井		8日		6日			7日								10日
兼清	3日		5日												6日
玉井	3日														4日
佐藤	3日		5日												6日
米沢				5日										3,7日	8日
三沢	3日														3日
桑原	3日														5日
木原	3日														5日

＊数字は行動日 8月xx日を示す。

冬　山　合　宿　報　告

「栂池より白馬三山」

梶　本　孝　洽

白馬岳栂池に今年の夏、部員が文字通り、汗と涙で資材をボッカした阪大の山小屋「栂木寮」が完成した。長年にわたり希望した山小屋を山岳会発足当時の先輩の輝しい足跡を残した白馬岳の麓に得たことは大へん喜ばしい。夏山合宿後、山小屋建設を見に行った時、既にぜひ今年の冬山は木の香りも新しい山小尾をベースとしてと決めていた。これは又、資材を背にした部員一同の希望であった。

十一月白馬岳が新雪に被われた頃、山小屋完成、同時に冬山、春山食糧荷上げと偵察を行った。栂池より不帰往復の冬山計画で偵察した結果、地形的には乗鞍岳の斜面の雪崩、不帰の通過が問題となったが、さして困難とは思われない。しかし問題はこの地城の悪天候にある。過去数年の記録を調べると予想以上に悪く、遭難例も長期の風雲と多量降雪によるものである。統計的に考えて、樹林帯以上の行動は三日に一日では無理な様なので我々の冬の休暇では不可能に思われた。春山計画は日本海より後立縦走であるので、冬山は白馬鑓までとし、新人も可能な限り上部テントに入り露営訓練、スキー練習も重視する事にした。

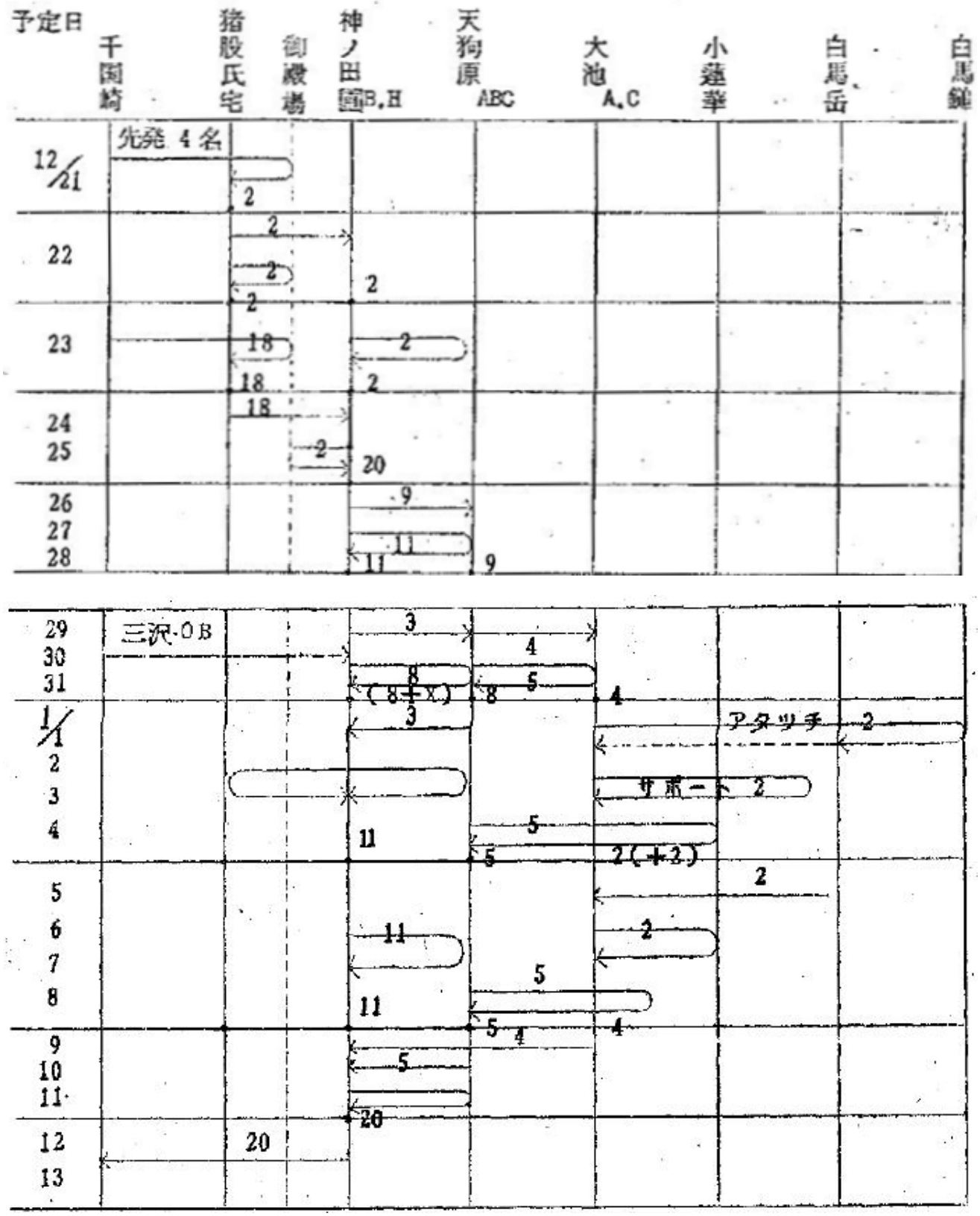
結果として二十三日に人山以来二十九日まで冬の北アルプスとしては、例外的な好天候に恵まれ、連日行動で二十四日に BH 入り、二十五日、天狗原に ABC 設営、二十七日大池南端に AC を設営し、二十八日に予定の鑓往復を行った。その間前後三日間二年部員以上ほぼ全員白馬岳往復出来た。この前後はまるで春山の快晴を思わせ、雪も天狗原より上部はよくしまっていた。三十日より新人も ABC で四日に BH に撤収するまで、スキー練習を行った。この間機会が有れば新人のトレーニングに再び上部に行きたかったが、さすが厳冬期らしく風雪の毎日で成し得なかった。天狗原の風が通る所に張ったテントも朝目が覚めた時にはベンチレーターまでうずまっていた。数日前の天狗原と異り、強風に粉雪が川の様に流れていた。この胸まで没する登攀には絶望的な粉雪も、我々に最高のスキーゲレンデを提供してくれた。天狗原の風雪の中での五日間のスキー練習では基礎を一通りやるのがせいいっぱいで、もう数日欲しい、

しかし、かなり全員上達した様だ。天候か良ければ、山岳部のスキーらしく広範囲に歩き回りたかったが、風雪の天狗原では盲同然で出来なかった。

四日、天狗原の三張のテントを掘り出し、風雪の中、腰までの粉雪の中を泳ぐように下る、BH にたどりつき、ストーブの回りに部員の顔がそろうと、凍りついていた口もほおもほころび、ストーブの前にどっかと座り込むと胸に我々の山小屋を持った喜びがぐっと来た。

冬にこの山小屋「栂木寮」を使用した結果、今後この小屋をペースとして新人合宿を持つ事は非常に有効だと思う、スキーが広範囲に使用出来、天狗原にテントを設営すれば、天候にさえ注意すれば白馬往復は容易である。新人を冬山合宿にすぐ参加させるにはいろいろ問題もあり、トレーニングも中途半端になりがちであった。栂池周辺でスキーで雪にまみれる事は冬山第一歩に最もふさわしい。それに今度のように正月休みを利用して先輩達が多数小屋を訪れれば、楽しい新人合宿になるだろう。

行　動　予　定　表


予定日
千畑崎
猪股氏宅
御殿場
神ノ田 B.H
天狗原 ABC
大池 A.C
小蓮華
白馬岳
白馬鑓
先発 4名
12/21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
1/1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
三沢・OB
アタッチ
サボー

行　動　表

○：スキー練習

	猪股宅	御殿場	神田圓BH	天狗原ABC	大池AC	白馬岳	白馬鑓
12/21	3 →	先発隊　浜田・山本・高田					
22		3 → （本隊 大阪港）					
23◎	本隊 15 →	← 3 ← 16	デポ	御殿場小ヤへ食糧一部デポ 浜田・高田は山小ヤの仕事で猪股宅			
24⊗		← 12	5 →	← 梶本等5名　上部偵察 デポ回収ダブルポッカ			
25○				9 → ← 9 ← キーパー 繁原	浜田 吉川 鴻巣 新人始	大川 山本 繁原 鈴木 賀原 天狗原ABC設営	
26○			天	2 → ← キーパー 鈴木	AC兵食糧デポ		
27○			天	2 → 吉川 鴻巣	キーパー 繁原 ロ 鈴木 高橋 高橋 大川 ← 山本 繁原 鈴木 鈴木	A.C建設 全一白馬登頂	
28○	2 →	大阪（主隊）	天	山本 繁原 鈴木 吉川 ← キーパー 鴻巣 鈴木	繁原 高橋 ←	鴻巣 下ろ 繁原 分ロ白馬登頂	
29○	三浦 第各各	浜田 高橋 鴻巣 大原（主隊）	← 高橋 鈴木 鈴木 中村 大池 石浜 繁原	キーパー 鴻巣 ← 武井 高橋 大川	繁原 吉川 ← 鴻巣	初回白馬登頂 新入ABCにて	
30○	野田 手塚 大工原	三浦（田中 高橋 鴻巣）（鈴木）		繁原 鈴木 鈴木（主隊） ← 鈴木	天		
31⊗	→	野田 手塚 大工原 塚田	← 山本 高橋 鴻巣	天			
1/1⊗			三浦 繁原 鈴木 鈴木 ← 山本 高橋 鈴木	天 （野田）（大島）（高橋）（塚田）（田中）	繁原	繁原	（大工原）
2⊗	← （田中）（鴻巣）（塚田）		山本 鴻巣	天			
3⊗				天	ABC 落雷多く天幕焼失		
4⊗		（野田）（大島）（塚田）（大工原）（本隊） （高橋）（鈴木）	鴻巣 高橋	天狗原 ABC 撤収 雪崩多く 鴻巣 高橋 に手負			
5⊗	←	226	金沢 BH 撤収　全隊 解散				

行　動　概　要

期間 12 月 20 日～1 月 5 日

メンバー　CL 梶本、SL 山本、SL 浜田、装　牧野、播木、食　古川、秋濃、気象、記録　大川、医　豊坂、梱包　桑原、三沢、横尾、高田、木原、中村、大笹、原、石浜、畑中、栗原、大工原、保母

阪大栂ノ木寮訪問　OB 大島、平田、野田、清水、高橋、佐藤（毅）、米沢、田井

12 月 20 日　先発浜田、山本、高田 3 名

12 月 21 日　先発 3 名　沓掛猪股氏宅泊。

12 月 22 日　夏道を阪大小ヤへ向う。

10･30 猪股氏宅出　14･30 阪大小屋

後発　梶本等現役 16 名、篠田先生始め、OB 多数の見送りの中を、大阪駅を後にした。

12 月 23 日（曇）おきまりの時刻に千国崎の駅に着いた。とに角、猪股さん宅迄、一時間程、ボッカせねばならぬ。すごい荷物である。この人数で、1 回で運びきれるか、と疑問になってくる。ある者はザックには背負いきれず、両手を使用する。途中、先発 3 名が小屋から下りて、迎えにきて呉れた。秋の降雪の名残りも消え、予想外に雪はなく、東山連邦も、所々白いものが見えるだけである。

猪股氏宅で御馳走になり、午後には、御殿場の小屋迄一人平均七 Kg ボッカする。夏道か殆ど出ていて、全く意外だった。先発の話では、既に早大始め、数パーティが入山しているということである。風呂に入り、ぐっすり寝込んだ。

9･15 千国崎駅　10･20 同出　11･30 猪股氏宅　14･00 同出　16・00 御殿場　17･30 猪股氏宅

先発 7･30 小ヤ出　9･10 猪股氏宅

12 月 24 日（雪）起きれば雪である。私達は小ヤに入る迄このドカ雪のラッセルを極度に嫌だった。ところが今年は雪が少く、又先に入山した者があってこのラッセルの苦労の減った様に思われた。しかし本日は雪である。これで山の様子も一変するだろう。小ヤ迄は膝程度迄のラッセルだった。そして雪の中に我が小屋を見た時、夏の汗と泥から今日のこの姿迄、感慨にふけらずにはいられない。降雪は激しく、寒かった。その中を、御殿場迄昨日のデポ荷を取りに下る。一部は、天狗原への登りを偵察に行く。この隊は、スキーでかなり苦労した。

5･00 起床、6･55 出発、13･10 小屋、13･50 同出、14･20 御殿場、15･30 小ヤ

12 月 25 日（晴）起きれば満天星空。目指す白馬三山が目前にどっしり構え、やがて赤色を帯びてくる。無風である。全員スキーにシールをつける。出発早々に問題が起きた。勿論ある程度は予測されていたことだが…。始めてスキーをつける者の遅れである。こゝで一年生は殆んど全員ワツパになる。スキーにした場合、パーティが分散しがちになる。スキーは登りの道具と割切っているが、その登りの技術に利用するにも、まだまだ未熟であるし、個人差が激しい。とに角、快晴無風の中を 11･30 天狗原へ全員集っだ。そして、こゝを A･B･C とした。場所は天狗原社のすぐ横。末だ夏の岩が露出している。どこかのパーティが、テントを張っている。又今日の快晴に、白馬アタックの連中も戻ってくる。懸念された乗鞍の斜面も、大丈夫の様である。しかし、一度、ドカ雪がくれば、やはり危険だ。浜田等の新人中心部隊は小ヤへ下り、天狗原では、でっかいブロックを組んで、テントを構えた。里の景色も、一辺して化粧する。午後には白馬を見ながら、スキーでころげまわる。

4･10 起　8･30 小ヤ出　11･30 天狗原、浜田等 8 名小ヤへ下る。天狗原－テント 2 張 9 名。

12 月 26 日　地吹雪→快晴風ッ　地吹雪である。様子を見ていると青空が広がっている。この強風の中を大池に AC を出すのは、少し見合す。大池のテント地選択を兼ねて、荷物をデポしに出る。乗鞍岳を登りきると、猛烈な風が、顔に吹きつける。旗ざおをもつ横尾は、足がとられると、ボヤく。テント地は、大池の南のコルの附近にする。乗鞍岳の頂上でガスに巻かれると、動きがとれなくなるだろう。帰りは早かった。強風をついて、スキーに戯れる。

小ヤの連中は、浜田を先頭に栂池へ出かけ、スキー練習。早大の連中は相当上手いらしく、劣等感を抱いた。

5･00 起床　11･30 出　13･00 大池にデポ　13･50 天狗原　　14･30 スキー　16･00 テント

12 月 27 日　快晴→晴→曇→快晴

AC 建設の日。嘘の様な好天気に恵まれ、大池 AC 予定地迄楽に行けた。冬山の九日週期あるいは、天侯の九年周期等、今の所当たる気配がない。AC 建設には高田、大川が当たり、梶本、横尾及びサポート 4 名は、あまりの天候に小蓮華往復と足を延した。更に小蓮華から白馬岳へと足を延してしまった。馬鹿陽気である。一体、冬山でこの様なことが・・・・？。時に気温 6℃。

3･00 起床　5･30 出　7･00 大池 AC　7･30 梶本等 6 名小蓮華へ迎う。8･40 小蓮華 10･00 白馬　16･30 同出　12･00 大池、山本等 4 名 ABC へ下る。

この日小ヤでは、やはりスキー練習を行い。又早大との親睦を深める。又、播本、吉川が天狗原へ入った。

さて夜は、明日アタックか出せそうだとのことで、準備をする。アタック食の量が馬鹿に多い。スープ袋 10 も要らぬ。ビーフン迄も多すぎる。1/2 程度に食糧を減らす。ラジュースの調子も快調だ。点検も終わり、アタック梶本、根尾は 18･30 寝る。高田と二人、22･00 の天気図をつける。ラジュースで水筒に水をたっぷり積め、ローソクの明りの中で、二人しんみりラジオのメロディに耳を傾け、夜の更けるのを感じた。テントから出ると、星か親しく眼ばたきする。

天気図から、僕がいえるのは、午前中は今日と同じく快晴だろう。しかし、午後は下り坂に向う可能性が強い。アタック隊には、日本海の雲の変化に特に注意してもらおうということだった。

28 日（快晴）無風快晴である。4･20 テントを飛び出す。すでに他のパーティが先行している。懐電の明りをたよりに、アイゼンをきかす。アタック隊の重量は十五 kg～二十 kg、快調のピッチで、どっちがサポートか分からぬ。白馬のピークで、四人そろってモルゲン、ロートをあびる。数パーティ一緒になる。剣の勇姿を仰ぎ、槍穂高の山群に目をやる時、我々は自然の一個の生体にすぎない。

頂上で握手を代わし、別れをつげた。梶本の青い彩かなキルティング、横尾の草色の地味なキルティングが見る間にをつてしまつた。AC に戻り、天狗原から来た 4 名と乗鞍で日向ぼっこをしてアタックを観察するも分らず。天候は春の快晴に劣らない。あまりにも運に恵まれている。午後になって気温 6℃。昨日積んだブロックは、解けて隙間が出てみじめである。

アタックは全く御機嫌で戻つた。13 時間程の行程でさすがに、へばり気味ながらも、自馬三山往復にすっりかり気をよくしていた。天候がよかったので、烈風に合うこともなかった。

小ヤでは相変らずスキーである。

アタック記録、メンバー、梶本、横尾。サポート、高田、大川、　3･00 起床　4･45 出 6･00 小蓮華　7･15 白馬岳頂上　7･45 同出　サポート引返す。　9･00 杓子岳　9･45 白馬鎚岳　10･40 同発、13･30 白馬頂上　15･30AC

12 月 29 日（快晴）　予想外の好天の連続でアタックが予定より早く終ったので、2 年部員を全員白馬へ連れて行くことにし、大池 AC は今日撤集することにした。明日からは天狗原で 1 月 4 日迄スキー合宿にきりかえる方針。この日、梶本が 2 午吉川、豊坂を連れて白馬を往復する。これで２年部員以上で頂上を踏まぬのは、浜田、遅れで入山の三沢、木原、捻座の播本である。

又、スキー合宿の為、小ヤから新人を全員天狗原を上げた。

12 月 30 日	雪ミゾレ気味	スキー練習
12 月 31 日	地吹雪	
1 月 1 日	地吹雪	
1 月 2 日	地吹雪	
1 月 3 日	地吹雪	

連日の好天とはうつて変って地吹雪の連続である。降雪も激しく、一晩の中に、テントの高さは積もる。この中で梶本をコーチにしてスキー練習に励む。新人にはかなり、こたえた様だったが、いゝ経験だった。尚お途中 1 月 1 日には OB 連が、私達の顔を拝みにきたので、敬々しく拝んでもらった。

1 月 4 日　地吹雪　テント周囲の雪の量が烈しく雪かきも追いつかなくなり出す。今日撤収。撤収にひどく時間を食い、考えねばならぬものがある。撤収は一つの大仕事であって、軽々しく考えてはいけない。やゝもすると、もう下山だという気が先に走って。安易に考えられはしないだろうか。小ヤの夜は楽しかった。小豆をぐつぐつ煮て、サトウを入れ、もちを入れて食べたら、うまかった。

4･00 起床　12・00 出　15・30 小ヤ

1 月 5 日　快晴→曇　出発の時と同じ様にモルゲン・ロートに輝く後立を仰ぎ、喜び勇んで、懐しい山小ヤを後にした。この長いツラヽも、又春がくると共に消えていくことだ。親ノ原のにぎやかなスキー客を横目に、重い荷物を背に、下手ながらもきたえたスキーを猪股さん宅へとすべらせた。

4･30 起床　7･10 出　12･00 猪俣氏宅　解散。　（大川記）

装　備　報　告

ボーラー形式をとった合宿であるため、特に軽量化を図る必要もなかった。只、風の強い所であることを考慮して、張線の予備を十分に持って行くとか、どんな小さな

穴でも修理するとか、テントには十分気を使った。以下各品目に就き説明を加えることにする。

テント－AC 用に使用したテトロンテントは、相変わらず雪が吹き込む状態で、内張りを何とかしなければならぬ必要を感じた。山行後、点検を行なった際、テントの破損がかなりひどかった。特に全体よりも外に出ているポール入れの破損がひどいということから考えて、除雪の際のスコップによるものと考えられる。特に、積雪の多い時などテントの area が摑みにくく注意して欲しい。撤収の際、前日除雪を怠った為、ペグまで堀り起こすことができず、その日のうちに小屋に着けるという安心感も手伝ってか、結局張線を切ってしまったが、ギリギリの撤収ならともかく、可成り余裕のある撤収であったのだから、反省すべき行動である。

スコップ大 1、小 2 を携行したが、小の方は大に比して極端に除雪能力か弱く、AC 用ならまだしも、極地法に於ける中間キャンプのように、かなりの期間にわたり同一地域に設営する場合には、是非とも大型を使用したい。

竹ザオ－赤布にひもをぬいつけて竹ザオに結びつけ使用したが、強度的に不十分であり。又合宿の都度部員の家族や girl friend に迷惑をかけねばならず、一考の余地がある。一つの提案として、布を直接竹ザオに巻きっけ、ゴムで止めるようにしたらいいと思うのだが。

ラジウス－attack 用に一個購入した。その性格上、軽く、取扱いが簡単で、かつ普通の能力をもつものを捜したが、適当なものがなく、用途の広いことも考え合わせて、結局 normal な Radius に落着いた。従来の Radius は各部品（特に Packing）の老朽化が著しく、能力が可成り低下している、しかし、なにせ外国製であるため部品の入手が困難であろうと思われる。御存じの方は御一報願いたい。従来の合宿に於てもそうであったが、Radius の使用が乱暴である。例えば、ゴミのついたジョウゴを平気で使うとか、曲がったマンドリンを使うとか・・・・・。

テルモス－相変らず破損が多く、二本程壊してしまった。外のカバーとガラス瓶との間に綿をつめれば、ある程度防げるものではないか。

ケロシン－0.7ℓ/tent･day として準備した。少し余ったがギリギリなのもちよっと不安だし、適当なところと思われる。容器のボリタンクは内蓋のないものを購入したが。どうしてもケロが漏れ出し具合が悪かった。

以上思いつくままに書いたが、さして悪天候にも会わず、欠点が現れなかったが、テント、或いはザイルに対する明瞭な Data がないことは今後に不安を残すものであ

る。数的な Data を得る手短かな方法はないものだろうか。一般に装備品の取扱いが非常に雑である。装備は融通性に乏しいものであるから、破損、紛失等は致命的な結果を引き起こし得る、ということを考えて、取扱いには山だけでなくルーム内に於ても充分留意して欲しい。　　（牧野記）

装　備　表

品名	単重量	栂池 BH	天狗原ABC	大池 AC	A 用	合計	総重量
テント　V1	12.0 Kg		1			1	12.0Kg
V2	12.0		1			1	12.0
V3	12.0	1				1	12.0
T1	8.0			1		1	8.0
ペグ	0.1	12	28	18		58	5.8
G.S	1.5	1				1	1.5
鋸	0.5		1	1	1	2	1.4
スコップ	大 1.6	1	1			1	3.0
	小 1.2		1	1		2	
張線予備			4	2		6	≒0.3
タワシ	0.05	2	2	2		6	0.3
ツエルト	1.2		2	2	1	4	4.8
ビニールシート（3×3m）				1	1		0.5
ザイル（白）	2.5		1	1		2	5.0
（赤）	2.0			1	1	1	2.0
カラビナ	0.12		2	4	2	6	0.72
竹ザオ	0.1	20	20	10		50	5.0
赤布		15				15	
ラジウス	1.2	1	2	1		4	4.8
石油コンロ	3.0	1				1	3.0
コッフェル	0.8		2	2	1	4	3.2
オ玉	0.05	1	2	2	1	4	0.15
テルモス	0.54	2	2	3	2	7	3.7
ケロシン		40ℓ	16ℓ	10ℓ	2ℓ	68ℓ	68.0
メタ	0.12	6	8	6	2	20	3.0
トランシーバー	1.0	1	1	2	1	4	4.0
ラジオ	0.8	1	1	1		3	2.4
自記温度計	3.0	1				1	3.0
寒暖計	0.04	1	1	1		3	0.12
天気図		1	1	1		3	
ポリタン		2	4	5	1	11	
エヤマット修理具		1	1	1		3	

ブラックテープ		1	1	1		3	
ラジオ電池		1set	1set	1set		3set	≒1.0
ポリエチレン袋				2	2		
ローソク	0.06	30	25			65	4.0
マンドリン		3	6	8		17	
計		27Kg	58Kg	39Kg			124Kg

食　料　報　告

冬山合宿の食料計画は、主として昨年度の春山合宿の食料計画を参考にして立案した。秋に BH へ二三〇kg の食料をボッカしてあったので、軽量化には留意しなかった。BH と ABC で停滞食として米を少し使った以外は行動食と停滞食の区別をしなかった。主食と調味料は出来るだけ種類を多くしたかったけれども、費用などのために結局旧態依然たるものになってしまった。

反省

一、秋のボッカのとき、梱包の仕方を間違ったために、主食や調味料の種類がテントによって偏ってしまったのは食料係のミスであった。しかし合宿の期間が予定より短かかったこととテント間の連絡が容易にできたので、極度に種類の偏りを感じなかったかもしれない、

二、スープ袋について

これは昨年度の春山合宿のときは、非常に手間がかかったので、生協に依頼することにした。肉として、豚肉ばかりを用いたのは失敗であった。もっと脂肪の少い肉を用いなければ、肉の量が少く感じる。軽量化のためにはまだ改良の余地がある。

三、その他

量が少ないという声も一部ではあったが、それは胃袋が少々異常な連中のことで、常人にとっては十分であったと思う。

合宿が予定より早く終ったので食料が相当余ったが、それは春山で使うことになった。

アタック食について

アタックが非常に気象条件のよいときに行われたので、アタック食としての良否の判断を下すことはできないと思う。しかし、もう少し軽量化、簡素化をはかる必要はあると思われる。

次に献立表、食料総表を記す。

＝冬　　山＝

献　立　表

（１人１日分）

	BH		ABC		AC	
朝食	ビスケット	1 本	ビスケット	1 本	ビスケット	1 本
	クラッカー	1 本	クラッカー	1 本	クラッカー	1 本
	カンパン	1 袋	カンパン	1 袋		
			バタクラッカー	1 袋		
	コンソメ	1/15	コンソメ	1/15	コンソメ	1/15
	チャーハンの素	1/4	チャーハンの素	1/4	チャーハンの素	1/4
	ミ　ソ	30g	ミ　ソ	30g	ミ　ソ	30g
	カンヅメ	1/5	スープ袋	1/4	スープ袋	1/4
	ラード	20g				
	野菜	適量				
	スープ袋 (行動日のみ)					
	玉蘭ソバ	1/6	玉蘭ソバ	1/6	玉蘭ソバ	1/6
昼食	ビスケット	1 本	ビスケット	1 本	ビスケット	1 本
	カンパン	1 袋	カンパン	1 袋	カンパン	1 袋
	クラツカー	1 袋	クラツカー	1 袋	クラツカー	1 袋
	ハム	1/4	ハム	1/4	ハム	1/4
	ソーセージ	1/3	ソーセージ	1/3		
	ジャム	1/4	ジャム	1/4	ジャム	1/4
					ミカン（行動日のみ）	1/2
夕食	玉蘭ソバ	1/2	玉蘭ソバ	1/2	玉蘭ソバ	1/2
	中華ソバ	1	中華ソバ	1		
	ビーフン	1	ビーフン	1	ビーフン	1
	モ　チ	6	モ　チ	6	モ　チ	6
	スープ袋	1/4	スープ袋	1/4	スープ袋	1/4
	カンヅメ	1/5				
	ラード	20g				
	野　菜					
	コンソメ	1/15				
	チャーハンの素	1/4				
	即席カレー	1/4	仝　左		仝　左	
	ミ　ソ	30g				

注　上表で｛　印をつけたものはそのうちいづれか一つを使う。〔 〕印をつけたものは同時にそれだけ全部を使うことを示す。

以上の他に紅茶、ミルク、緑茶、砂糖、メリケン粉（ホットケーキ用）等を使った。

BH、ABC に於て、停滞日の昼食用として米及びカレーを少し使った。

アタック食

総量

スープ袋 10 ケ　　α米 2 袋　　紅茶 1 袋　　ビーフン 9 ケ　　ウインナソーセージ 30 本　　砂糖 1 袋　　玉蘭ソバ 4 ケ。　チョコレート 20 枚　　レモン 1 ケ　　ビスケット 10 本　　チヤーハンの素 5 ケ　　カステラ 4 食分　　アメ玉 2 袋

計　10 日分

献立表は省略

＝冬　　山＝

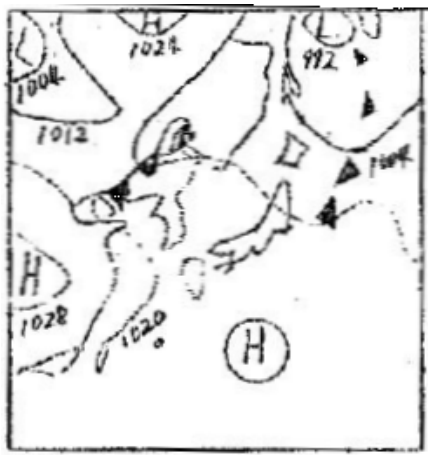
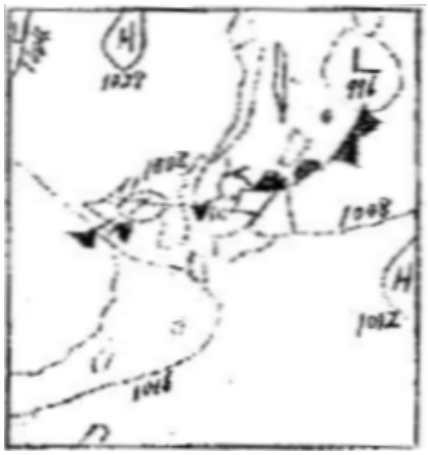
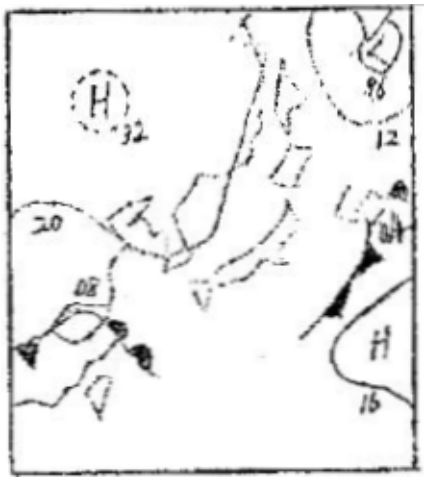
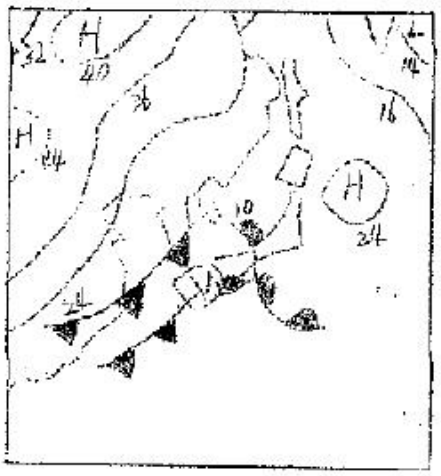
食　料　総　表

	栂池 BH	天狗原 ABC	大池 AC
ビスケット	161	96	30
クラッカー	10	40	22
カンパン	204	20	10
バタークラッカー	54	26	10
米	92 合	41 合	
玉蘭ソパ	61 袋	24 袋	17 袋
中華ソパ‘	34	40	
ビーフン	109	28	6
モ　　チ	1.8Kg	6.6Kg	4.5Kg
コンソメ	14 ケ	5 ケ	2 ケ
チヤーハンの素	63 袋	29 袋	6 袋
即席カレー	36 箇	11 箱	3 箱
ミ　　ソ	1.5Kg	1.7Kg	0.5Kg
塩	2 袋	1 袋	1 袋
コショウ	1	1	1
砂　　糖	7.5Kg	3Kg	1Kg
ハ　　ム	12 本	15 本	11 本
ソーセージ	39 本	18 本	
カンヅメ	89 個		
ラ ー ド	10Kg		
スープ袋	15 ケ	46 ケ	23 ケ
ジ ャ ム	50 ケ	17 ケ	11 ケ
ミ ル ク	12 箱	6 箱	2 箱
紅　　茶	5 箱	2 箱	1 箱
緑　　茶	6 袋	2 箱	1 袋
野　　菜	426 食分		
メリケン粉	適量	適量	週量
計	298 日分	94 日分	36 日分

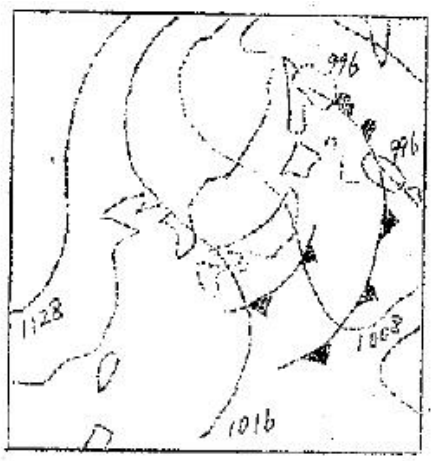
右表の「計」は一人で食えばそれだけの日数がかかることを示す。（吉川記）

気象記録（その 1）

天気図（’62.12.22～’63.1.6）（18.00）

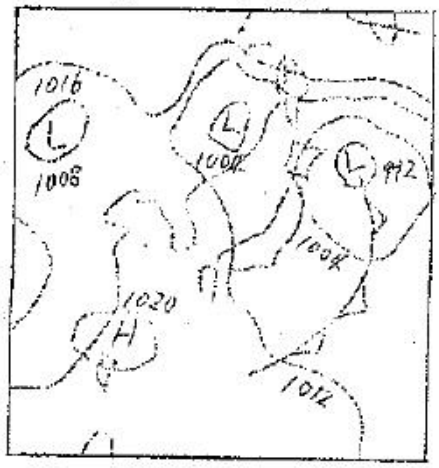
12/22 日 	23 日（曇） 	24 日（雪）
25 日（快晴、強風） 	26 日（快晴、強風） 	27 日（快晴）
28 日（快晴） 	29 日（快晴） 	30 日（雪）

31 日（雪）

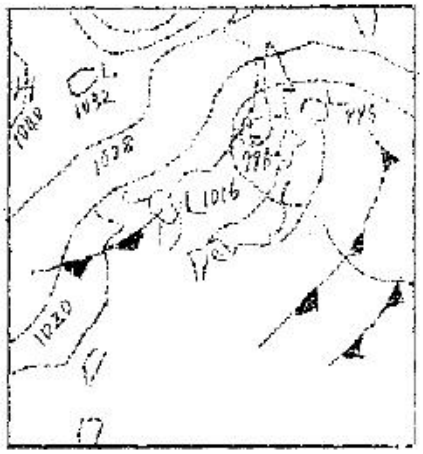


1/2 日（雪）

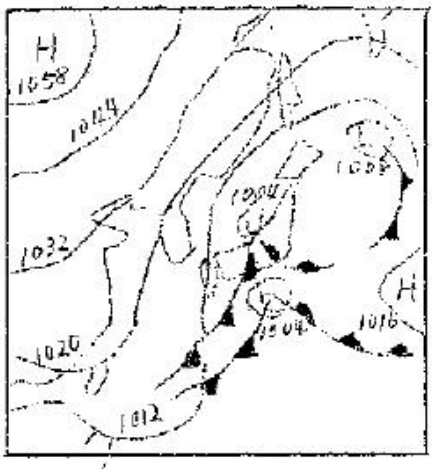
3 日（雪）



4 日（雪）



5 日（晴→雪）



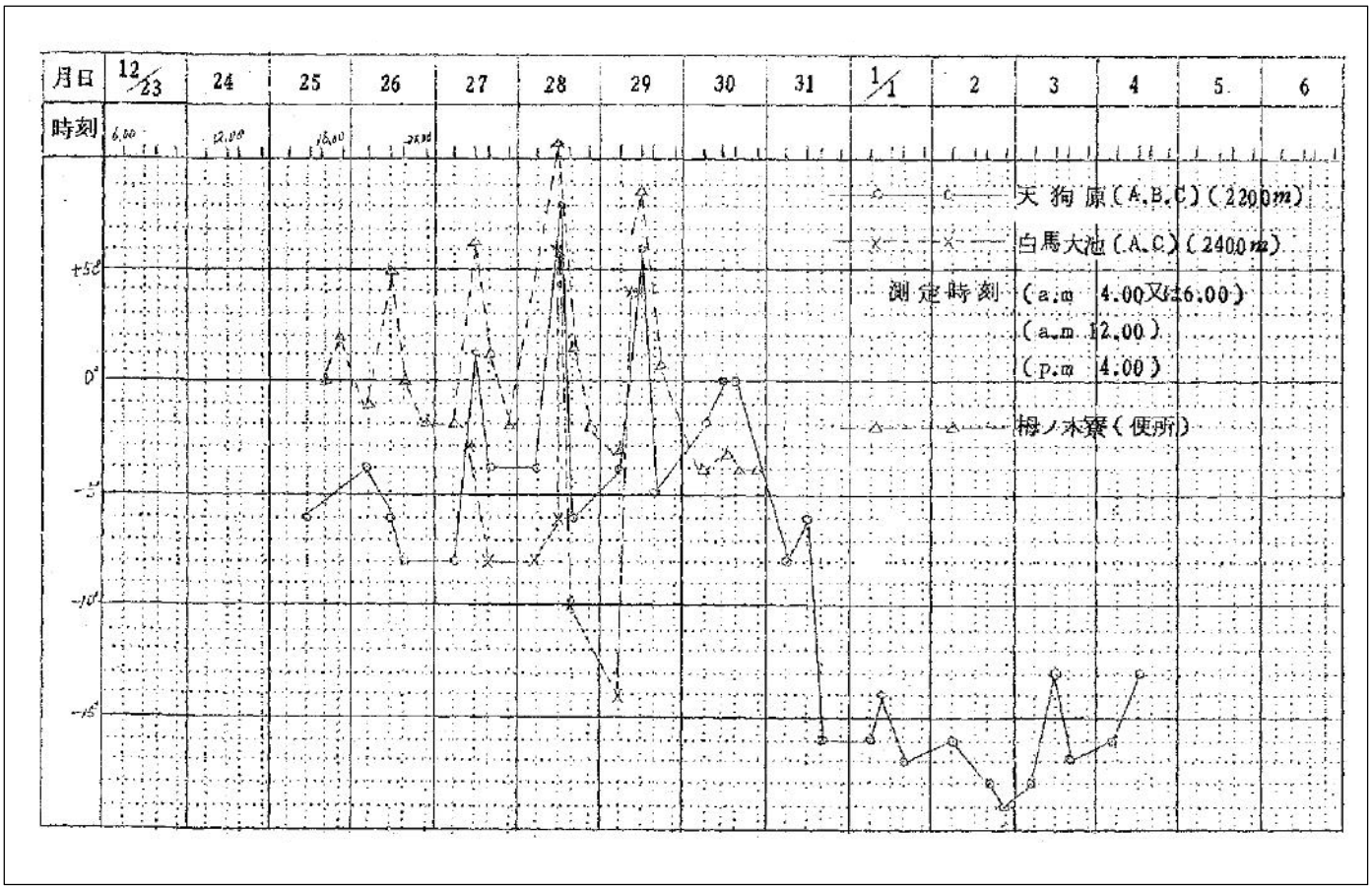
気象記録（その 2）

		神ノ田圃（栂木寮）	天　狗　原	白 馬 大 池
12月24日	天候・風	雪　N		
	気　温	-8°（19.00）		
	新 雪 量	50cm		
	備　考	18 人泊り		
25日	天候・風	快晴　無風	快晴→ガス、無風→WNW ッ	
	気　温	(4°)6.00　5°12.00　6°16.00	-6°（16.00）　WSW ッ	
	新 雪 量	0	0	
	備　考	9 人泊り		
26日	天候・風	快晴	地吹雪→快晴　WNW ッ	地吹雪　WNW ッ
	気　温	6.9° 6.00　5.5° 12.00　6° 16.00		
	新 雪 量	0		
	備　考			
27日	天候・風	晴	快晴→曇→快晴　NW ヨワシ	快晴→曇→快晴　NW ヨワシ
	気　温	4° 6.00　5° 12.00　4.5° 16.00		-3° 12.00　-8° 16.00
	新 雪 量	0		0
	備　考	9 人泊り		

28日	天候・風	快晴		快晴　終日無風
	気　温	5°12.00 (11°)16.00 (8°)20.00		-3°12:00 -8°16:00
	新雪量	0		0
	備　考	7人		ブロックが解ける
29日	天候・風	快晴	快晴 無風	快晴　風ヨワシ
	気　温	(5.0°)6.00 (8.0°)23:00	-3°17:00	-14°3:00 4°10:00 4°12:00
	新雪量		0	0
	備　考			
30日	天候・風	小雨	曇時々雪　風ヨワシ	
	気　温	-0.3°1:00 (1.2°)12:00 (18°)16:00	-8°4:00 -2°10:00 -2°16:00	
	新雪量			
	備　考			
31日	天候・風		地吹雪　NWッ	
	気　温		-8°4:00 -6°10:00 -16°16:00	
	新雪量		120cm	
	備　考			
1月1日	天候・風	雪	地吹雪と雪　WNWッ	
	気　温	4°6:00 2.5°12:00 4.5°16:00	-16°6:00 -14°10:00 -17°18:00	
	新雪量		120cm	
	備　考			
2日	天候・風	雪一時曇	地吹雪と雪　WNWッ	
	気　温	2°6:00 4.0°12:00 3.5°16:00	-16°6:00 -18°10:00 -19°18:00	
	新雪量		200cm	
	備　考			
3日	天候・風	雪　NWヨワシ	地吹雪と雪　WNWッ	
	気　温	2°6:00 6.5°12:00 6°16:00	-13°6:00 -13°12:00 -19°16:00	
	新雪量		250cm	
	備　考			
4日	天候・風	雪　NWヨワシ	地吹雪　NWッ	
	気　温		-16°4:00 -13°10:00	
	新雪量		300cm	
	備　考			
5日	天候・風			
	気　温			
	新雪量			
	備　考			

※栂ノ木寮の温度の中、括弧の温度はストーブの燃えているとき。

気象記録（その 3）（気温測定）



春　山　合　宿　報　告

＝日本海より五龍岳へ＝

横尾　秀次郎

一九六一年に於る一連の遭脆事故、しかも、その一人の友を失つた悲しむべき、苦しい時期を経験し、一つの大きな転期を我々は経験してきた。そして梶本リーダーの時期は、部の再建の第一歩であり、まず事故を起さないことを主眼に地味で着実な運営が行われた。そして我々の時代にはそれを如何に発展させるか、新しい方向へ向けるか、と云う大きな課題があった。しかし、沈滞の気分は相変わらずぬけ切らず、春山計画も長く決らぬままであった。只、去年の春山での白馬岳以北の稜線ないし白馬周辺、朝日岳東面等の地域の広いおおらかな地形に心引かれた。又、阪大山の家が去年の夏山の前半をボッカに費やしたかいあって栂池に完成し、文句なしに冬山合宿は栂池の調査を兼ねて白馬周辺と決った。そこで春山も白馬周辺を更にトレースし、しめくくりたい気持であった。自分としては、まず高等な技術より、出来る限り広い地域を、雪稜線を確実に歩き得る能力を養うことが先決と考え、縦走形式を主体とする山行を考えた。そしていくつもの案が出た。八方尾根－唐松－祖母谷－毛勝山、白馬－日本海、宇奈月－突坂山より後立山連峯へ、等々の案が出たが、分散合宿は上級部員の不足の理由から不可能と考え、一つの縦走パーティを日本海岸の親不知より白鳥山－朝日岳－白馬岳－五竜岳迄の縦走を行い新人を含むサポート隊が朝日岳へサポートすることに決った。日本海より白馬岳へのトレースは恐らく初めての記録であろうと考えていた。（白馬岳より日本海への縦走の記録はかなりある。）しかし、秋に白鳥山へ偵察に行き、そこで先年春に法政大学が同様の山行を行っていることを知り少なからず失望した。しかし蓮華温泉より朝日岳へサポートを出すこと、二年部員全員を縦走に参加させること、我部として、純粋に縦走形式に依る合宿がはじめてであることの理由からこの計画を実行に移す事に決った。たまたま此の冬に愛知大学の薬師岳遭難と云う空前の事件が起り、岳界のみならず世間から、大学山岳部のあり方に手痛い批判の声が起り、マスコミも手伝って一大センセーションを引起した。今春もし遭難を起す様な事があれば理由の如何に依らず結果は明らかであろう。それに何か重苦しい気分があった。勿論遭難を起さぬ確信はあったが————。更に OB、監督の間

で、今後春、冬の合宿にはOBが監督として参加し、リーダーグループを補佐する事を決た。日本の冬山の様に、気象雪質の変化の激しい条件で、大学三年間で十分な知識が得られるとも思えず、年功者の参加により、適切な助言か得られ、危険も未然に防き得る、と考え、OBの参加が決った。只、これを制度化した場合、年により長期の合宿に参加出来るOBの居ない場合もある。又、リーダーとOBとの間に妙な譲り合う気持があるとかえって危険でさえある場合もある。要は、平素OBとの意見の疏通を盛んにし、極く自然な形でOBと現役とが共に部を運営して行ける雰囲気を作ることにあると思う。そうすると、現役の一人よがりもなくなるだろうし、現役の溢れる意気も哩解してもらえよう。

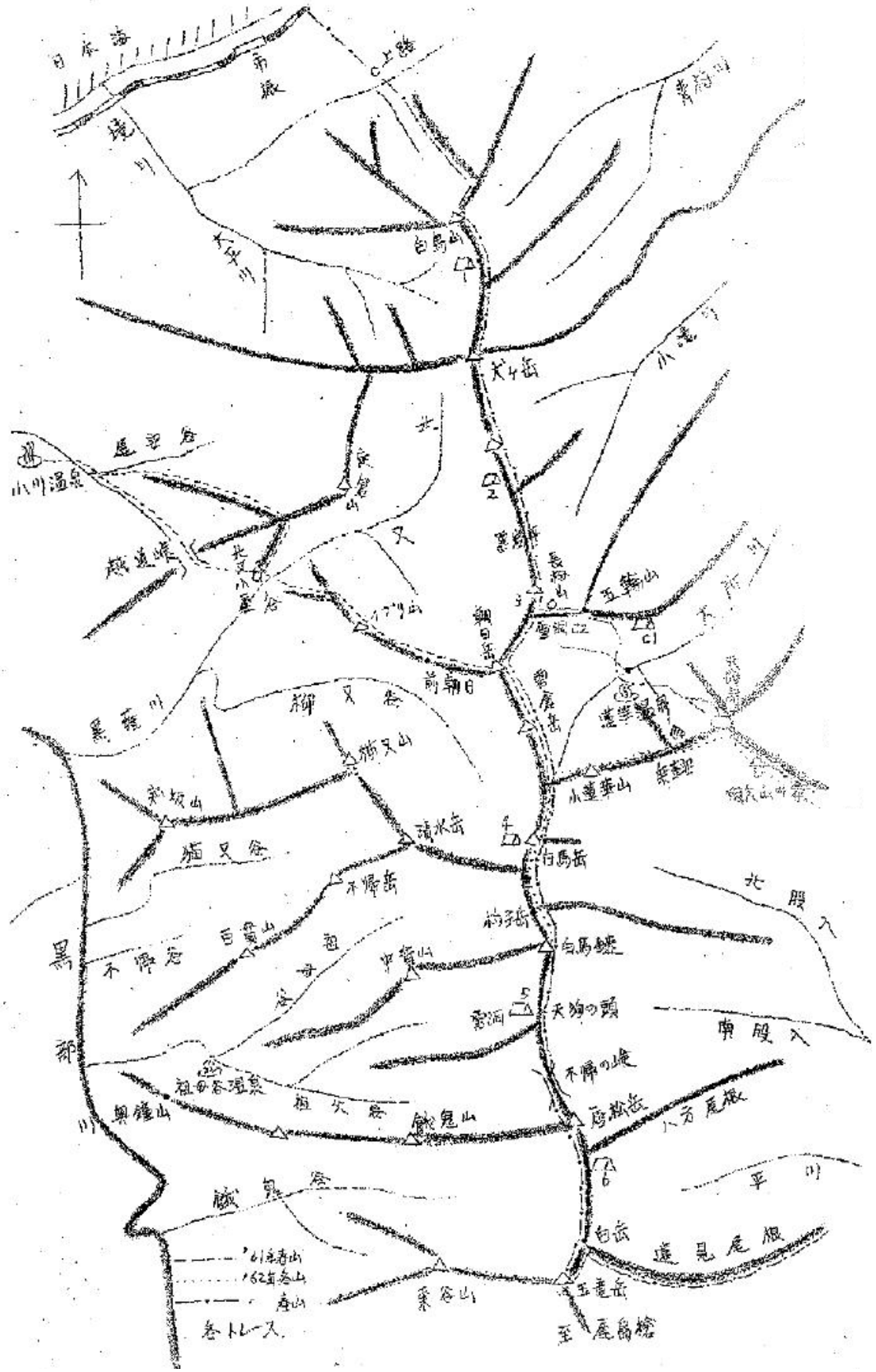
さて、今度の計画での問題点は、1.サポート隊と縦走隊が朝日岳でいかにうまく出会うか、2.サポート隊を、栂池－天狗原－蓮華温泉－朝日岳と云う長いルートを用いること、3.不帰の通過、4.連絡方法の4点である。

1.については、サポート隊が早く着いた時は、そのまま三月末迄待機、縦走隊の場合は、三月二十五日迄朝日岳で待ち、蓮華温泉へ下り待機することに決めた。しかし、実際には、待機の必要はなかつたが、サポート隊の最終キャンプが長栂山にあつた為、縦走隊があやうく看過す所であった。あの広大な地域での出会は難しいことではあるが、出発前の最終的な打合せに撒底を欠いた為か、両隊のリーダーの言にくい違いがあったのは心残りである。2.については、勿論、確実を期す意味から、栂池より白馬岳へサボートすべきであったろうが、冬と全く同一のコースであり、変化に乏しいこと。一方蓮準温泉へ下り朝日岳へのコースは。殆んど人も入らないコースで、しかも変化に富んでいて、スキー使用も可能と考え、日数に余裕を取って、このコースを選んだ。結果的にはスキー使用の必要はなかったが、一年部員には、苦しく楽しい山行であったと思える。不帰の通過については、最近の記録では殆んど問題なく通過しているが、関学ルートが最も有望と思われた。しかし、異例の好天で、雪が少く、ほぼ夏道通しに殆んど不安なく通過出来た。4.の連絡方法として、トランシーバーを使用したが、思う時に交信出来ず、全面的に信頼出来る迄にはなっていないと思われる。

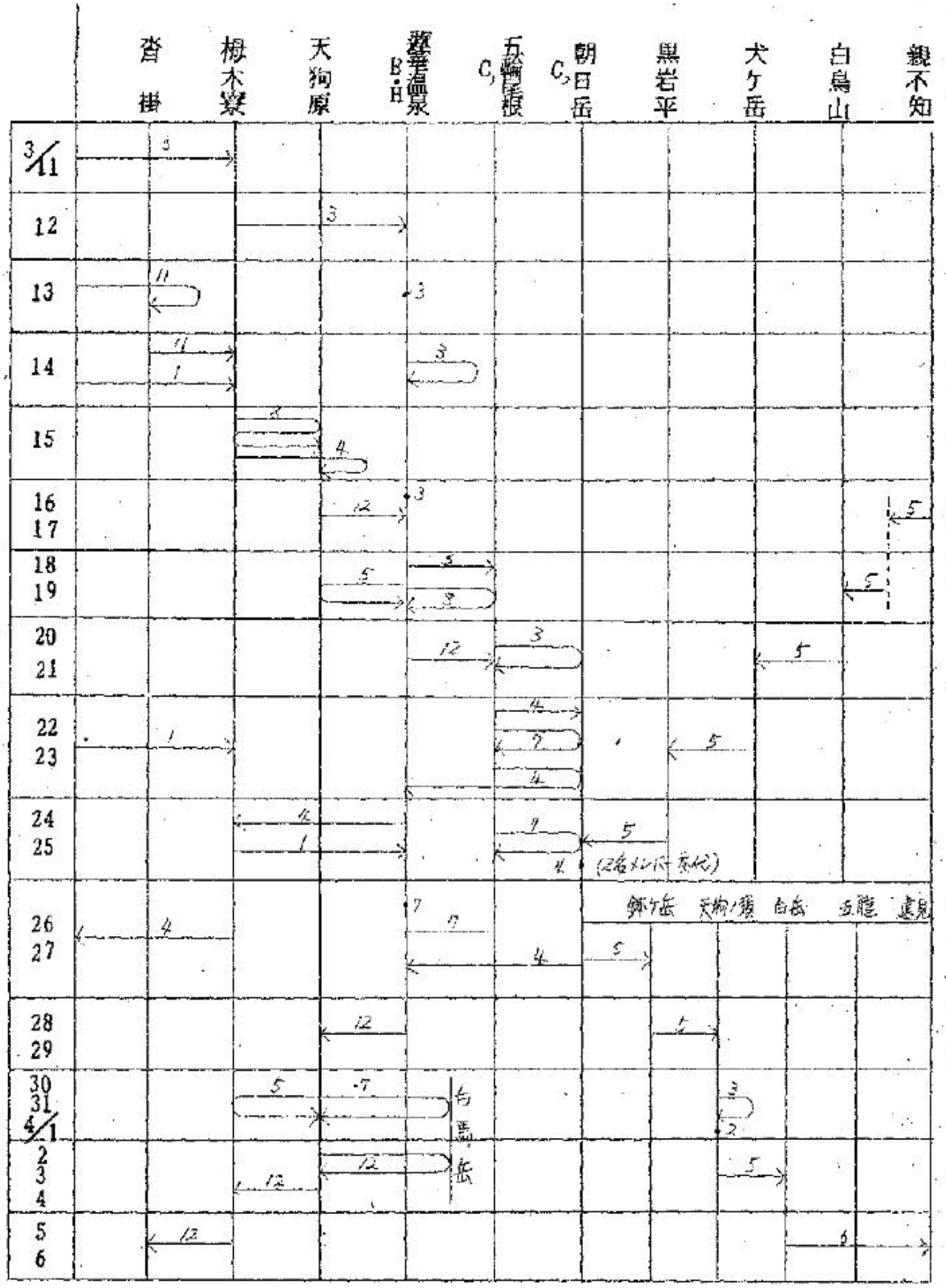
計画は、異例の好天が幸いし、思った程の困難もなく予定より一週間も早く無事終了し得た。しかし、連絡の悪さが随所に見られるのは心残りであり、綿密な計画を更に心掛けることか大切である。

海抜〇米より出発し、徐々に高度を上げ、三〇〇〇米に迫る後立山連峯を踏破したが、特に、高度の変化に伴う雪質や景観の如実な変化を身を以つて体験し得た。事実、

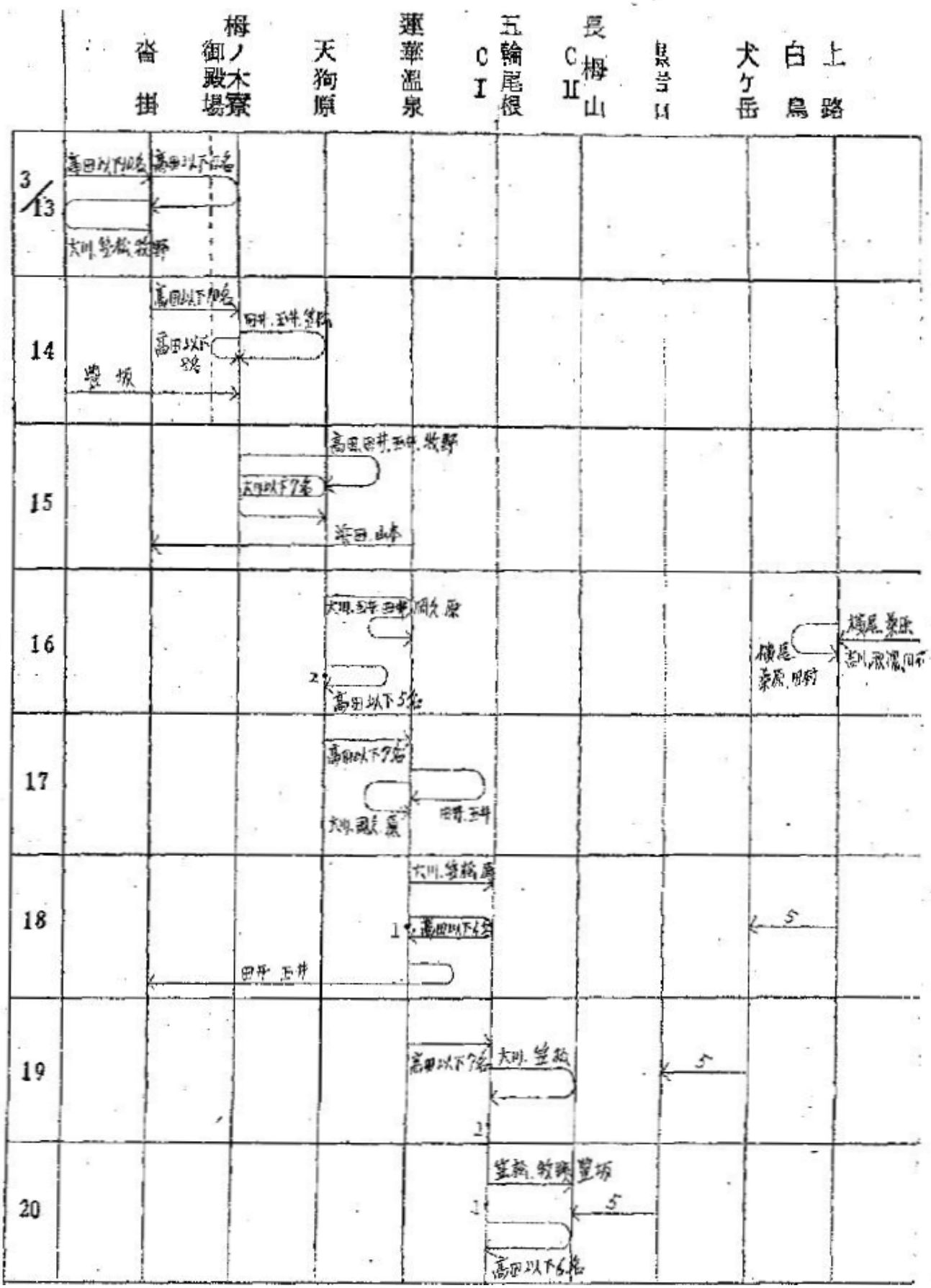
長栂山迄の三日間はワツパによるラッセルに終始した。二五〇〇米迄と、それ以上とは雪質は更に極端に変化した。この点、地形の構造の変化と共に特に興味深く感じた。

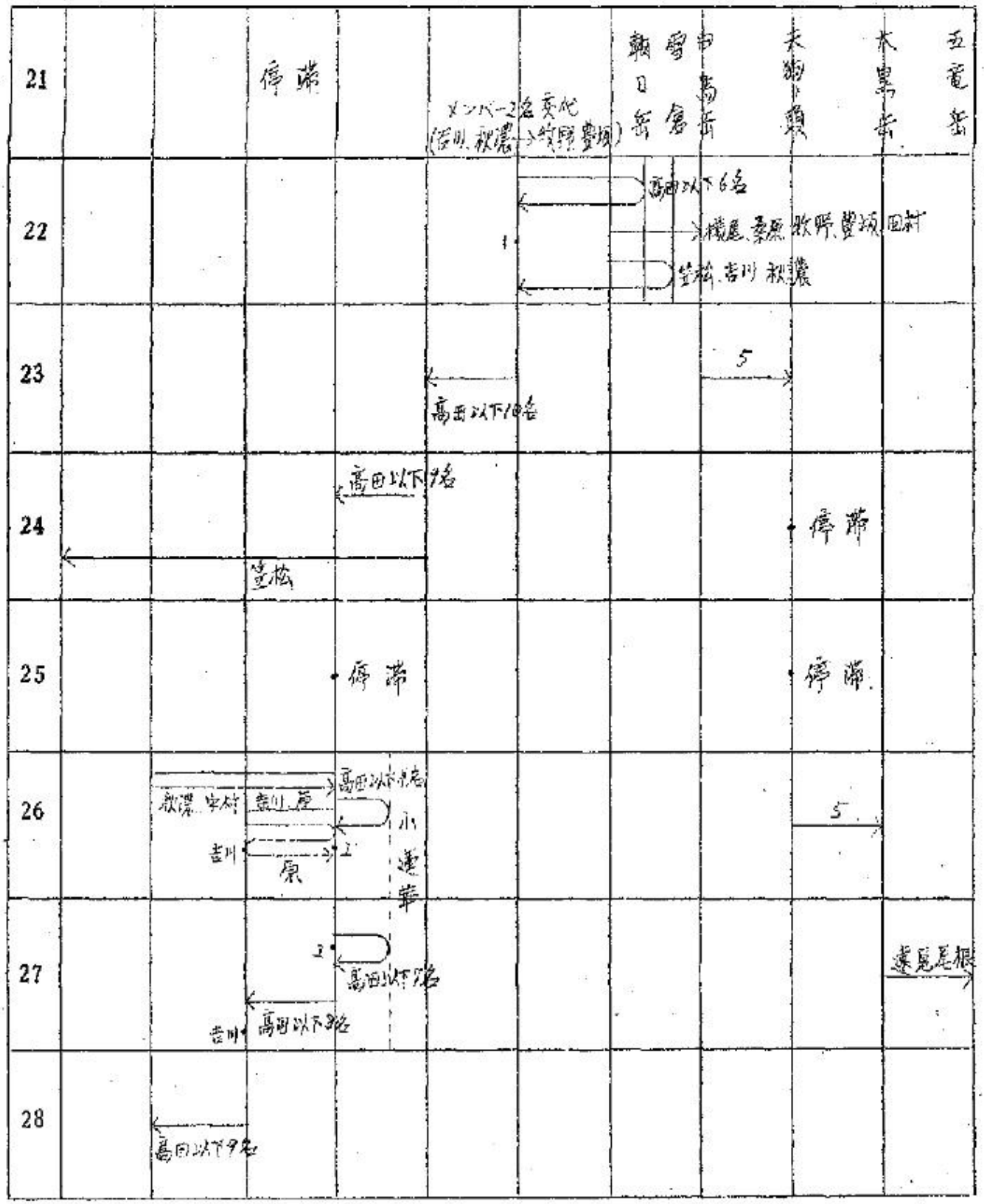


行動予定表


沓掛
樹木窪
天狗原
B・H 蓼科温泉
C₁ 五辻高原
C₂ 朝日岳
黒岩平
犬ケ岳
白鳥山
親不知
3/11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
4/1
2
3
4
5
6
(2名メンバー交代)
鄭ケ岳
天狗ノ頭
白岳
五龍
遠見
白馬岳

行動表


上路
白鳥
犬ケ岳
長梅山 CII
五輪尾根 CI
蓮華温泉
天狗原
梅ノ木寮
御殿場
沓掛
3/13
14
15
16
17
18
19
20
豊坂
高田以下7名
高田以下6名
大川、笠松、牧野
田井、玉井、笠松
高田、田井、玉井、牧野
大川以下7名
高田、山本
大川、玉井、田井
川久原
高田以下5名
高田以下7名
大川、國枝、原
田井、玉井
大川、笠松、原
田井、玉井
大川、笠松
牧野、豊坂
高田以下6名
横尾、菜原
横尾、菜原、明神
高田、飯塚、田中
5
1


21
22
23
24
25
26
27
28
五竜岳
木崎
末端
中島
雪倉
朝日
停滞
メンバー2名交代
(吉川、秋濃 → 竹腰、豊坂)
高田以下6名
横尾、桑原、牧野、豊坂、田村
笠松、吉川、秋濃
5
高田以下10名
高田以下7名
笠松
停滞
停滞
停滞
高田以下8名
秋濃、中村、吉川、屋
小
吉川
原
1
5
1
高田以下7名
吉川
高田以下8名
遠見尾根
高田以下9名

縦　走　隊　行　動　記　録

桑　原　昭　夫

メンバー　横尾（L)、桑原、田村（OB)、吉川（前半)、秋濃（前半)、牧野（後半)、豊坂（後半）

三月十五日、昨日からの風邪で頭がどうもすっきりしない。田村（OB）のお父さんに観てもらう。「「行くな」と言っても行くのだから行って良い」と言われ、大急ぎで個人装備をまとめ、ルームに行く。ルームにはサポート隊の内張らしきものを見つけ、彼等に届ける事を考える。夜八時十分の汽車に乗り込む。篠田先生初め OB の方々の見送りを受け大阪駅ではてんやわんや、汽車が動き出しザックを数えると、どうも少ない。まずは失敗の巻である。この時、広瀬 OB や梶本 OB には大変迷惑をかけた。京都駅で田村 OB はザックをざがしに大阪駅に、とに角大変な出発だった。これからの山行きでは事故のない様注意しなくては、と横尾と話し合う。

三月十六日　五時五十分　市振着、九時四十五分発、十一時五十分　上路役場着、気も重く、何か不安な我々の気持が、しとしと降る雨の中の田舎の駅での我々の様子とよく調和してかえって心には安らぎと感じた。九時過ぎ田村 OB が遅れて着く、秋濃はサポート隊の忘れたテントの内張を千国の猪股氏宅へ届け、彼はあとから上路の役場に来る事とする。両がわに家を見、人を見ながら北海の漁村を通りぬける。

去年の秋、偵察に来た時、遊んでいた小さな子供に「どろぽうだ」と言われた事か僕の心に浮んで来る。彼等には大きな荷を負い、きたならしい姿をした者は泥捧としか映らないのだろう。日本海が黒々と広く、実に雄大だ。雨が冷たく背中をはう。上路口から一本杉を経て上路それから五竜へ向うのだ。足下を日本海の波が洗って白く輝いている。雨がなおも背中を這う。

一本杉からは実に雄大に、美しく白鳥山が見える。冷たい雨の中で親鳥が羽を拡げ、ひなをあたためている様に見える。こゝから日本海ともお別れだ。上路の役場で茶を飲み、今日はこゝで宿ることにする。横尾、桑原、田村の三人で偵察に出る。結局楜谷右岸の尾根が適当と思われたので昨年の偵察通りとする、この尾根筋に沿って高度七百米位迄登り、一日で十分白鳥山を越す確信を得て役場に引き返す。

秋濃も千国から帰って来てやつと縦走のメンバーもそろう。

三月十七日（雨）停滞、出発しかけると雨が本降りになったので、役場にもう一日お世話になる。僕は歯が痛み涙をぽろぽろ出し、信さんの名アンマに世話になる。田

村 OB も風邪気味、役場の上原さんと上路の観光開発の可能性について話している。僕はそれどころではない。頭をかゝえ、歯をおさえて寝ていた。「近くの町に土砂くずれがあった様だ。村の人も心配そうだ」夕方より晴れて来た。明日は出発出来るぞ。

三月十八日　快晴　上路役場出発（三･五〇）－白鳥山（9･50～10･10）ピーク 2/3 テント地（15･25）今日の快晴にかせごうと朝ヘッドランプに導かれながら出発、昨日のトレースをたどり、後は尾根らしきところをよって坂田峠への稜線へ出る。実にすばらしい。はるか犬ヶ岳を越えて、五輪山、朝日岳が眺められる。あの山の向うに僕らの仲間がいるのだ。去年の春、朝日岳を眺めたのと方向こそちかうが、いつもながら実に立派だ。しかし又こゝからは実に遠く見える。ふり返ると春霞の下に日本海がにぶく光っている。白鳥山の頂上は真丸の雪面で鳥の頭の様で印象的だ、白鳥山より犬ヶ岳への稜線は小さな上り下りが激しく、雪もくさっており、歩きずらい事、消耗する事、甚だしい。特に千二百九米峰より下りが急である。そこから約二百米の登りで小ピークに出る。白鳥山と犬ヶ岳の約三分の二の地点である。（我々はこれに P2/3 と名けたのだが）こゝにテントを張る。

三月十九日　快晴　出発（5･50）－犬ヶ岳（9･00～9･30）－黒岩山手前へ

こゝまではまったくワツパのみであったが、犬ケ岳への登りは、雪の下が岩であるので、アイゼンワツパで登る。今にもずり落ちそうな雪の傾斜を木をつかみながら上へ上へと犬ヶ岳の登り、これは今思い出しても「しんどかつた」事しか思い出せない。犬ヶ岳からの眺めは実に陰けんだ。黒岩平犬ヶ岳から一本の帯、いや帯ならまだしもヂクザクにまかった一本の線となってつながつている。白鳥山と反対に犬ヶ岳頂上は狭く、ザックを降すのも気をくばらねばならない。一瞬「パサ」と言う音がして何かゞ落ちて行った。記録係の大川がくれた記録ノートがみるみる見えなくなって行った。大きな雪庇が信州側に出ている。北又からの吹き上げがさぞ強いのだろう。犬ヶ岳からの狭く細い稜線は一寸気味悪い。今までの記録ではこのあたりは、ブッシュでいやな所の様に書いてあったが、今年は例年になく厚雪だった為か、うまいぐあいに雪庇が出てゝその上を恐る恐る通る事が出来た。黒岩平のあたりにテントを張る。その頃から北又の吹き上げははげしくなり、ブロックを作る。二千米との上と下、かくも風あたりかちがうのかとおどろく。ヘルマンブールの八千米の上と下、それと同じ事なのかな。僕の山日記に犬ヶ岳を「こましゃくれた子供」と書いている。まさしく犬ヶ岳周辺はそんな感じのする山だ。

三月二十日　快晴　黒岩平テント（am6･00）－黒岩山（am11･10）－長栂山雪洞（pm2･15）

実に美しいながめだ。朝日岳が雄然としてすばらしい。午前中は暑さと、しまりの悪い雪になやまされながら高度をかせぐ、黒岩山を過ぎて、すこしの所で涼しい風が吹き、雪質もかたくなる。長栂山手前で、真新しいトレースを見つけ、どこのパーティだろう。ひょっとしたら偵察隊位のトレースか、などと話し合う。実の所、まさかサポート隊がすでに僕らを待っているとは思わなかった。長栂山と朝日のコルへ下りかける頃ラストの横尾が後の方を向いて呼んでいる。遠くに真黒い顔をして真白い歯を出して牧野の笑顔が見える。まだ数日しか過たないのになつかしい。でもそれにしてもサポート隊は実に良く頑張ってくれたのだ。信州側の雪の吹き通しの所へ立派な雪洞が堀ってあった。黒い顔をした、笠松 OB、豊坂が出て来た。変な出合い方だったが、僕らの合宿の問題点だった、サポート隊と縦走隊のデイトは無事終った。横尾の足が腹子か悪いので明日は停滞だ。サポート隊、縦走隊とも合宿前半の色々な話に花がさいて楽しい夜だつた。それにしても予想以上のサポート隊の活躍にはおどろき、又感謝した。高田もさぞつかれたゞろう。大川のひげはそろそろ変色しだしたゞろうなどといろいろ考えなかなか眠られなかった。だが仇宿はまゞまゞこれからだ。

三月二十一日　快晴　停滞

今日はのんびり公休日、ひねもすのたりのたりかな、まさしく春だ。

三月二十二日　快晴　長栂山雪洞（am6･00）－朝日岳－雪倉（am11･00）－三国境（pm4･10）－白馬岳テント（pm5･10）いよいよ後半の縦走だ。今まで一緒だった吉川、秋濃ともお別れだ。代って牧野、豊坂が加わるのだ。雪倉まで笠松 OB と吉川、秋濃にサポートをしてもらう。雪倉山頂でパッキングをしなをし、いよいよ 5 人で行かねばならないのだ。ヅシンと重いザックをかつぎ今さらながらうんざりする。丁度その時、サポート隊の高田始め全員で朝日へ来たのを、トランシーバーで連絡が取れた。こちらも次々代り、話した。殿下始め新人も元気そうだ。田村 OB はトランシーバーが始めてらしく、気まり悪るそうによそ行きの言葉でしゃべっている。山行きもモダン化されているのだ。鉢ケ岳とのコルの小屋で昼食、無風快晴の中を暑さにあえぎ登った。白馬の尨后の登りはまったく死にものぐるいで歩いた。後から来た北大山岳部の連中が腰にスキーをつけ、サブでおいこして行く。実にしんどい一日だった。

一二月二十三日　快晴　白馬岳テントへ（am7･00）－鑓ヶ岳（am10･00）－天狗小屋－天狗の頭雪洞

風も少し出て来てやはり高度を感じる。杓子沢上部で北大山岳部がスキーを楽しんでるのをうらめしそうに眺つゝ時々吹いて来る風に重い荷の為か千鳥足になる。昨日かせいだ為、又、不帰Ⅰ峯下のテント地があてにならない為、天狗の頭にドン、と言う前もっての約束があるので、今日は昼食もゆっくり天狗の小屋で食う。うまそうな物もなさそうだ、どこも不景気だ。タバコも切れて来た。小屋で「しけもく」拾い。雪洞を天狗の頭の南西面に堀るが雪は少なく、堀り過ぎると地面に出くわす。テントか有るのでテントを張れば良いのだが、早く着いたし、雪洞の方が撤収が簡単なのと風が吹いても僕らのテントよりあてになりそうだからだ。変な雲も出だしている。良い間持った晴天もぼつぼつ終りだ。

三月二十四日　地吹雪　停滞

三月二十五日　地吹雪　夕刻より少し明るくなる。停滞

帰りしな猪股氏宅で新聞で読んだのだかなんと日光で 70m 位の強風だったとか。何と僕らの貧弱な雪洞は風で入口がけずられ朝起きた時は入口近くに寝てた僕と豊坂のシュラフの上に雪が積っていた。一日中雪洞拡張工事で忙がしかった。スコップが折れ、ピッケルとコツフェルでの工事は広島弁で言うなら実に「ヤネコイ」事だった。

三月二十六日　快晴　天狗の頭（am6･30）－Ⅰ峰とⅡ峯のコル（am9･00～am10･10）Ⅱ峯北峯（pm0 時）－唐松－大黒岳手前のコル（pm4･30）実の所、この日の行動は問題があった。前もっての約束では、天狗の頭より一日偵察の日を考えていた。出発前に家田 OB に相談した時も合宿前に不帰Ⅱ峯は一度見ておき、それから合宿に入ってはと言う意見を出され、考えたが、メンバーと時間とが不足し実現されなかった。この様な事情の許に偵察もなく、一日で通過するのは問題だが、我々は雪洞に今までの余りの食料全部をおき、Ⅱ峯が困難な様なら又天狗の頭の雪洞に帰りじっくり出なおす事を決め、出発した。昨日までの悪天はどこへやら、遠く剱岳、薬師岳いや北アの全山がみえる。

不帰Ⅰ峯までは別に大した事もなくⅠ、Ⅱ峯のコルにつく。こゝは信大始め数パーティでごったがえしていた。信州側の夏道とほとんど同じあたりに上手にトレースがつけてある。こゝでほとんどⅡ峯は登攀可能な事がわかったので、資料を調べてる時よく出て来た、関学ルートを横尾と僕で見に行った。十一月偵察の時良くわからなかった二本の目印である松の木も雪からによきり山ているのですぐわかる。しかしそこまで行くトラバースもあまり歩き良くない。あんな急な斜面を 25Kg 以上もありそうなザックをかついで歩くなんて考えたって、うんざりする。やはり関学ルートにサブ

位なら雪の条件だけあやまらねば（僕等の通過したすぐ後日表層雪崩が起きてたそうだ）大じようぶだか、しかし又信州側も鶏卵状に雪が木の上にのっている。僕らは他人のトレース通しに行ったのだから問題なかったが、始めにトレースをつけた人は大変だったゞろう。

我々はいつも心配していた不帰Ⅱ峯の北峯でゆっくり昼食を食った。登る途中で出合った人にタバコを六本もらい五人の内タバコをすう者三人で分けいかにも大切なものゝように味った。唐松までは夏道通しを難なく行った。唐松から大黒へは夏道も二つに分れてる所だが下の方は雪がべっとりつき上の方を僕らはルートとしで選んだ。雪と岩がミックスしてゝ、思いがけない悪場だった。幸運な事に今日は一日中無風ので助かったのだが、時々「風が吹けばいやだろうな」と思われる様な所もあった。

三月二十七日　快晴　風強し

テント地（am6･30）－五竜小屋－五竜岳（am8･15～8･25）－五竜小屋（am9･00）－神城スキー場（pm1･00）―南小谷沓掛猪股氏宅（pm5･00）

時々風に足をうばわれながら白岳へ。五竜小屋附近は多くの人でごったがえしていた。どいつもこいつもきたない顔したオツチエンばかり、メチ公には出合わない。五竜へ！僕ら合宿の最後の登りだ。時々風で足を止めながら頂上へ。八峰キレツトがみごとに切れている。記念写真を取り下山だ。山に行くのが楽しみでそれでいて下山の時の楽しさはその最高なのだ。山へは下りる為に登っているのか？と自問したくなる。遠見尾根に入ると風は全く感じない、暑さのみだ。時々ふり返り鹿島槍の北壁、五竜の東壁を見上げる。実に美しい。僕らの先輩がそこの美しさに引かれ足跡を残している。頭には下山の喜びと同時に次の山行の計画がねられる。10 時トランシーバーをいじっていると岡久の声が聞えた。全くかすかに。彼等も元気らしい。11 時にも一度連絡に成功、高田の元気そうな声、彼も僕らの無事喜んでくれ、以外に早いのとにおどろいてる様子だ。明日、猪股氏宅で落ち合う事にする。これでサポート隊とも連絡は取れた。あとは猪股氏宅へ神城から汽車で千国へ、千國から皆へとへとになって沓掛へ。飯がたらふく食える。なんと五人で二升の米をたいらげた。こたつに入り、知らぬまに寝てしまう。

サ　ポ　ー　ト

「栂池、蓮華温泉より朝日岳」

〔期間〕三月九日～二十八日

〔メンバー〕

三年　L　高田、大川、山本（先発）

二年　（前半）牧野、豊坂

　　（後半）吉川、秋濃

一年　原、畑中、大笹、中村、岡久

四年　浜田（先発）

OB　笠松、田井、玉井

〔行動概要〕

三月八日　先発の浜田、山本出発

三月九日　（曇）　先発の二名、阪大山の家に入る。

三月十日　（曇）　スキー

三月十一日　（曇）

三月十二日（晴後曇、大阪は雨）

先発隊は山の家より天狗原、弥兵衛沢を経由して蓮華温泉に向うも、下りすぎて乗鞍沢下部にてビバーク。

本隊の十名は夜大阪発。数日遅れて出発する縦走隊の見送りをうけ、例によってあわただしい出発。富山に帰る秋濃も同行。

三月十三日（高曇り夜半より冷込み）

大糸線千国駅下車、急いで荷物を下したところ、車中に忘れたらしく罐三コが行方不明。運よく森上行き列車だったので、すぐに電話で連絡し、列車が折り返してくる時に回収、事なきを得た。荷か多いため、一部（約 80Kg）を駅に残し、各自 40K をかついで沓掛へ。

正午すぎ笠松 OB 到着。

午後は、三名が千国崎に残した荷をとりに、残りの八名は御殿場小屋までデポに往復。

千国崎 10･25－沓掛、猪股宅 11･30

（大川以下三名）沓掛 13･50－千国崎 14･30～15･00－沓掛 17･00

（高田以下八名）沓掛 13･50－御殿場小屋 16･50～17･10－沓掛 18･45

三月十四日（快晴）全員で栂の木寮入り。全くの快晴で、早朝はまだよかったが、陽が昇るにつれて強くなる日ざしに、汗だくの行進であった。御殿場小屋より上部は、冬よりはるかに増した積雪のおかけで、すばらしい展望を十分に満喫した。

午後は三名を天狗原偵察に、残りは御殿場のデポを取りに行く。両パーティとも練習のためにスキーをつけてゆく。午後、豊坂が単身到着。ワンゲルの七名も加わって非常ににぎやかになった。今日の快晴でみんなの顔は早くも真黒になり、これからが思いやられる。

夜、装備係の牧野がテントの内張りを忘れてきた事に気付き、驚かされた。重大なミスであるが、今さら仕方なく、なしでもすませれる事にする。

沓掛 6･30－栂の木寮 11･10

（天狗原へ）川井、笠松、玉井

栂の木寮 13･10－天狗原 14･45－栂の木寮 16･00

（御殿場小屋へ）栂の木寮 13･20－御殿場小屋 13･50～14･20－栂の木寮 15･30

三月十五日（晴後曇り）

二隊に分け、一隊はまず天狗原に設営し、その後風吹尾根の偵察とデポ、残りは往復ボッカの後天狗原に入る。両隊そろって出発、雪はよくしまっており、スキーは使用せず。快調なペースではかどり祠の前から更に、風吹尾根に向って少し下り弥兵衛沢の源頭に設営。設営後、大川隊は栂の木寮に引き返し、高田隊は風吹高原まで往復し千国揚にヂポ、田井、玉井はさらに千国揚より弥兵術沢への下降ルートを偵察。

デポから帰ると、大川隊は早くも到着しており、先発の浜田、山本も蓮華温泉より帰ってきていた。先発の二人はやがて下山したが、連絡の悪かったためか、彼らは天狗原から直接弥兵衛沢に下るルートをとっており、今日の偵察からも、結果的にはこのルートのほうがよい事がわかった。そこで今後このルートを取る場合、千国揚のデポの回収が問題となった。

・偵察、デポ隊　高田、牧野、田井、玉井、栂の木寮 6･30－天狗原テント地 9･00～10･30－千国揚 11･40～12･00－風吹高原 13･00－天狗原 14･30

・往復ボッカ隊　大川以下八名

天狗原 10･30－栂の木寮 11･15～12･00－天狗原 14･15

三月十六日（雪後曇り）

朝から湿った雪が降り、風も強かったが、高度か低くなるので行動に差支えるほどではない。デポを回収するため。まず、千国揚、弥兵衛沢を経由して蓮華温泉に入るパーティを送り、続いて残りの五名は、先発ルートにより途中にデポをすべく出発。

千国揚より弥兵衛沢へは沢を使ったが、両岸の切り立った沢で側面からの雪崩も予想されたが無事通過。ルートが弥兵衛沢本流を離れる所に荷の一部をデポする。そして中の沢に入ったが、この沢もかなり両岸の傾斜が強くところどころ小さなデブリが出ていたので、休憩所を探すのに苦労した。

蓮華温泉到着後、四名はデポ地点にもどり。一部を回収する。

一方、先発ルートをとったパーティは前記のデポを発見し、同じく約 100K をデポして引き返す。弥兵衛沢は、地形が複雑であるがスキーツアー用の標識が無数にあり、大体迷う心配はないが、上部は標識間が長いのでガスが濃い時には慎重を要する。

デポを終えて引き返す頃には、全くの湿雪のため上衣はびしよぬれになり、帰りついたテントも内張りがないため、しきりに水がたれるというみじめさであつた。

・蓮華入りパーティ　大川、岡久、原、田井、玉井

出発 7･00－千国揚 7･50～8･20－デポ地 9･40～10･00－蓮華温泉 11･30

・デポ隊　高田、牧野、豊坂、畑中、笠松

出発 7･40－デポ地 10･15～50－テント 13･30

三月十七日　（雪後晴）

蓮華温泉先着のメンバーの内、玉井、田井は前方の偵察に行くが、ガスで視界が利かず、瀬戸川までで引き返す。

大川、原、岡久は昨日のデポ地を往復して、残りの荷を回収。天狗原に残った七名は、悪天なるもテントを撤収。新雪が相当つもっているので。弥兵術沢へ直降するのを避け、風吹尾根をまくようにして降り、傾斜の落ちた所で沢身に入る。沢の上部では正面から吹きつける強風に悩まされたが、下るにつれて風も弱まり、デポ地点に着く頃より晴れ闇も見えてきた。

デポ地点に荷が残っていないのを見てホッと安心し、大川達の健闘に感謝しながらトレースを辿り、やがて蓮華温泉に着く。

温泉の建物はすっぽりと雪をかぶり、赤いトンガリ帽子の屋根がのぞいているだけ、そして、中で火を炊くとけむい事おびただしい。しかし。昨日の水のたれるテントの事を思うと、はるかにましである。

出発 7･10－デポ地 9･15～45－蓮華温泉 11･40

三月十八日　（快晴）

いよいよＣＩ建設に向かう。依然としてボッカ量は多く平均 25K、ワッパをつけて出発。

昨日の偵察のトレースをたどった為、ラッセルもなく、二ピッチで瀬戸川降り口に達する。ここで玉井、田井は引き返し下山する。

眼下の流れまでは、高度差約 200m、20～30 度の急斜面で、なるべくまっすぐに慎重に下る。流れはうまっていないが、スノーブリッヂが所々にかかっていて簡単に渡る。瀬戸川を越してからは、先発隊の標識もないが、格別複雑な地形でもないので、適当にルートを選びながら行く。まず 1/5 万図に池の記号の二つある所を通って白高地沢へ。これは流れも完全に雪に埋もれており問題なく通過。白高地沢をすぎると五輪尾根までは大した高度差でもなく、尾根にとび出る手前の斜面を除いては概してゆるやかな登り。尾根に出て一ピッチ半で具合のよい台地がみつかったので、ここをＣＩとし、さっそく設営。

大川、原、笠松を残し、六名は蓮華温泉にもどる。

田井、玉井は夜、沓掛に到着。

蓮華♨6･40－瀬戸川降り口 8･00－昼食（白高地沢）9･15～45－五輪尾根末端テント地 11･45～12･30－蓮華♨14･50

三月十九日　（快晴）

ＣＩの大川、笠松は偵察のために朝日に向う。強風に悩まされながら五輪尾根を登りつめ、夏道はブツシユが隠れていないので朝日へのトラバースルートはあきらめて、五輪山経由で国境稜線に出る。そして長栂山の山腹に雪洞には丁度よい地形を発見し、引き返す。

蓮華♨に残った七名は、温泉をあとにＣＩに向かう。

うまい具合に昨日のトレースが固く凍りついて、30K を超える荷だが快調なペースではかどり、三時間半でＣＩに着く。これで。全員がＣＩに集結したわけだ。午後になると、高度が低いため、テントの中にはとてもおれないくらい暑くなる。

・ＣＩ 5･00－五輪山 9･30－長栂山一帯 10･30～13･00－ＣＩ 16･00

・蓮華♨7･35－ＣＩ 11･00

三月二十日　（快晴）

CⅡに入る牧野、豊坂、笠松を六名でサポートする。背中を痛めた畑中はテントキーバー。雪はよくしまっているので今日もワツパ、スキーなどはつけず、所々くるぶし

までもぐるが大した事はない。好天ではあるが、尾根筋にでると風は相当強く冷たい。ＣＩとのトランシーバーの交信は一回目が成功しただけであとは不成功。

五輪山頂上でアイゼンをつける。この頂上からは犬ケ岳か正面に望まれ、黒岩平には、はっきりとトレースとわかるものが見えた。縦走隊がもうやってきたのに違いないと再会の期待に胸をおどらせる。

五輪山より約 30 分、稜線直下の長栂山の山腹の凹み－昨日の偵察で発見したもの－を雪洞地点とした。さっそく雪洞堀りにかかるとともに、大川、笠松は縦走隊が雪洞をすぐに発見できるように長栂山から明日とのコルにかけて赤旗を立てめぐらす。

サポートの六名は朝日往復を考えていたが、時間的に無理なので今日はあきらめて引き返す。ところが、それからしばらくして縦走隊の五名が到着。ＣＩに引き返した六名がくさった習に足をとられながら、ブツブツと言っていた頃であった。

ＣＩ5･40－ＣⅡ9･50～13･15－ＣＩ15･30

14･00 ごろ縦走隊ＣⅡに到着

三月二十一日　（快晴なるも停滞）

好天だが風が強いのと、入山以来の連日のボッカで全員が相当疲れている為、ＣⅡからの撤収待ちとする。午後になって風は弱まったが ＣⅡから降りてくる気配はなく、結局、停滞となった。縦走隊は昨日 ＣⅡに到着しているはずだから今日はどうしたのだろつかと少し不安にもなったか、計画が順調に進んでいるので今日は休養にしたのだろうと推測した。

三月二十二日　（晴）

ＣＩの六名は連絡の為にＣⅡへ。風は相変らず強いが南よりの風のためか、さして冷たくはない。ＣⅡに着くと雪洞はカラで、縦走隊は本日出発、三名は雪倉までサポートとの連絡が残っていた。雪洞が倍に広げられており、縦走隊も雪洞に泊ったらしい。

小憩の後、朝日に向かう。朔日の登りはアイゼンが快遡にきき、途中、10 羽ほどの雷鳥の群が目を楽しませてくれた。

頂上でゆっくりと震望を楽しみながら食事をとり、11･00 縦走隊とトランシーパーで交信する。出発以来初めて聞く縦走隊のメンバーの声がなつかしく、30 分近く交信する。

雷洞に帰り全員サブザックに入るだけ食料、装備をつめて帰る。雪倉までサポートした笠松、吉川、秋濃は、夕刻 ＣＩ帰着。夜は北半の縦走を終えた二人を迎えて、にぎやかに話がはずんだ。

ＣⅠ6･15－ＣⅡ8･50～9･30－朝日岳頂上 10･15～11･20－ＣⅡ11･50～12･15－ＣⅠ14･00

三月二十三日　（晴）

ＣⅠを撤収。相も変らず快晴とあって気持のよい撤収だ。落ちてはいまいかと心配された瀬戸川のスノーブリツヂも、どうやらまだ無事であっだので一安心。蓮華温泉までとあってのんびりと雪景色を楽しみなから行ったが、眠くなるようなけだるさに襲われて困った。温泉に着くと、すでに小屋主も入っておられ丁度、除雪作業の真最中であった。

午後は待望の野天風呂に入って、最高の気分に浸りながら汗を流す。

ＣⅠ7･30 - 蓮華温泉 10･45

三月二十四日　（雪後強風雪）

天狗原へ向うべく、往路と同じく弥兵衛沢経由として、まだ暗い内にランプをつけて出発。ライトの灯りの中に雪がちらちらと舞っている。笠松 OB は今日中に下山すべく単身先行する。中の沢に入る頃より夜が明けはじめる。依然として降りやまない雪に全身まっ白にして、あきあきとする長い登りを黙々とたどる。最後の急斜面を登り切ると風の強い稜線に出、往路とはちがって祠の前の冬と同じ場所をならして設営する。

さあテントに入らんとしている峙に、急に風が強くなり、以後、間断なくテントをゆさぶる風との斗いがはじまった。

蓮華♨5･00－天狗原 11･45

三月二十五日　（地吹雪、停滞）

月をさますと寝袋の上に雪がうすくっもっており、寒々とした感じをそそる。風は依然勢力を弱めず吹き荒れているが、雪は降り止んだようでテントに当り音をたてるのは地吹雪のせいらしい。ラジオでこの強風の被害を聞き、日光で最大風速 75m というのには、全く驚き。

それほどでもないにしても、よくこのテントが大丈夫であったと感心する.

終日釘付けになったが、夕刻より風も弱まってきて、夜には星空が見られた。

三月二十六日　（快晴）

風はまだ少し強かっだが、絶好の晴天。そろそろ食料も底をついてきたので、4 名は栂の木寮へ食料をとりに、4 名は偵察をかねて小蓮華へ。小蓮華に向った 4 名は、乗鞍の斜面もアイゼンが快調に利いて、寒風に頬を硬ばらせながらも小蓮華頂上に達

する。帰途、乗鞍にかかる頃より風もなく暖たかい陽気となった。一年生は、今回の合宿で初めてアイゼンを着けたので、無理して白馬までは行かせなかった。

食料荷上げの 4 名は、スキー部か入っているはずだが、もし寮が閉っている場合には沓掛まで鍵を取りに行かねばならない事を考えて 2 名がスキーをもってゆく。ところが案の定寮には誰も居らず、2 名は沓掛へ、2 名は連絡の為、天狗原にもどる。午後、再び寮に下った 2 名は、下からもどってきた 2 名に出会い、3 名で天狗原に食料を持って帰る。1 名は、明日入山するものがあるというので寮にとどまる。

〇小蓮華往復　高田、大川、畑中、岡久

天狗原 7･00－昼食 9･10～40－小蓮華 9･50～10･15－天狗原 12･00

〇荷上げ　吉川、秋濃、中村、原

天狗原 7･00－栂の木寮 7･50

（秋濃、中村）寮 8･20－沓掛 9･50～10･50－寮 13･30～14･30 原、合流－天狗原 16･00

（吉川、原）寮 10･45－天狗原 11･30～12･10－寮 12･35 吉川、残る。

〇テントキーパー　大笹

三月二十七日　（晴）

昨日に続いて小蓮華を往復、風は強いが南よりの風のせいか、さして冷たくはないのだが、時折おそってくる強い突風には悩まされた。テントに帰ってみると、縦走隊とのトランシーバー連絡がついたとの事で、早くも遠見尾根を下山中とか。丁度交信時間になったので、打合わせの結果、こちらもすぐに撤収する事にした。午後になって風も止み、春の陽光が降り注ぐ絶好の撤収日和になったが、雪がくさって時にはももまでもぐるのには閉口した。成城とヒュッテの下で、丁度登ってきた米沢、金子両 OB と吉川に出会う。

帰りついた栂の木寮は、いっもながらの快適な気分で迎えてくれ、もう半ば下界に降りたような感じがする。

さっそく、屋根や小屋の周囲の雪かきにはげむ。

天狗原 6･20－小蓮華 8･45～9･05－天狗原 10･50～13･00－栂の木寮 14･00

三月二十八日　（晴）

合宿の最後の日も晴天で明けた。朝の光に輝やく白馬三山の麗姿は、しばしの別れの今朝ことさら美しく感じられる。

荷が多いのでスキーはかえって面倒とばかり終始つけない事にした。御殿場小屋、赤ヌケとすぎ、清水沢までくると、もう春の気配で、雪の中に音をたてて流れる清水

にのどをうるおす。もうひと気のなくなったスキー場をぬけたところで、迎えに来てくれた縦走隊のメンバーと出会い、出発以来の再会と計画の成功を喜び合う。話しながら道を行くと沓掛はすぐであった。振り返ると白馬三山が午後の陽光に遠くかすんでいた’

昼食には、白い御飯をたらふく食べ、全員で成功を祝い合った後、現地解散とした。

（高田　記）

装　備　報　告

この合宿の性格上、軽量化ということか第一に考えられねばならなかった。しかし、長い縦走であるから、ある程度快適な生活を営むことか必要な点、及び経済的な面から、軽量化は二、三についてできたのみであった。

以下名品目について説明を加えることにする。

テント－縦走附にはテトロンテントを使用した。冬の経験から、他のテントの綿の内張りを流用する積りだったが Size が合わず、結局縦来のものを使用せざるを得なかった。が幸い天気が良かったのと、悪天候の時にはタイミングよく雪洞を堀ったこと等から、大して影響はなかった。Support 用にビニロンテントを二張り携行したが、内張りを忘れた為、甚だ居住性の悪いものになり、それ以後に危惧を抱かせたが、好天に恵まれたことと、部員諸君の協力で格別の事態にも至らなかった。大いに反省を要することである。ビニロンテントの老朽化は可成り激しく。新しいテントの製造が望まれる。

ペグ－縦走用に長さ 45cm、幅 3cm のものをつくり軽量化を図ったが、従来のものより 40g 位軽くなっただけで、成功とはいえなかった。幅の 3cm はこれが限度であり、（今度の合宿でも二、三本張線をかける凹みか折れた。）長さも一尺以上なければならないと思う。従ってこれ以上の軽量化は、軽合金に頼る以外ないのではなかろうか、

スコップ－シャフト、特にそのつけ根が弱く、縦走用の小型のスコップも、雪洞を堀っている最中に折れてしまった。何らかの補強策を考えねばならない。

fix ザイル－10mm の麻 70m を使用した。しごきか足らず操作が困難であった。特にこのような長いザイルは十分にしごいておく必要がある。fix ザイルをもっと有効に使う手段、例えばゼルプストを使うとか、を考える必要がある。

雪洞－地形の選定、ブロックの積み方等充分に考慮してから、ことを行うべきである。長栂山の雪洞は非常に大きな船クボ地形を利用したものであったが、風向きが変

われば、簡単に埋没してしまう危険性があった。入口布も、更に改良を加えねばならない。　（牧野　記）

装　備　表

品　　名	縦走前半		縦走後半		サポート	
テント（含ポール内張）	T1	8.0kg		kg	ⅤⅠ,ⅤⅡ,ⅤⅢ	33kg
ペグ	25	2.0			70	6.5
雪洞用ペグ					8	0.8
グランドシート					2	2.0
鋸	1（大）	0.5			1（大）	0.5
スコツプ	1（小）	1.2			4(大 2,小 2)	5.5
張線予備	12m	0.6			18m	1.0
タワシ	2	0.1			7	0.4
ツエルト	1	1.2			2	2.4
ザイル	1（白）	2.5			2（赤、白）	4.5
FIX ザイル			100m	5.0	50m	2.5
カラビナ	5				4	0.4
ハーケン			10	0.2		
ハンマー			1	0.4		
竹ザオ（付赤旗）					100	11.0
赤布					50	
ラジウス	1	1.2			4	4.8
コツフエル	1	0.8			4	3.2
オ玉	1				4	
テルモス	2	1.5			4	2.8
ケロシン	7	7.0	9.5ℓ	9.5ℓ	58ℓ	58
けい燃	4	0.5	5	0.6	24	3.0
ローソク	10	0.6	13	0.8	60	3.6
ポリタンク	4		(4)		8	
ラジオ(各々予備電池 1set)	1	1.0			2	2.0
トランシーバー（〃）	1	1.0			2	2.0
エヤマツト修理具	1				4	
ブラックテープ	1				4	
工具類					1set	0.7
合　　計		30.2kg		16.5kg		153.6kg

食　料　報　告

春山合宿は縦走形式であるため。軽量化と体積を小さくすることに留意した。また、合宿費も少く、物価も値上りしているので、今までより相当質素な献立にせざるを得なかった。また行動食、停滞食の区別も全くしなかった。縦走隊は半ばアタック隊のようなものであるとの考えから、サポート隊の献立より少しよいものを用いた。

次に今回の食料の個々の点について記す。

一、梱包

サポート隊の梱包はいっもの通り一斗罐を用いた。

縦走隊は軽量化のために段ポールの箱にビニール塗料を塗ったものを用いた。そして一つの箱に五人二日分の食料を入れ、約 8kg とした。このような箱は、防水性はほとんど完全であるが、つぶれやすいのが欠点である。サポート隊のボッカした 7 ケの内、長栂山の雪洞に到着したときは 3 ケしか原形を保っていなかった。しかし取扱いを注意すれば、もう少し長持ちすると思う。小人数の山行にはもっと使われてもよい。天満で箱をもらってくれば三〇円くらいで作れる。

サポート隊の食料の軽量化には余り留意しなかったのは失敗であった。しかし冬山よりは軽くなっているはずであるが、山行形式が異つているために重く感ずるのではないかと思う。縦走隊は梱包を入れて一人一日 0.8kg とした。段ボールの箱を用いたことが相当軽量化に役立った。

二、主食について

カンパン、クラッカーの類にどうも満足すべき市販品がない。山岳部特別誂えのビスケットを作る必要がある。

三、スープ袋について

今までのスープ袋は重いので（一袋四人分が約四百～五百 g）鯨肉を油炒めしたものと切干を用いた。生野菜は全く持っていかなかった。その代りニンニクをやや多く用いた。

四、献立について

大体今まで通りの形式を踏襲することになってしまった。

いつの間にか献立についての一定の形式が出来上ってしまって、無条件にそれを採用していることか割合に多い。しかし合宿のように、長期間で多人数の山行の計画ではどうしても事無かれ主義的に今まで通りの形式をとることになる。我々の献立の形式についてもこのような点で再検討の必要があると今度の合宿を終つて私は感じた。

特に朝食と昼食についての検討が必要であろう。蛋白質は全部夕食に取ることにし、朝、昼、は炭水化物を主としたカロリーの高くて食べやすいものばかりにすることも考えられる。

五、費用について

二十六日間の合宿賃が四千円であり、そこから装備の費用を除くと食料費はますます少くなり、財政は相当苦しかった。

＝春山＝

食　料　総　表（サポート隊）

	神の田圃	蓮華温泉	C1	長栂山
クラッカー	20	60	54	12
カンパン	178	100	50	
ビスケット	24	145	40	12
バタークラッカー			21	
玉蘭ソバ	46	38	9	2
ビーフン	20	42	15	
モチ		8.1 kg	6.4 kg	2.4 kg
コンソメ	60 食分	100 食分	30 食分	8 食分
チャーハンの素	60 食分	100 食分	30 食分	8 食分
ミソ	4 袋	2 袋	1 袋	8 袋
カレー	38 食分	60 食分	32 食分	16 食分
ハム	14	19	7	4
ソーセージ	20	23	9	
カンヅメ	62	38	9	
鯨肉		22 袋	13 袋	7 袋
ラード	5 kg	6 kg	2.1 kg	4.6 kg
ジャム	28	33	14	3
紅茶	1	2	1	1
緑茶	1	2	1	1
ミルク	4	6	3	1
砂糖	3 kg	5 kg	2 kg	0.5 kg
メリケン粉	8	8	3	1
塩	1 袋	1 袋	適量	適量
コショウ	1	1	適量	適量
キリボシ	600 g	3.2 kg	1.3 kg	300 g
ニンニク	適量	適量	適量	適量
計	111 日	149 日	54 日	12 日

食　料　総　表（縦走隊）

クラッカー	35 本	即席カレー	5 ケ
ビスケット	155 本	ハム	10 本
カンパン	35 袋	ウインナソーセージ	70 本
玉ラン	42 袋	鯨肉	46 袋
ビーフン	30	ジャム	23 ケ
マギースープ	98 個	紅茶	3
チャーハンの素	28 ケ	緑茶	2
ミソ	11 袋	ミルク	4
（1 袋 150g）		メリケン粉	6
塩	2 袋	ニンニク	適量
コショウ	1 ビン	サトウ	5kg
キリボシ	23 袋	計	115 日分

〔注〕鯨肉はラードで炒めて 5 食分 100g を一袋とした。

献　立　表（1 人 1 日分）

	サポート		縦走	
朝食	クラッカー	1 本	クラッカー	1 本
	カンパン	1 袋	ビスケット	1 本
	ビスケット	1 本	カンパン	1 袋
	バタークラッカー	1 袋（一部）		
	コンソメ	1/15	マギースープ	7/5
	チャーハンの素	1/4	チャーハンの素	1/4
	ミソ	30g	ミソ	30g
	カンヅメ	1/5	鯨肉	1/5 袋
	ラード	20g	キリボシ	1/10 袋
	鯨肉	1/5 袋		
	キリボシ	適量		
昼食	クラッカー	1 本	クラッカー	1 本
	カンパン	1 袋	カンパン	1 袋
	ビスケット	1 本	ビスケット	1 本
	ハム	1/4	ハム	1/4

	ソーセージ	1/3	ウインナーソーセージ	1
	ジャム	1/4	ジャム	1/5
夕食	玉蘭ソバ	1/2 袋	玉蘭ソバ	1/2
	ビーフン	1 袋	ビーフン	1
	モチ	6 枚		
	コンソメ	1/15	マギースープ	7/5 ケ
	即席カレー	1/4	チャーハンの素	1/4 袋
	チャーハンの素	1/4	ミソ	1/5 袋
	ミソ	30g	即席カレー	1/4 箱
	カンヅメ	1/5	鯨肉	1/5 袋
	ラード	20g	キリボシ	1/10 袋
	鯨肉	1/5 袋		
	キリボシ	適量		

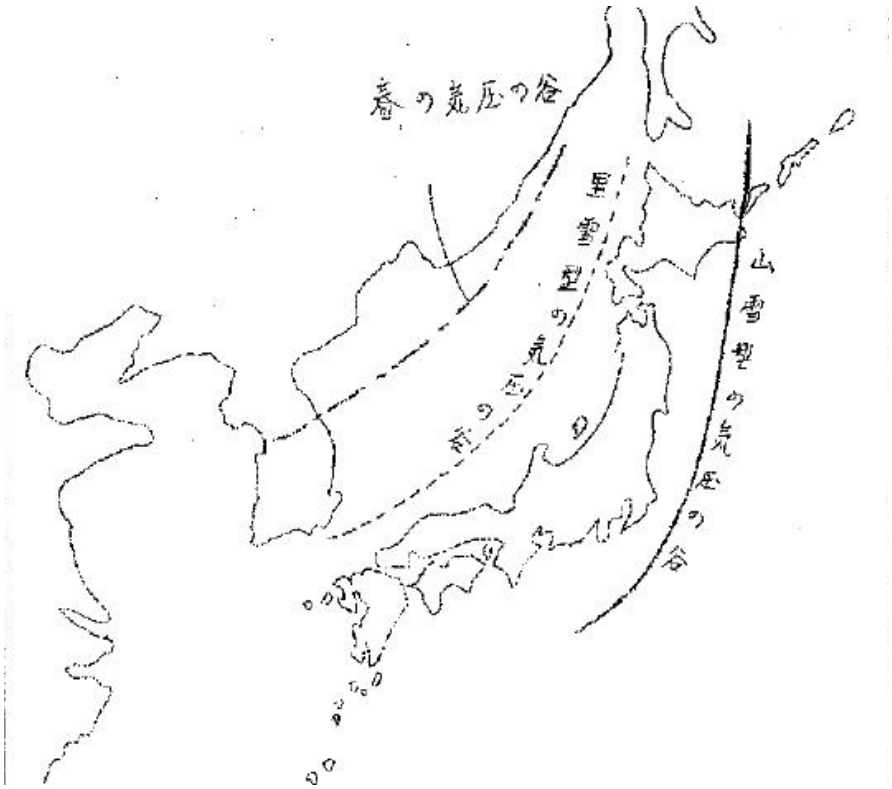
以上の他に、紅茶、緑茶、ミルク、メリケン粉、砂糖 1 日 30g、塩、コショウ、ニンニクを用いた。｛ 印はその中の一つを、〔 〕印はその中のものを同時に使うことを示す。

（吉川　記）

気　象　雑　筆

合宿を進める場合、好天に恵まれゝば予想外にスムースに計面を運び終えることが度々ある。今年度の春山行動としての大きな特徴は、従来、行動日は三日に一一日と組んだのに対し、二日に一日としたことにある。私共としては、始めての企てだけに、統計的にかなり調べて予定したわけである（梶本前リーダーの助言が大きい）。

春山の気象といっても、三月中旬から下旬の四月へかけての気象はかなり異なってくるものと思わねばならぬ。こういった一般的なこととは別に今年の春山は気象的に恵まれた。今年の冬、春の気象の判断についてはあまり軽々しいことも述べられないが、次の様な説明* がある。この冬の北陸の豪雪については上層の



気圧の谷の配置に例年に比べて図のような相違があること。又この気圧の谷は春には日本海の北方に逃げた為、太平洋側の高気圧が全般に優勢だったこと。

＊「科学朝日」一九六三年六月号九一頁～一〇二頁、「今年の気象は異常だろうか」荒川俊英及び四月上旬におけるテレビジョンでの気象解説

私達の気をつけていたことに降雨がある。サポートは蓮華温泉を中心として高度一五〇〇米前後で活曜すること、縦走隊は海抜〇米より出発することであるから雨具にはかなり注意した。幸い雨には合わなかったが二〇〇〇米以下では雪に対しても雨具が有利な場合が多々ある。この様な雪の積雪は当然歩行にも影響を及ぼす。瀬戸川のスノーブリッヂも、一雨後には危険な状態に陥ったことだろう。

高度の影響と地理的影響とのミックスによる気象変化（雪質、雷庇等も考慮した意味での変化）は当然予測されるものだが、経験してみると味わうべきものがある。

トランシーバーの信用については多々問題があるが、この合宿では大きな威力を発揮したことをつけ加えて、宮本 OB 及び早川電機に御礼申します。（大川記）

一般山行報告

南アルプス

期　　間　4 月 28 日～5 月 3 日

メンバー　三沢（L)、桑原、大川、秋濃、木原

行　　動　4 月 29 日（晴）転付峠－二軒小屋

4 月 30 日（晴）　二軒小屋 - 千枚嶽

5 月 1 日（曇雲）－東嶽－魚無沢－小西俣出合－中俣出合

5 月 2 日（曇後晴）－三伏沢－三伏小屋－烏帽子往復

5 月 3 日（曇）塩見岳往復－塩湯

毛 勝 三 山

期　　間　4 月 28 日～5 月 2 日

メンバー　梶本（L)、横尾．山本、高田、豊坂

行　　動　4 月 29 日（曇）宇奈月－僧ヶ岳

4 月 30 日（快晴）僧ヶ岳－駒ヶ岳－サンナビキ山

5 月 1 日（薄曇）－ウドの頭直下－東又谷－稜線－毛勝山

5 月 2 日（快晴）－猫又山－ブナクラ谷－馬場島

栂池－白馬岳

期　　間　4 月 30 日～5 月 6 日

メンバー　辻、米沢 OB

5 月 1 日（曇後雨）猪股氏宅－赤ヌケ

5 月 2 日（晴）赤ヌケ－神ノ田圃、乗鞍岳往復。

5 月 3 日（ガス）停滞

5 月 4 日（雨）停滞

5 月 5 日（雨後晴）乗鞍岳往復

5 月 6 日（快晴）白馬岳往復。下山。

遠見尾根より鹿島槍ヶ岳

期　　間　5 月 2 日～5 月 6 日

メンバー　三田、保母

行動概要　5 月 2 日　大阪発

5 月 3 日（快晴）神城－遠見小屋

5 月 4 日（雨）－大遠見－五竜小屋

5 月 5 日（雨後雪）五竜岳往復

5 月 6 日（晴）小屋－唐松岳－八方尾根

赤牛岳より黒部川へ　　後述

新人山行　　大峯山

期　　間　5 月 3 日～5 月 6 日

メンバー　L 浜田、吉川、播本以下新人 6 名及び広瀬 OB

行動概要　5 月 3 日　下市－坪ノ内―狼平。

5 月 4 日　雙門の滝往復

5 月 5 日（雨）弥山－山上ヶ岳－行者還

5 月 6 日　－洞川－下市。

穂　高

期　　間　6 月 8 日～6 月 12 日

メンバー　高田（L）　吉川、秋濃

行動概要　6 月 8 日（曇後晴）横尾にテント

6 月 9 日（雨一時曇）涸沢小屋往復

6 月 10 日（雨）停滞

6 月 11 日（雨後曇）停滞後散歩

6 月 12 日（曇後雨）北穂往復－上高地

～夏山縦走～

穂高岳－雲平－太郎山

期　　間　8 月 10 日～8 月 14 日

メンバー　高田（L）　播本、秋濃、原、大笹

行　　動　8 月 10 日（晴）　涸沢テント－キレット－中岳水場

8 月 11 日（快晴）中岳―槍ヶ岳－三俣蓮華岳－雲ノ平

8 月 12 日（晴）水晶岳往復

8 月 13 日（晴）薬師沢－中俣

8 月 14 日（晴）中俣－太郎小屋－折立－富山

涸沢－烏帽子嶽縦走

期　　間　8 月 10 日～8 月 14 日

メンバー　山本（L）、吉川、牧野、中村、栗原

行　　動　8 月 10 日　涸沢－横尾－槍ヶ岳－双六池

8 月 11 日（快晴）双六池－黒部乗越－五郎沢－祖父沢出合

8 月 12 日（晴）祖父沢－赤木沢－薬師沢－雲平－祖母沢－祖父沢

8 月 13 日（晴）水晶岳往復

8 月 14 日（晴）テント地－烏帽子小屋－葛温泉

涸沢－薬師

期　　間　8 月 10 日～8 月 13 日

メンバー　横尾（L）、大川、豊坂、石浜、畑中

行　　動　8 月 10 日（晴）涸沢－横尾－槍沢－槍の肩

8 月 11 日（快晴）槍の肩－三俣蓮華－黒部乗越

8 月 12 日（晴後曇）黒部乗越－黒部五郎－太郎山

8 月 13 日（呻）－薬師岳－スゴ小屋ボッカルート－常願寺川－富山

上ノ廊下　（後述）

期　　間　8 月 21 日～26 日

メンバー　L 保母、高田、横尾

～秋山～

南アルプス　赤石岳－光岳

期　　間　10 月 7 日～10 月 14 日

メンバー　L 豊坂、岡久、播本、石浜、畑中

記　　録

10 月 7 日　18･20 大阪発

10 月 8 日（晴）7･45 伊那大島－10･30 大河原－13･35 小渉湯－11･55 広河原小屋

10 月 9 日（晴曇）6･00 出発－10･20 大聖寺平－13･00 赤石岳－14･30 百間平－15･40 百間洞山の家

10 月 10 日（快晴）5･25 出発－10･20 前聖岳－13･20 聖平小屋

10 月 11 日（雨）風雨強く停滞

10 月 12 日（雨後快晴）7･00 出発－10･40 仁田池小屋

10 月 13 日（快晴）4･30 出発－6･10 易老岳－光岳往復（7･50～10･50）－12･15 易老岳－14･45 仁田池小屋

10 月 14 日（雨）5･00 出発－7･00 畑薙山－8･30 沼平 8･50 バス停車場

大台ケ原東ノ川遡行

期　　間　10 月 10 日～10 月 14 日

メンバー　L 山本　牧野　吉川

記　　録

10 月 10 日　7･50 近鉄阿倍野発　13･05 河合　14･00 出発　15･30 ザンギリ峠　18･30 中商店

10 月 11 日（雨）ドン

10 月 12 日（晴）8･00 出発　9･15 出口橋－10･30 木組橋　13･15 白崩谷－17･10 中崩谷

10 月 13 日（晴）6･40 出発－7･30 地獄釜滝上－10･30 西ノ滝上－16･00 東ノ滝上－16･10 シオカラ谷吊橋－17･00 大台教会

10 月 14 日（雨）バスに乗る

蓮華温泉　（春山荷上げ）

期　　間　11 月 1 日～6 日

メンバー　L 高田　吉川　畑中　石浜

行　　動　10 月 30 日（曇）大阪発

11 月 1 日（快晴→曇）平岩－11･30 ヒワ平 15・00－蓮華温泉

11 月 2 日（快晴）6･00 温泉－8･40 ヒワ平－16･15 蓮華温泉、ダブルボッカの繰り返し。

11 月 3 日（雨ッ）停滞

11 月 4 日（曇→雨）7･35 温泉出－8･50 瀬戸川－9･45 白高地沢→10･30 カモシカ平手前－13･40 温泉

11 月 5 日（雪）停滞

11 月 6 日（晴×雪）7･20 温泉出発－10･30 風吹高原－12･00～12･30 風吹大池－14･30 藤三郎－16･40 北小谷

栂池－乗鞍岳－蓮華温泉　（春山荷上げ）

期　　間　10 月 31 日～11 月 7 日

メンバー　L 三沢　横尾　大川　秋濃　播本　原　栗原　大笹

11 月 1 日（晴）9･30 千国崎－10･30 猪股氏宅 11･50 千国崎－12･50～13･45 猪股氏宅－18･15 早大小屋

11 月 2 日（晴）7･　早大小屋－猪股氏宅往復 15･20 早大小屋

11 月３日（ガス後雨）7･30 早大小屋－10･05 乗鞍岳－11･30 早大小屋。大川下山、三沢入山

11 月 4 日（雨）停滞

11 月 5 日（雪）6･55 出発－10･20 乗鞍岳－11･10～11･40）白馬大池　12･50 蓮華温泉横尾、原下山。

11 月 6 日（晴後ガス）7･10 出発－8･20 瀬戸川－10･30 カモシカ平－11･20 引返し地点－14･15 蓮華温泉

11 月 7 日（快晴）7･15 出発－9･10 ヒワ平－12･15 平岩

春山偵察山行

1 白鳥山

期　　間　10 月 1 日～6 日

メンバー　L 高田、桑原

行　　動　　10 月 1 日（曇）市振出－上路－楢谷

10 月 2 日（曇）終日木登りとブッシュ漕ぎ

10 月 3 日（曇）猪股氏宅―赤ヌケ

10 月 4 日（雨）早大ヒュッテ

10 月 5 日（雨）－赤ヌケ－落倉。

2 蓮華温泉

期　　間　10 月 14 日～10 月 17 日

メンバー　L 横尾、大川

行　　動　　10 月 14 日（曇後雨）千国崎－早大小屋

10 月 15 日（曇後吹雪）－大池－三国境

10 月 16 日（晴）－鉢ヶ岳最低鞍邸－蓮華温泉

10 月 17 日（曇）－平岩

3 白馬岳－不帰岳－唐松岳

期　　間　10 月 30 日～11 月 7 日

メンバー　　L

10 月 30 日（曇）9･40 千国崎－猪股氏宅－15･00 栂ノ木寮前

11 月 1 日（晴後ガス）6･00 出－13･30 小蓮華－14・00 三国境

11 月 2 日（快晴）6･00 三国境－13･00 天狗の頭

11 月 3 日～11 月 5 日（風雪）停滞

11 月 6 日（快晴）梶本、山本、桑原、三名不帰岳二峯偵察。

11 月 7 日（晴）6･00 出－10･00 不帰岳Ⅱ峰－唐松岳－八方尾根－与兵衛氏宅。

一九六二年・度

トレーニング記録

3/3（土）	場　　所	芦屋川－横池－奥池－鷲林寺－甲陽園
	メンバー	三沢叫（L）　横尾　山本　大川　桑原　牧野　豊坂　木原
3/6（火）	場　　所	宝塚－東六甲縦走路
	メンバー	梶本（L）　山本　高田　牧野　豊坂
4/15（日）	場　　所	八丁谷－六甲頂上－油フブレ谷
	メンバー	梶本　横尾　山本　大川　吉川　牧野　豊坂　秋濃　打出 OB
4/22（日）	1. 場　所	御影－地獄谷－六甲頂上－船坂谷－生瀬
	メンバー	高田（L）　三沢　横尾　笠原　高橋　秋濃　播本　木原　栗原　広瀬 OB　田井 OB

2.場　所　　御影－西山谷－六甲頂上－船坂谷－宝塚

メンバー　　山本（L）　梶本　桑原　牧野　豊坂　吉川　佐々木　田村　OB　笠松 OB

5/13（日）場　　所　　蓬莱峡

メンバー　　三沢（L）　浜田　山本　横尾　柴原　大川　牧野　吉川　秋濃　豊坂　石浜　原　栗原　中村　畑中　打出 OB　佐藤 OB　米沢 OB

5/20（日）場　　所　　芦屋ロックガーデン

メンバー　　梶本（L）　三沢　山本　横尾　高田　桑原　牧野　吉川　播本　秋濃　木原　豊坂　中村　栗原　石浜　原　畑中

5/26（土）5/27（日）　　新人歓迎キヤンプ

場　　所　　船坂谷　次の日－蓬莱峡－坐頭谷－逆瀬川

メンバー　　梶本　三沢　浜田　横尾　山本　桑原　大川　高田　豊坂　牧野　播本　吉川　秋濃　木原　栗原　原　畑中　石浜　広瀬 OB　広橋 OB　大源 OB　田井 OB　笠松 OB　田村 OB　保田 OB　米沢 OB　西垣 OB

6/17（日）場　　所　　百丈岩

メンバー　　山本（L）　高田　横尾　秋濃　牧野　吉川　播本　豊坂　原　佐々木　畑中　石浜　大笹　打出 OB　高橋 OB

6/23（土）場　　所　　惣河谷

メンバー　　梶本（L）　山本　高田　辻　吉川　播本　秋濃　石浜　原　佐々木　中村

6/24（日）ボッカ訓練

場　　所　　芦屋川－荒地山－一軒茶屋－東六甲－宝塚

メンバー　　梶本（L）　牧野　吉川　播本　秋濃　豊坂　木原　石浜　栗原　原　大笹　中村

7/8（日）場　　所　　不動岩

メンバー　　横尾（L）　秋濃　播本　中村　栗原　大笹　石浜　原　笠松 OB

10/21（日）場　　所　　芦屋ロックガーデン

メンバー　高田（L）　梶本　山木　横尾　岡久　牧野　吉川　播本　秋濃　栗原　石浜　原　大笹　畑中

10/28（日）場　所　堡塁

メンバー　山本（L）　梶木　三沢　桑原　秋濃

11/11（日）場　所　仁川

メンバー　横尾（L）　梶本　高田　桑原　播本　牧野　吉川　秋濃　中村　大笹

11/17（土）場　所　夫婦岩

メンバー　横尾（L）　大川　牧野　秋濃

11/18（日）場　所　蓬来峡

メンバー　梶本（L）　三沢　山本　高田　横尾　大川　岡久　牧野　吉川　秋漑　豊坂　栗原　石浜　原　大笹　畑中

11/24（土）11/25（日）

場　所　御所－山開－葛城－青崩－金剛

メンバー　高田（L）　吉川　秋濃　原　畑中　大笹

12/2（日）場　所　百丈岩

メンバー　梶本（L）　山本　横尾　桑原　吉川　石浜　畑中　原　中村

12/10（日）場　所　箕面－好見

メンバー　山本(L)　高田　牧野　秋濃　石浜　栗原

一部記録もれがあるかもしれませんが（特にOB）御了承下さい。

一九六二年度の部会に於ける研究発表

3/1	気象（春山）	桑原
	雪崩	横尾
3/8	医療	大川
	ポーラについて	辻
4/19	五月山行の気象と注意	三沢
4/26	六甲周辺の説明	播本
	上廊下周辺の説明	玉井
5/17	地図の見方について	高田
	岩登り技術	梶本
6/7	黒部周辺の記録	横尾　高田
6/14	気象　観天望気	大川
6/21	圏谷の形成について	牧野
6/28	夏山合宿、穂高の岩場について	梶本
6/30	気象研究会	大阪気象台より斉藤氏（大阪管区気象台）来講
7/5	岩場における怪我の処置	田村
	遭難が起った時の処置	三沢
夏山山小屋建設ボッカ中（7/11～7/31）		
	高山植物	吉川
	ヒマラヤ登山史	播本
10/25	十一月の気象	大川
	十一月山行の注意	梶本
11/15	冬山個人装備について	高田
	十一月山行中での天気図	桑原
11/22	白馬周辺の厳冬期の記録	横尾
	雪山露営	播本　牧野
11/29	雪崩と雪庇、雪崩と天気図	大川
	冬山での注意	梶木
12/13	冬山気象	秋濃　吉川
	医　療	豊坂

＝1962 年度＝ 決　算　報　告

自 1962.4.1～至 1963.3.31

Ⅰ 収入の部

前　期　繰　越	32,189
部費、入部費	35,300
体育会援助金	28,500
そ　の　他	4,645
計	100,634

Ⅱ 支出の部

装　備　備　品	47,960
事　務　用　品	10,696
通信、交通費	16,824
諸　会　費	4,000
雑　支　出	8,340
次　期　繰　越	12,814
計	100,634

責任者　　高　　田　　邦　　雄

一般山行記録

立石黒部上廊下

（一九六〇年夏山縦走）

佐　　藤　　茂

メンバー　　保母、酒井、西垣、黒木、金子、佐藤

期　　間　　七月二十九日－八月九日

七月二十九日　晴　千丈沢－大町

縦走用食糧が置いてあるので、保母を湯股に残し、他のパーティと共に酒井、西垣、金子、佐藤の四名で大町迄出る。大町で精進落を行ない、駅で一泊。

七月三十日　晴

大町－湯股

山の神の所で軌道が約五百米程不通になっており、剱のパーティと一緒に不通個所のボッカ。縦走とはいえ、人数と日数で相当な量、夕食は剱のパーティと一緒にやってもらう。実に有難い。明日からは自分達でと考えると少々億劫になる。

七月三十一日　晴

湯股－伊藤新道－三俣蓮華

六人分の荷物を五人（黒木とは三俣で落合う予定）で担ぐ。米二斗その他色々とやゝこしいものか多く、一人当り十二、三貫の荷になる。三俣に着いたのが四時過

ぎ、朝一緒に出た剱のパーティは一時過ぎに着いた由。今日はさすかにバテた。飯を食べ終った頃黒木がたどりつく。やっと、たどりついたという様子、我々の注文が多過ぎるとさんざん文句を云う。一日で新穂高から来たので完全にいかれている。

八月一日　晴

　　雲ノ平、黒部源流

　今日は休養日、源流での岩魚釣りと雲ノ平の散歩とする。保母、酒井、金子の三名は雲ノ平へ、西垣、黒木、佐藤の三名は釣竿片手に源流へ。やはり腕自漫を誇る連中だけあり、夕刻迄に五十数匹を釣上げる。六人で食べ切れず近くのテントに売りに行くが買手なし。明日の食料とする。

八月二日　隋一時雨

　　三俣蓮華→高天ケ原

　目が覚めるともう九時、いそいで出発する。六人で分けたが相当の荷物、途中で会った剱のパーティの一年部員がびっくりしていた。高天ヶ原に着いた頃、突然空が暗くなり、雷がなり、パチンコ玉より一まわり程大きなヒョウが降り始めた。こんな大きなヒョウは始めてなので一同びっくり、あわててテントに逃げ込む。高天ヶ原にテントをはるのはらないのと一悶者あったがこのヒョウで既成事実を作ってしまう。雨上りの空に出た日の美しかったこと。

八月三日　晴

　　高天ヶ原→立石

　朝露にべっとり濡れて大東鉱山小屋に若く。立派な無人小屋である。途中で金作から来た京大パーティに逢う。これで上廊下に行く連中は一段と元気になる。岩小屋を物置きとする。酒井が今年の春、薬師より立石に降りた時のフィツクスザイルをみつける。

　さっそく岩魚釣り、昨日は源流で釣ったのをどこかに落したので食いはぐれた。今日はどうしても釣らなければ。ようやくにして一人二匹づつの割当にありっいた。しかし源流はど釣れない、魚がすれているのか、それとも少ないのか。

八月四日　晴夕刻小雨

　　酒井、保母、金子の三名―上廊下へ

　　西垣、黒木、佐藤の三名　立石滞在

酒井、保母、金子の三名を三日の予定で上廊下に送り出す。残り三名は立石にて岩魚釣りとする。本流で釣るがなかなか釣れない。やはり沢、小谷の方か魚が多いのであろう。黒木が尺岩魚を釣る。今日より三名となり、昨日迄寝苦しかったテントも非常に快適となる。連中は。

八月五日　晴午後より雨

今日も好天気。午過ぎまで竿をふりまわしていたがあきてしまう。午後より雨が降り出したが、岩苔小谷で釣っている西垣は帰ってこない。黒木と二人で釣れないのでかつかしているんだろうと話していると、ずぶ濡れになって帰ってくる。しかし手には相当な獲物である。それも八寸位のやつばかり、穂先をとられたのでしかたなく帰ってきたらしい。黒木と西塩と二人で、土産にもって帰るのだと云って、燻製を作り始めた。雨の降る中で。

八月六日　晴

西垣が昨日なくなした穂先をさがしに行く、我々二人も、彼が昨日釣った所に案内してもらう。丁度滝になっていて、魚の行止まりの様な所である。たしかによく釣れる。それも形のそろったのが、昨日なくした穂先がみっかる。やはり魚がひっかかっていた。

昨日の話ほどでもないか、二時過ぎ上廊下の連中が帰ってきた。その様子たるやまさに山乞食である。地下足袋はやぶれ、ふらふらした歩き方でさぞ困難であっだのだろう。金子が手を負傷している。途中でスリップしてあぶない所であったそうな。高橋が喜ぶだろうと春の食料の残りをひろっきていた。

今日から又にさやかになる。

上ノ廊下隊記録

保　母　武　彦

メンバー　　酒井（T3）　金子（T3）　保母（岳 4）

装　　備　　ナイロンザイル　m　一本

　　ツエルト　1　携燃　2 コ

食　　糧　　三日分

8 月 4 日　（晴後雨）

8・30 立石出発　三人共地下足装でサブである。右岸を通り、9・40 左岸に中央カールよりの沢の出合通過、11・00 大きな瀞に出合い右岸を 30m 程を高巻き、ケンス

イして河原に降りた。ここより下流金作谷までは本格的な廊下となっている。昼食（12・00～13・00）後さらに右岸壁をへつて 14・00 に金作谷出合に致る。その頃より小雨が降り始めた。左岸の磧に渡渉し、さらに右岸に移ったところから下流は沢通しに行けそうもなかった。大きく高巻きしてスゴ沢の出合附近に出る積りで 20m 程の壁を登り、やぶこぎをした。河原より 150m 程登ったところの草付きで一人が約 30m スリップ。（16・30）幸い滝つぼ様の処で止っだが足を打ち歩行困難となった。附近を物色しやっと 60m 位はなれたところに 3 人が横になれる場所を見付け、ビバーク（17・30）

八月五日　晴後雨

足の痛みは心配した程のことはなくなんとか歩けるというので予定のコースへ７・30 出発。

露にぬれた身のたけをこす葉の中を歩き 6 時間後ようやくスゴ沢出合に着いた（14・00）ここで火をたき食事し、衣服をかわかしてスゴ沢へ入った。スゴ沢出合より下流へは時間的に無理なのであきらめた。（16・00）

スゴ沢はこの附近の逃げ道としては唯一のものである。スゴ沢の F1 は右岸をまいた。すぐ上の F2 は左岸を登った。F2 の上にちよっとした平らな処があったのでそこに泊った。（18・25）

八月六日　快晴

6・00 出発　7・30 スゴ乗越　8・00 スゴ小屋　10・00 北薬師　10・40 本峰　11・30～12・00〔南稜（東南尾根）第一尾根ジャクション〕昼食 13・00 第二尾根コル

これよりガレ沢を下降、黒部への落口が滝になっていたがアップザイルして河原へ降りた。（15・30）右岸に移り 17・00 立石着

この山行では上廊下の核真部である金作谷、スゴ沢間を見ることが出来なかったのは残念なことであった。しかし黒部上廊下の雰囲気を知るにはかなりの効果があった。

八月七日　晴　薬師バットレス

今日は、上廊下の速中は休養。立石組は薬師バットレスを登りに行く、酒井、金子を残し、四名で二パーティを組む。

〇保母　佐藤組

右手のリッヂを登る西垣達を別れ、正面のフェイスを登る予定で沢をつめ、やっと下部に達する。フェイスは三つに分れ、縦にリスが一本走っている。長さにして

三ピッチ（百二・三十米）位であるが。手持のハーケン等が不十分であるので、フェイスの右を登ることにした。クラック状の所から取付き、十五米位で小さなオーバハングにぶつかる適当なリスがないので、腕力で登りこえる。二ピッチのトップを保母にゆずる。右手のリヅヂに出るのだがハングしていて相当困難、結局あきらめて、トップ交代、左寄りにフェイスにルートを取る。草付きのいやな所であったが、四十米一杯でフェイスの右上に出る。所要時間三時間ばかり、これから上部ブッシュこぎをやらされた。やっと岩峯の上に出て一の沢に下る。ハーケン七本使用捨て縄一。遠方より見た所立派な岩壁にみえるが、実際そばで見るといくつかに分れており、ブッシュが多く。又スケールが大きいためルートの選択が非常に困難である。

〇黒木、西垣組

　城壁のようなバットレスの、一番右手のリッジを登ることにし、保母達と別れ、基却へくい込んでいる沢をつめる、右手の尾根へつきあげている沢より別れて岩にとりつく。リッジの左の凹角をハーケン二本で一ピッチ、さらにリッジにでて二ピッチ、核心部は終った、後は岩とブッシュの中をコンテイニアスで薬師からの尾根へでた。取付から約三時間、途中保母と佐藤かハングの下で苦労しているのが見えた、帰りは左手の沢を降った。

　八月八日　晴

　　立石－薬師沢、立石－槍

　今日で立石ともお別れ。佐藤は槍経由下山予定、残り五名は薬師沢－太郎平－有峰のコースで下山と決定する。

佐藤　立石－三俣蓮華－槍

　五名のものと分れ八時に立石をとび出す。六日前通った道を引き返えす。高天ヶ原でしばらく、景色を楽しみ三俣の小屋に着いたのが一時過ぎ、千丈乗越の辺で日が暮れ始め、肩の小屋に着いた時は七時をまわっていた。素泊り百五十円に値切り、久し振りにフトンで寝た。

五名（保母、西垣、酒井、黒木、金子）

　9・00 立石出発　9・50 高巻き終り　14・00 廊下終り　16・40 薬師沢出合

　八月九日　晴

佐藤　槍－徳本峠－島々

銀座のような上高地に出るのをやめ、徳本峠を越えることにして猛烈にすっとばす。徳本峠登り口には九時過ぎに着いた。さすかに通る人はほとんどいない。岩魚止の小屋で昼飯を御馳走になる。残った食物を全部お礼として置いていく、昨年の五月の時とは違って危かしい橋も新しく取かえてあつた。涼しい川風に吹かれながら島々へ。

五名

10・00 出発　16・00 尾根取付

八月十日　小雨

五名

7・30 出発　8・15 太郎平　10・00 三角美　11・00 折立。

北アルプス中央部横断

（一九六一年五月の記録）

玉　井　康　雄

われわれの黒部に関する記録は一九五六年春の下廊下横断、五八年冬の赤牛岳、五九年春の上廊下横断とつみかさねられてきたが、これらの行動によって、いまさらながら薬師のスケールの大きさに気のついたわれわれは六〇年春、その頂上をベースとする合宿で、東面のおもな尾根と沢をトレースした。このときの計画には、黒部をわたって赤牛へ向かうプランも含まれていたが、実行できず、翌年春、改めて薬師－赤牛－烏帽子をむすぶ計画とした。しかし、これも遠征への準備などのためにやはり流れてしまった。

そしてついに五月。計画を烏帽子から薬師へ向かうように変更のうえ、実行に移した。

これはすでに五月であり、一日で烏帽子小屋へはいれるのと、薬師東面での雪崩の危険がなくなったためである。黒部の渡河地点は金作谷出合いのスノー・ブリッジを利用することとした。

パーティは田井英男、玉井康雄（以上 OB）と田村俊秀、笠松卓爾（以上医五年）、梶木孝治、三沢日出夫（以上工三年）

☆行動記録☆

四月二十八日　大阪発

二十九日（曇後みぞれ）大町から七倉までバス。三角点あたりからみぞれが降りはじめ湿った雪の中をすっかり濡れて、十八時すぎに烏帽子小屋にはいった。

三十日（晴）　五時半すがすがしい天気に気をよくして小屋をとびだす。三ツ岳の三角点ピークを越え西に三つのコブがつづいているところで縦走路から分かれる。二つ目と三つ目のコブの間から三ノ沢へつづく雪田を下る。

三ノ沢の上部はもぐったが、沢がせまくなるあたりからデブリがいっぱいで全然もぐらない。東沢との出合いの近くで沢の雪がわれていたので、左岸の林を通って二十時半に東沢に出た。東沢は水か多く徒渉かと思われたが、倒木を利用して渡ることかできた。すこし左岸をつめて、まもなく中小谷の広い押し出しに出た。ここで一回目の昼食を取る。

中小谷は傾斜はゆるいが、日がいっぱいに照りっけていて雪の状態はよくなかった。ひとまずノン・ストップで中小谷の三分ノ一くらいのところまでいき、左岸から突きだした大岩を目ざして登りだす。ひざ近くまでもぐるので何度もトップを交代した。岩に近づいたとき左手上方で雪崩が出る。そこでこれ以上沢すじを行くのをやめ、その大岩の右手のザッテル目ざして急斜面に取りついた。雪面が切れやすく登りづらい。

やがて中小谷東越北側の二八一〇メートル峯から、東にのびた尾根に出た。ここから見ると中小谷上部は広いカールとなっている。尾根は沢よりも雪の状態が悪く、トップが足をけりこむとパーティの乗っている斜面全体が振動する。下の岩との間がすっかり空洞になっているからだ。踏み抜いたら一度に腰まではまりこみ、体力を消耗する。稜線がかなり近づいたころ露岩の丸いくぼみに水を見つけ、さっそく二回目の昼食をとる。

元気をとりもどして二八一〇メートル峯の北をトラバース、十三時半に赤牛の稜線に出た。雪の少ない西側を通って、ほどなく赤牛の頂上へ。雪庇の上で記念撮影。ここからの薬師は全く素晴しく、いつまで見ていてもあきない。きようの予定はこの辺まででであったがまだ早いので北西稜を下ってしまうことにした。岩の出た P2 を越え、広い P3 の上から金作谷の方を観察する。結局 P3 から黒部に向かうと薬師中央稜末端の廊下に出ると判断されたのでそのまま北西稜を下って、カスミ平から金作谷出合いに向かうことにした。

P3 から雪はまたくさりはじめ、ひざくらいまでもぐる。パーティがやや離れてしまったので、疲れた者に P4 手前の草地で十六時の天気予報をきいてもらい、他は

P4 のブッシュをこいで、他は P5、P6 間の、木立ちの中にテントを張る。薬師は木立ちにじゃまされてよく見えないのがちょっとなさけない。雨が予想されたのでテントにフライをつけた。全員くたくたになって夕食の用意をする。

五月一日（雨）　朝からガスが流れ、雨が降っている。一応早起きをしたが、またシュラーフにもぐってしまう。九時に小降りになったので、黒部に偵察に行くことにした。

全員ででかけるまでもあるまいとくじを引く。田村、田井、三沢があたって、雨の中を出ていく。彼らは P6 の手前でカスミ平に下り、真っすぐ金作谷出合いをめざした。アップザイレン五回で出合いに達し、帰途にやや下流にカスミ平まで切れずに上がっている沢を見つけて帰つてきた。偵察隊はあこがれのカスミ平を歩いてきたのですっかり気嫌がいい。「金作谷出合いにしっかりしたスノー・ブロッジがあったかい」と聞くと「スターリン戦車でも通れる」ということなのでやれやれと安心した。しかし、これは国防上の最高機密に属することなので、以後黙っておくことにした。

二日（曇後雨）　天気図では午後に寒冷前線の通過が予想されたがこんな黒部の奥で雨に降られていても仕方がないので出発することにした。八時半、テントをたたみ昨日のトレールにしたがってカスミ平へ降りる。

天気は持ちなおした。われわれはカスミ平を歩いていくというだけで充分幸せだった。オオシラビソがところどころに顔を出しているだけの素晴しい雪原だ。平は途中に一段あってまたその下に雪原がある。この付近は夏にはひどいブッシュで近づけない。沢はここからやや北向きにおりている。なかなか黒部が近づかない。かなり下って左手の尾根にトラバースすると突然金作谷出合いの巨大なスノー・ブリッジが目にとびこんできた。

出合いから下流はずっと流れが出ている。出合い下手の広い雪面にグリセード気味に下る。そこから右岸の雪をつたって出合いのスノー・ブリッジに出る。赤牛側斜面は、あまり雪がついていなかった。もしきのう天気がよくて荷をもってここへまっすぐきていたらさぞ苦労したであろう。ガレの中からの湧水を利用して、一回目の昼食をとる。まだ九時半である。

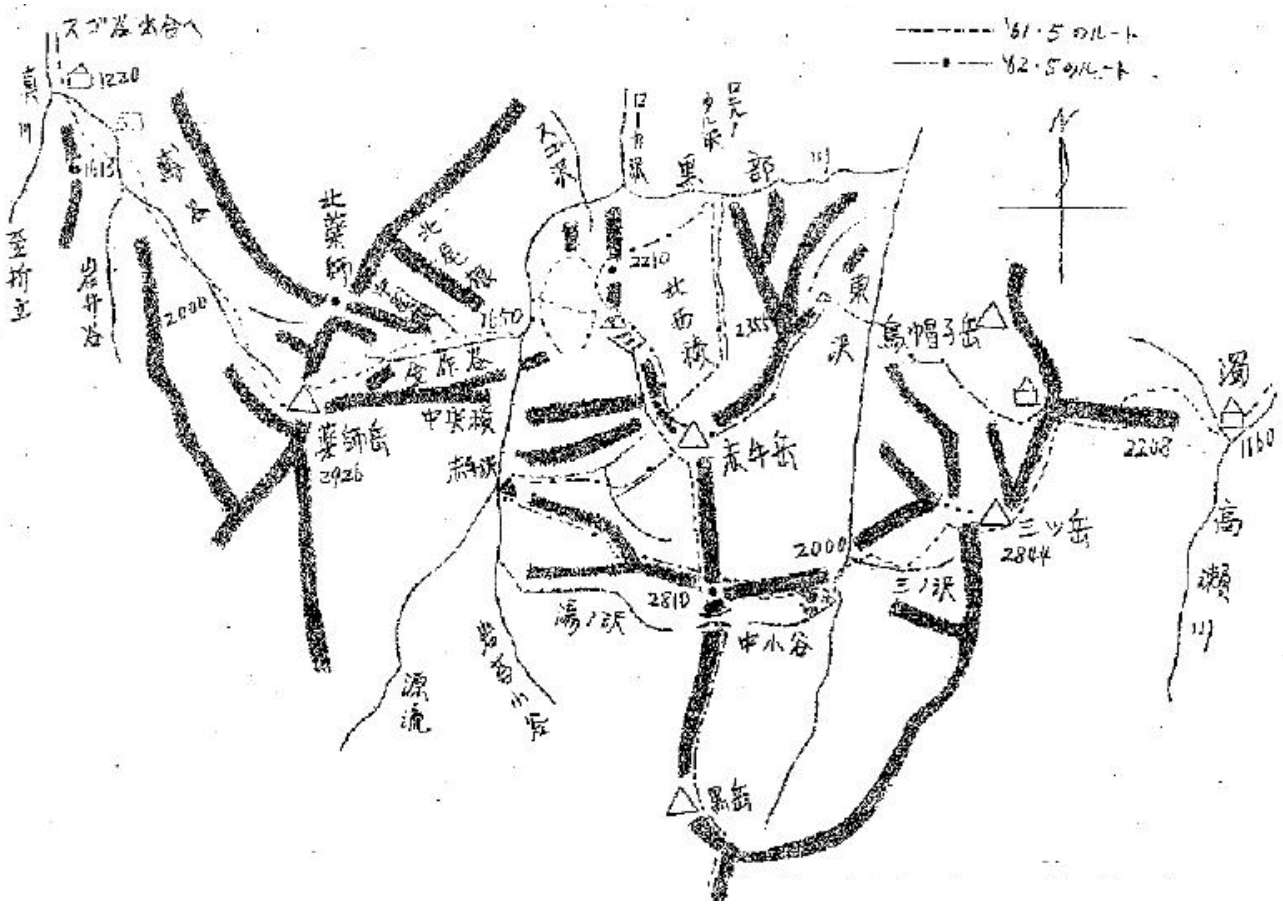
スノー・ブリッジを暑さが五メートルくらいあるが、底は水中に没していてわからない。巾は三〇メートル以上の青いクレバスが薬師側に一本はいっている。ここから金作谷をつめて、薬師へ出るのは問題もなさそうだが、二股から上が厄介であ

ろう。金作中尾根か、金作カールまで沢をつめるかであるが、尾根でくさった雪の中をもぐるのはいやなので、雪崩に気をつけつつ、一三〇〇メートル薬師まで金作谷をつめることにした。

九時五十分に出合い出発。沢は二股までは明るかった。左股にはいるとまもなく中央稜上部から、ブロックが落ちてきたが、沢の中央まではやってこない。沢はデブリでいっぱいだが、かなりもぐるので歩きづらい。トップを交代しながらピッチを上げる。中央稜からのブロックにも馴れてきた。高度はどんどんあがるが、カールの落ち口はなかなか近づかない。

やがて沢が一本タイレクトに北薬師へつきあげているところに近づいた。そのとき突然大きなブロックがわれわれの頭上にゆつくり空中に浮かびあがるのを見てびっくりし、大いそぎで左へ逃げたが、しかし湿雪特有のゆっくりした巾二メートルくらいの雪崩に乗ったブロックだったので、びっくりしただけで助かった。カールの落ち口に近づくにつれて沢はこまかくわかれていき、われわれはますます大きくあえぐ。ややバテ気味になったころ、やっとカールにはいったが、ガスが濃くなって何も見えなくなった。

中央稜にあがらないように気をつけながらガスの中をすすんで最後に急傾斜をピッケルたよりに慎重に五〇メートルほど登ると縦走路のガレ場に飛び出した。十五



分くらい南に登って、十四時に半分雪にうまった薬師のほこらに着く。全員集まって、握手をかわし、濃いガスの中で干しぶどうをわけあってから、鳶谷めざして雪面を西へ下りはじめた。

表面だけクラストした歩きづらい雪なので尻をつけてすべってみるとなかなか調子がよい。ガスの中を先頭を見失わぬようどんどん飛ばす。こうして鳶谷二股までほとんど九〇〇メートルをすべり降りた。おかげで下半身がびしょ濡れになってしまったが、今夜は出合いの小屋に泊まるんだからいいや。ところが、沢の雪が割れて歩きにくくなるころ、雷雨になって下半身どころかたちまち全身ずぶ濡れとなった。十七時、河原の雪の上に設営する。

三日（曇時々雨）　十時、ゆっくりテントを撤収。岩井谷左岸に渡るため、昨夕見当をつけておいたスノ・ブリッジまで後もどりする。ブリッジを渡ってから谷沿に進むのは行きづまるおそれがあるので、ブッシュと雪田を一六一三メートル峯近まで登った。そこからは真川出合いの小屋や橋がすぐ下に見えた。しめたというので一気にかけおり、橋で濡れた物をひろげた。

スゴ谷出合いまでの道は、デブリですっかり荒れていた。雨の中を歩いて時間をくったが、やかでスゴ谷の取り入れ口小屋についた。

四日（雨）　あいかわらず雨。昼すぎまでねばったがやまないので出発する。砂防軌道はデブリのため下の方しか動いていないので、結局雨の中を千寿ヶ原まで歩かなければならなかった。

（この原稿は岳人一六九号に掲載）

東沢谷二の沢・口元のたる沢そして赤牛沢

（一九六二年五月）

牧　野　大　輔

メンバー　田村（L）　笠松　田井　玉井　牧野

一九六二年

四月九日（小雪）8・45 七倉発　10・10 濁　11・40 ブナ立尾根取付き　15・45 三角点　17・30 烏帽子小屋

四月三十日（晴）　停滞

五月一日（晴後小雪）5・30 烏帽子小屋発小屋のすぐ前から二ノ沢に入る。雪は可成りしまっている。

5・45 最初の滝　左岸の雪壁を Fix して通過。続いて廊下状は最後滝になり、2Fix で左岸を通過。廊下は最後滝になり、これは右岸の雪壁を 1Fix で通過。7・50 二段の大滝偵察後左岸を高巻き、最後は Fix して下に降りる。この間約 2 時間を要す。これが最後の滝で、最大の滝（50m）であった。後は雪で埋まった沢を快調にとばして川のせせらぎを聞きながら東沢出合へ。10・15 東沢出合　昼食 11・10 出発　対面の急な尾根を登る。13・15△雪が降りだす。14・45 赤牛岳東北尾根 Junction。

雪が本格的に降りだす。口元のタル沢か見える所にテントを張る。時々小雪となり、ガスが切れて口元のタル沢が姿をみせる。途方もなく大きい。

五月二日（快晴）　7・55 出発　途中の岩峯も基部を巻いて難なく通過。10・30 赤牛頂上　三角点のすぐ横にテントを張る。12・00 赤牛沢下降　上部は巾広く、グリセードでとばす。12・30 左右より小沢が入りつるつるの滝が露出している。所々雪が薄くいやな感じ。13・00 黒部出合い 13・15 立石に向かう。右岸をへつろうとするも果たさず高巻く。13・55 立石岩小屋　14・30 出発　赤牛岳黒岳の稜線より立石に下りている急な尾根に取付く。所々雪のついた草付きにぶっかりブッシュを掴んで強引に登る。15・15 平な所に出る。薬師と赤牛がすばらしい。16・45 人型の Junction（2600m）。17・20 稜線　夕焼けで空が真赤に染まっている。疲れた足をひきづって 17・55 テント着

五月三日（晴後小雪）7・05 出発　北西尾根 P2～P3 コルより口元タル沢へ下降。沢の上部の広いカールをグリセードと尻制動でとばす。赤牛の Peak がみるみる高くなる。7・30 沢狭くなり、あちこちにデブリがでている。7・45 左右より岩尾根を押出し、沢は 30～50m の滝となり合流している。廊下状、8・05 大滝　左岸を高巻き、左岸に入る沢を利用して滝下へ。8・30 滝（二段）　両側はスッパリと切れている。ひっかかったブロツクの上を慎重にアップザイレンしてくだる。

8・55 偵察　暗い廊下を下るとすぐ黒部。引返し全員で 9・15 出合いへ。出合は大きな Snow bridge がかかり、対岸にわたって昼食。9・50 口元タル沢左岸の尾根に取付き、赤牛のすその白地に上る。ところどころ旧東電歩道の踏み跡らしきものがみられる。11・45　下　11・15 カスミ平　昼食　12・25 発　13・15 P4　14・15 P3　14・40 P2　14・50 テント

五月四日（風雨）　停滞

五月五日（午前雨後晴）　停滞、午後 2 時頃急にガスが切れ、今まで 30m 程しかなかった視界が急に何百 Km という視界になる。

五月六日（晴）　6・00 出発　8・00 水晶　しばらくは宝捜しに余念がない。10・00 水晶小屋近くへ。鷲羽をトラバースして、源流を尻制動で下り、トラバースして 11・15 三俣小屋へ。13・30 双六　昼食　あてにしていた春山の食糧何もなし。14・40 発落とし穴に悪態をつきながら 16・00 大乗間乗越、雪崩に注意しながら尻制動で大下り。16・30 左俣出合　16・50 雪橋で右岸へ。17・20 わさび平　18・30 新穂高温泉。風呂、ビール、etc.

（付記）田村俊秀

昨年 5 月このあたりを横断して味をしめたので二番煎じの山行をやった。5 月の落着いた雪は多少の危険を考慮すれば他の季節には想像もつかない程谷や尾根の通過を容易にする。積雪期の上廊下周辺は魅力ある課題だが、まず 5 月の雪から徐々にためして見る積りであった。かつての三高の人々が東沢に繰り広げた生活を上廊下に再現するのは途方もない夢だろうか。

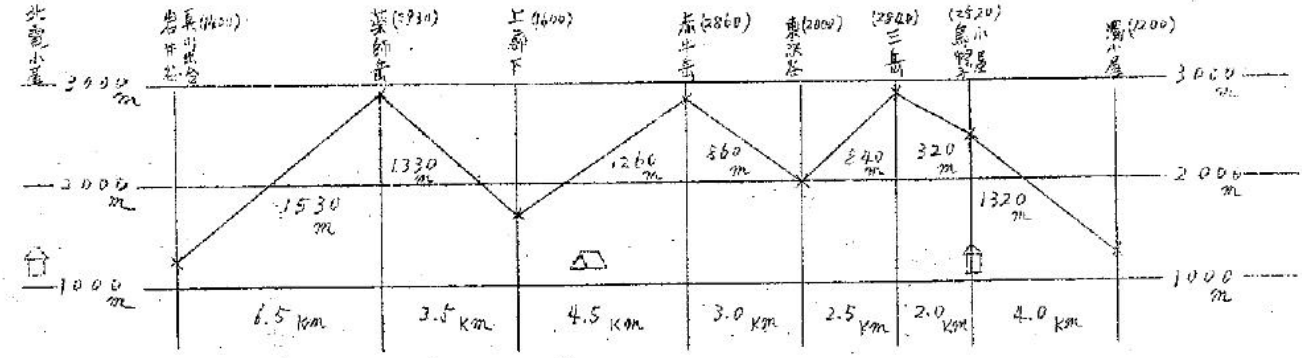
ある　山　行

笠　松　卓　爾

一昨年、昨年と二度ばかり、我々は「烏帽子岳－赤牛岳－薬師岳」を結んで、たのしい五月山行をした。自分達の現役時代に、上廊下をめぐって二つの大きな積雪期の合宿を展開した者が、この一帯にまだ執着心を持っていても不思議ではない。上廊下横断行に於ては全長 18km をこえるポーラー戦術（3000m に近い主稜線上だけでも 13km 余の長さ）を展開して始めて、上廊下に近づく事が可能であった。薬師岳東面合宿では 1300m 余の高度差を上下し、黒部川の流れる水を汲む事はできたが、これを渡り赤牛岳まで走る事は許されなかった。もっとあっさりと上廊下に接近できないものであろうか。これらの三本の主稜線と、二つの大きな谷を結びつける事はできないものであろうか。それは唯一つ、できるだけ直線的に横断してゆく事である。かくて、第一回目の計画が生まれたのである。

或る者は、薬師東面合宿ではたさなかった「薬師岳－上廊下－赤牛岳」のラッシュ戦法を胸に描いていたかもしれぬ。又。他の者は、以前に一ノ越から遠望した口元のたる沢の事を思い出していたかもしれぬ。東沢谷の開けた明るい谷にあこがれた者も

いたであろう。ともかく、信州と越中とを結ぶこの横断行を、どっちがわから始めるのか－がまづ議論された。



この計画の最大の焦点を、上廊下渡りに置き、金作谷出合のスノーブリッヂを期待する事にした。とすれば、この地点について自分達はよく知っているとはいえ、計画の前半に於て、一番問題になると考えられる所を通過しておきたかった。又雪のある時期の東沢谷を直接に知っている者がいない－という事もあった。谷底にテントは張りたくなかったから、上廊下渡りについては、薬師東面を一気にかけ降りて一日で赤牛の台地に達する－というのがよい様に思えた。新雪に出くわしたりする危険を考えれば、なおの事である。その上、越中側から入る場合の方が、上りの両度差の総計では 200m 程少くてすむ。それにもかかわらず、我々は信州から越中へと抜けた。何といったって、「ちょっぴりがんばれば第一日目で主稜線に頭を出せる」という事が、あのいやなブナ立を登る決心をつけてくれた。(薬師にはとても一日目ではとどかない。)

東沢の渡りは、落差を少くする事と平面距離を短くする事の妥協から、三ノ沢と中小谷乗越とを結ぶ地点をえらんだ。それらは、我々が夫々対岸から遠望した事のある沢筋でもあった。薬師からの下りは、重力の法則にまかせて、全く知らない鳶谷をかけ降りる事にした。

ついでながら、五月の連休をチャンスにえらび、現役部員をまき込んだ点についてかきそえておく。単に我々若い OB 達の共通のヒマは、この連休にしかとれない事や、四人だけでは冬用テント一つが重すぎる事もあるが、もっと本質的には、残雪期にあっては、ナダレをそれ程怖れる事なく沢筋に入る事が可能であり且、一日の行動範囲、時間が相当大きくとれる－という好都合な所がある。そして、この様な山行の中から、次の合宿計画への着想も生れてくるのではないか－と考えている。事実、この山行を楽しく思った我々は、次の五月連休にもこの山塊に入った。

二度目の計画は、形を少し変え、赤牛から発する沢のトレースを主目的とした。この山行で我々は、東沢谷二沢の下部が三沢に比べてやっかいである事を知った。又、口元のたる沢や赤牛沢が雪にうもれている状態をある程度知りえた。ことに前者では、数多くのデブリの上をこえた。両側面からのものである。下 1/3 にはかなり大きい滝が連続している事を推測しえた。これらの沢は、無雪期あるいは厳冬期であれば、これ程容易には近づけなかったであろう。一週間の日程は、我々が赤牛前沢や赤牛北東尾根 2355m 峰につき上げている沢等に足を伸ばす余裕を与えてくれなかった。赤牛頂上のキャンプから、口元のたる沢－廊下沢－越中沢岳へと抜ける計画も、次の機会に残されてしまった。

今、この二つの五月山行をふりかえりながら、私は、自分達のたのしかった山行も、やがて来たるべき「積雪期上廊下の完全遡行」の為の一つの踏石となる事を願っている。

減水期上廊下の完全遡行は、既に実現した。積雪期にも部分的トレースは行いはじめられている、と聞く。残されでいる問題は、数ヶ所ある壁のへつりと、全長約 20km にわたる上廊下全域（東沢谷出合から源流の詰まで）の積雪状態や雪崩についての知識を増し適切な判断を行う事とではないだろうか。后者は遡行隊の走らせ方とサポートの入れ方とを左右する。いづれにせよ、もし后者に関してある程度以上の確信を得る事ができれば、へつるべき壁に無雪期の合宿でルートを開いておき、続いて春山にこの計画を実行する事もできるのではないだろうか。私には、この計画が、阪大山岳部によって実現されるのは、ここ三・四年の間の事と思えてならない。

（もつとも、これだけの規模の計画であれば。例えば関西学連あたりでとりあげるべきものかもしれない）

最后に。

目下、P29 峰に二度目の遠征隊を出す準備が進められている中で、少しばかり考えた事をつけ足しておこう。雪積期に於ける谷や稜線の横断－という登山形式は、宿に遠望と没入との組合せによって進められる。その過程の中で、地形・気象・積雪等の変転やからみ合いを経験する事は、私達が技術と判断力との両面に於て自己を伸ばして行く上に役立つのではないだろうか。そしてこの事は、質に於ても規模の点でも大きな違いはあるにせよ、国内での私達の山行を、常に偵察と共にある山登り、海外の未知の山塊における登山に結びつけてくれる一本の太い綱ではないだろうか。

積雪期登山について云うなら、主稜線上の縦走はきびしくこそはあれ、単調さがある。尾根を使っての極地法登山、そこには個人が集団の中にうもれてしまう危険がある。私達の山岳部がスキーを駆使する合宿をやれるのは先の事だし、悪壁を専門にねらうにもそれだけの積重ねがない。まだ残されているいくつかの未登岩壁に岩登術の粋をひっさげで立向うならいざしらず、今となっては重箱の隅をルーペで拡大する外には、日本では新しい山はない。あまり人に知られていない山、近頃あまり人か入らない山という程度では、それを量的に大きく引伸ばしてみた所で、ルーペ片手の毛虫あさりと大差はない。

（この稿のはじめ所でおわりの様に、自分達の山行を、「北アの中央部に新しいルートを開いた」とかなり誇らしく思っていたのであるが、ある機会に次の様な記録を約 30 年前の山岳に読んでかなり考えなおしている。それは一月に「鳥帽子小屋－南沢岳双子峠のコル、そこから沢を下り東沢谷－東沢谷遡行して中小谷沢出合－中小谷乗越－赤牛岳」というルートをたどったものであった。似た様なアイヂイア、似た様なルートが既に先人によって記録されでいる事には卒直でありたいと思っている。）

以下の事は極諭である。

頂上やそれへのルート、つまり山そのものに意味があり新しさが求められた時代はもうすぎ去ろうとしている。日本の山登りが、海外の山岳に大きく開かれている今日、一体何が残されているのだろうか。新しさは山そのものを離れて、登る者の頭の中に求められるべきではなかろうか。同じ材料をできるだけ新しい考え方で料理しよう－というのと同じ事である。こんな考えを持つ事は、一種の悪あがきとも受けとれるが、しかし山行計画のマンネリを打破るのは、新しい着想だけである。新たな意味づけだけである。

例えば槍ヶ岳の地図をみていただこう。そこには 3000m をこすピークと肩から伸びる四つの主稜線とがある。かつてはこのピークに立つ事が、次には四つの鎌を縦走して頂上に至るというルートのおもしろさが、競われた。時代か下ると共に、槍の頂上を目ざす縦走の規模は大きくなった。けったいな尾根と槍岳とを結びつけた山行もあった。しかし槍ヶ岳という高名で且高い山の四つの鎌を順に横断してまわろう－という山行が行われた話は聞かない。（この案は、もう数年前に出されたものであるが、どうしてか立消えになったままである）この場合、北鎌尾根なり滝谷なりの岩登りも組合せると、一層おもしろく且前にのべた様な綜合的トレイニングとしての意味も大きくなると思う。

もうそろそろペンをおきたい。
私は、現役部員の山行が充分の基礎のないままにヒマラヤ熱に浮されるのを好ましい事とは考えない。が、しかし個人個人の心の奥では現在の自分達の山登りが、将来のもっと規模の大きい、それに発展してゆく事を願っている事だろう－と思うし又、そうあってほしい。

上　の　廊　下

高　田　邦　雄

（期　　間）一九六二年八月二十一日～二十六日

（メンバー）L 保母、横尾、高田

今まで我が部においても、上の廊下遡行の企ては再三あつたが、いずれも運悪く失敗に終っていた。以下は、例年にない好条件に恵まれて、ほぼ完全に近い遡行を成し得、念願を果たす事のできた三十七年夏の記録である。

（行動概要）

八月二十日（晴）夜。いつもながら満員の「ちくま」で出発。荷はぎりぎりに切りつめた為、サブザックに少しはみ出る程度。キスリングと違って気楽な事この上なし。

八月二十一日（晴）大町より下扇沢行きのバスに乗る。乗客は我々を含めてたった五人と、なかなか快適。下扇沢よりカンカン照りの自動車道にあえぎながらも、大沢小屋をすぎ、針の木雪渓のゴルジュ手前で昼食。雪渓はゴルジュに少し残っているだけ。
シグザグの急登を終え、やっと着いた針の木峠も濃いガスに包まれて視界はきかず、早々に平へと下る。
最終の渡船に間に合むせようと思ったが。途中で無理とわかり南沢出合までとする。今夜は晴れているので。河原で屋を仰きゴロ寝としゃれるのも又格別。

下扇沢（九・〇〇）針の木峠（一四・〇〇）南沢出合（一七・〇〇）

八月二十二日（快晴）初発の渡船で、一面の湖と化した黒部本流を対岸へと渡る。このあたりは全く変貌してしまっていて、あの広々とした河原も水の底である。平の小屋で上流の様子をたづねると、水がついて河原を歩けない所は左岸に測量隊のトレースがあるとかで一安心する。

ヌクイ谷に出るまでに少し手間取ったが、後は、かすかな踏跡をたどってブッシュを分け一時間ほとの苦闘の末やっと河原にでる。広い河原をのんびりと行き、大した徒渉もなく東沢出合の泊り場に着く。
どうやら今年は例年になく水量が少なそうだ。時刻は早いが、今日はここまでとし、岩魚釣りに出かける。十匹余り釣れたので、夕食の蚕白質は十分。盛大なたき火でぬれ物を乾したき火で暖たまった砂地を床にする。

南沢出合（五・〇〇）渡し場（五・四五）平の小屋（七・二〇）東沢出合（一四・三〇）

八月二十三日（曇時々小雨）朝から雨が降ったり止んだりで、半ばあきらめていたが、天気図をつけてみると良くなりそうなので、十一時出発。泊り場より右岸を少し行って、すぐに徒渉。広い河原を徒渉をくり返しどんどんとばし、下の黒ビンガ手前の左岸の河原で昼食。やっと廊下に入ったという感じで、両岸とも切りたっている。第一の難関だが、今年は水量も少なく、流れの位置も以前と変わっている様だ。アンザイレンして腰までの徒渉で右岸に渡る。対岸は圧倒的な大岩壁、下・黒ビンガだ。流れが急角度に左に曲る所でつまってしまったので、意を決して、中州の浅そうな所めがけてとび込む。流される事もなく、腰近くの深さでうまくいった。再び広くなった沢の中州をジャブジャブといき、第二の難関、口元のタル沢出合に達する。前方は陰惨な廊下で、従来の記録では、ほとんどのパーティーが大きく高まいているので、通過不可能かとも思ったが、とにかく偵察にいってみると、トロになっている部分は流れの中央に中州があり、深いがなんとか行けそうだとわかった。
口元のタル沢は、落口は滝になっていないが少し入ってみると、廊下状の所に滝が続いており険悪そうである。出合より右岸の浅瀬を行き、問題のトロは胸まで没する深さだが、流れは非常にゆるく。あっさりと左岸に移る。そのまま左岸を行きつまった所で悪いトラバース（ザイル使用）。あとは河原伝いに廊下沢出合（天気図をつける）をすぎ、一度右岸に移ったが、スゴ沢手前で再び渡り返した所を泊り場とする。
今日も岩魚は豊富。しかし天候は思わしくなく、夜にはにわか雨になった。

出発（十一・〇〇）下の黒ビンガ入口（一二・一五～五〇）口元のタル沢出合（一四・〇〇～三〇）廊下沢出合（一六・二〇）。スゴ沢出合手前（一七・〇〇）

八月二十四日（曇後雨）いよいよ核心部とはりきる。泊り場より五分程で右岸に移り広い河原を伝ってスゴ沢出合に達する。出合より二十分程で再び左岸へ。このあたりから前方高く上の黒ビンガが頭上を圧し、両岸とも完全な廊下状を呈してきた。し

ばらくは壁をへつったり、浅瀬をいったりしたが、ついに行き詰ってしまった。行手は六・七ｍ程の間かトロになっていて、右岸にも移れないとあって、仕方なくこのトロを泳ぎ渡る事にする。最初の二・三米は足が届いたが、後は背が立たず、エアーマットにすがって泳ぐ。
水から上って寒さにガタガタ震えながらしばらく行くと、今度はツルツルの壁にハーケンの連打してあるのが見えた。打ち残された五本のハーケンに完全に頼りきって、十米足らずの最悪のトラバースを終え、右手より小沢の入ってくる所でたき火をして暖をとる。
少し行くと再び二本のハーケンを見つけてトラバース。それより右岸に移り、三十分程で金作谷出合に達する。難関突破に一安心しゆっくり昼食をとる。
金作より上流は依然として廊下が続いているが、今までとちかって両岸の壁は、細かいがホールドも得られるようになり、約三時間、右岸の水際わより二・三米前後の高さの所をへつって行き（ハーケン二本使用）、冠氏による赤牛沢（これは誤っていて、もう一つ上流のが赤牛沢と思われる）の上方のトロは高まく。この頃より雨が激しくなっったが、別段悪い所もなく右岸を行き、立石の岩小屋に入る。なお、金作より上流の沢通しは人の通った形跡は見当たらなかった。

出発（七・四五）スゴ沢出合（八・〇〇）金作谷出合（一二・一五～一三・三〇）
赤牛沢出合（一六・四五）立石（一八・〇五）

八月二十五日（晴）今日はのんびりと出かける。ケルンに導かれて最初の廊下は高捲き。一時間足らずで河原におりる。あとは大体、左岸を通って、岩魚を追ったりしてブラブラと薬師沢出合に着く。出合にはすでにテントが三張りほどあったので、薬師沢右岸の新道により、中俣まで頑張る。台風接近とあって風は強く、寒い泊り場である。

立石（一一・二〇）薬師沢出合（一五・一〇）（太郎取付き一七・五〇）

八月二十六日（暴風雨）風は非常に強く出発時には雨も加わった。いよいよ台嵐が来たなと思いながら、強風にとばされそうになりながら太郎を越え、折立までくると、運よく車が登ってきており、便乗させてもらって下山。駁後までツイた山行であった。

中俣（七・〇〇）太郎小屋（七・四〇）折立（一〇・〇〇）

八月二十七日　帰阪

（あとがき）　上廊下遡行といったような沢歩きでは、その成功、不成功は運に左右される事が極めて大きい。特に今回の沢歩きなとも、全くツイていたといえる。

水量も例年になく少ないようだし、問題の個所も割合楽に通過できた。そして天候も、さして悪いというほどでもなかった。しかし、成功の最大の原因は軽装備ということだ。思い切ってテントも寝袋もけずるという風にして、なんとかサブザックに詰めこんだ。おかげで東沢出合－立石間を二日という短期間で行けたのだし、もし大きい荷物だとしたら、おそらく金作出合から立石までは、高捲きするか、よほど長時間をかけねば通れなかつただろう。軽装備という点では色々批判もあるだろうが、今回の場合、結果的にはこれがよかった。

シュラフカバーとエアーマツトだけで、別に寒さも感じなかったし、夏の沢歩きなら、これで十分だと思う。ただ、ツエルト一張では雨に降られた時、三人入るには小さすぎて困った。それから、荷物か水びたしになるのを防ぐ為に、細かく分けてポリエチレンの袋につめたが、これはうまくいった。

最後に今回の装備を記しておく。

〔個人装備〕	〔共同装備〕	
シュラフカバー	ツエルト	1
エアーマツト	ザイル（ナイロン 40m）	1
地下足袋	補助ザイル（麻 8mm）	20m
ワラジ　2 足	ハンマー	1
毛の肌着上下	ハーケン	10
はんごう	カラビナ	6
その他	ノコギリ	1
	ナ　タ	6
	ラジオ	
	天気図用紙	

山小屋「栂ノ木寮」に関して

栂ノ木寮建設候補地決定の課程

浜　田　彰　三

栂の木寮の建設に取りかゝつたのは、一九六一・四・一だからもう二年余になる。

あの日は建設候補地の調査が目的で長野県庁を訪れたのだった。その后、一年半の間、強引と云われる迄の悪戦苦闘の末、一九六二・十一完成した・寮にとっては、今年は初めての夏山だ。仲間のヨーデルが広く栂池一帯にこだますることだろう。そのヨーデルを今瀬戸内海の一隅から想像したら、建設に従事した一人としてうれしい限りである。

これから、過去の建設経過をすこし述べて見たい。

建設委員会の発足、寮の設計（間取り）

昨夏の私たちが行った資材運搬（勤労奉仕）内部備品の問題、栂の木寮という命名、それから将来の管理方法等々も私なりに述べてみたい。しかし、今回はこれらを書くスペースもないから、山小屋特に学校寮はどういう地域に建設されるべきか、栂の木寮建設をふり返りながらのべておこう。

（1）栂の木寮建設候補地を上げる条件としてどう考えたか。

寮は、山岳部だけが使用するのでなく、広く阪大関係者一般に愛されねばならない点を念頭におかねばならなかった。又一般に山小屋はテント等よりも、より永久的な見地に立ち候補地を上げねぱならない。先づ最大の条件はリスクのある地域は絶対に避けねばならないことである。その他派生する条件として次のようなことが上げられる。

（イ）四季利用可能な地域でなければならない。そのため最終交通槻関からのアプローチは無積雪期最大四～五時間である。又高度については海抜二〇〇〇米以下である。主稜線上は避けるべきである。

（ロ）将来も愛される地域でなければならない。すなわち山に対する考え方は個人的好みがあって様々であるが、広い視野に立って建設地を考えなければならない。

（ハ）寮を中心にした活動が多角的、多面的でなければならない。登山、スキーばかりでなくいわゆる“ワンダーホーゲル”の拠点でもなければならないのである。

（ニ）山小屋の水利条件は絶対的である。雲の平は営利小屋建設にとっては、一見適しているが、水利の向だけでも考えても避けるべきであった。

（ホ）最近の登山ブームに乗った大衆登山者の多いしかも俗化した地域は学校寮建設には適当でない。

（へ）建設計画を実行する場合、地元の協力いかんは大きく建設計画を実行する場合、地元の協力いかんは大きく建設を左右するから、地元の意見は十分尊重しなければならない。また。計画実行にあたっては、地元のしっかりした世話人を見つけると何かにつけ好都合である。

私たちは猪股直衛氏にお願いした。氏は山にかけてもベテランで、特に神の田圃にかけては神様である。

尚ついでながら建設準備期間中、建設本部は殆んど都合地にあるのか普通だが、現地との連絡方法は大きな問題となる。地元と建設者の間に誤解など生じては計画を水泡に帰する場合もある。

（ト）国立公園法及び営林省内係の制約があるが、その建設の許可される地域でなければならない。ついでながら、最近やたらと山小屋か建設されるか、無計画な建設が行われているようだ。大自然を愛するものがその中に溶け込むような気持をもって建設にたずさわらないと、かえって自然の美をぶちこわすことにもなり兼ねない。

（２）栂池－神の田圃－を建設地にしたのは前述の条件をほゞ充すからであるが、すこし詳しくその経過を述べておきたい。

寮建設は山岳部、スキー部、ワンダーホーゲル部が協力し建設のイニシヤチブを握り計画を促進実行することであった。それで、建設候補地は各部から提出されることになっていた。各部が上げた候補地はどんな地域であったのだろうか、先づワンダーホーゲル部は特に候補地を先づ上げなかった。スキー部は青木湖附近－佐野坂－を上げた。地元の松沢佐野衛氏が非常に好意的で特にその地域を阪大に推せんして呉れたのだった。

山岳部は最終的には、栂池を上げたのであるが、その前に太郎平、弥陀ケ原、乗祭、上高地、志賀高原、八方尾根、細野を調査、。検討していた。

太郎平、弥陀ヶ原は冬期入山困難である。乗鞍は阪大医学部関係の小屋がすでにある。上高地、志賀高原は開発し尽くされた感がある。細野は、民家か集中しているため、学校寮建設地には適当でない。学校寮は、民家とある程度の距離を隔たなければ、その目的を失するおそれかある。八方尾根は水利条件が悪い。ということから結局一

九六一・五・佐野坂と栂池のどちらを選ぶべきかゞ問題となった。そして、次の理由から佐野坂を適当でないとした。佐野坂附近はスキー場としての将来性は余り望めない。大糸線によって、スキー場が横断されているため、スケールが小さいからである。以上のことから、栂池が建設地に決定したのである。しかし栂池と云えども、問題はあった。水利である。今も解決されていないが、近い将来、雷鳥沢から引水することによって、完全に解決される。今さしあたっては、早大神の田圃小屋を五分登った源水を利用して、どうにか水はある、しかし完全な水利でない。早急に解決が望まれる。

（一九六三年五月十五日記す）

山の家について（設計面より）

紙　野　桂　人（構築科助手）
木　原　秀　幸

この「山の家」建設にあたって、この場合、建設について海抜 1700m の多雪地である明確な条件があった。まず荷重として、雪と風、これは屋根の勾配、仕上、建物の配置と形態、そして骨組を決定づける。冬期の極寒、これは当然、凍上を予想されるから、基礎まわりの設計を決定する。又、資材運搬がすべて人力によるので、建物の重量の制限をうけた。

現場施工の難易度。気象条件が複雑であることから施工工程の複雑なものほど施工難になることから、当然湿式の材料より乾式の材料を選ぶ方が有利である。

これらが先ず設計当初に予想され一貫して守られる事から、結果の様な山小屋が姿を現わすことになった。

以上の諸条件の内最も重大な要素がひとつある事に諸兄はお気づきであろうか。つまりこの工事の最大の難関であった基礎まわりについての諸条件である。凍上と風圧による建物の浮上りが予想され、加えて敷地が傾斜している事から、基礎は深く出来る丈け重いのが良いけれども資材の運搬を考えれば出来るだけ軽くしたいと云う事である。本工事では幸にして、現場で石材を切出せたから良かったけれども、そうでなければ大変な事になるところで、石が確かに出るという報せがあるまで、私は心配でならなかった。敷地が急角度の傾斜を持っていたという事が、この工事に相当強く影響したとも云えよう。私はこの複雑な地形を一見して、正直にいってこれは大変だと思った。然し、大変であろうがなからうが、果すべき事は果さねばならない。工事にこの程度の困難はつきものなのだから。

この敷地の優秀性は、アプローチの湿地帯に反して、土地が乾燥していることと、地盤が予想以上に強固であった事と、その感動的な眺望と美しい栂の林にある。これはすばらしいと私は思った。実際、霧にぬれた栂の立姿と、晴れ度る時、鋭く展開する後立山連峰一連の見事な形態は圧倒的である。又私は完成直前の秋の笹の葉に夜来の雪がかすれている夏道から神の田甫の湿原に出てその秋の葉の色彩の乱舞に立つくした。これほどさえ渡った無数の色どりを通って、黙々と、小屋に近づく事自体が良き造形であると私は思う。

山小屋（栂の木寮）のこと

栗　原　完　治

目の前に雪におおわれた白馬三山不帰、八方尾根が朝に輝き、それらに続いて鹿島槍の吊尾根が絵を描いたようにくっきりと浮き出ている。又はるか向う雲海のかなたに北岳、甲斐駒などの南アルプス連峰がうっすらと見える。思えばこの夏はるばると信州の山奥へやって来て何の因果か暑い夏の日に砂や砂利を背負い山小屋が出来るとは聞いていたもののどんな小崖が出来るかもわからず、初めて見た山小屋（早稲田の小屋）をたった一つのイメージにしてボッカに精を出したものであった。

秋山合宿が終り畑中と二人で又小屋の備品を運びに再び神の田圃へとひきかえしそこでいよいよ山小屋の完成を見た。開所式の日には初めて小屋にとまることになり、まず山小屋への一番乗りとなった。ランプに火をつけ、ストーブに薪をほうり込み、ストーブを囲んでいろいろと山の話をし歌を歌いそれまでの不機嫌をすっかり忘れて実にいゝ気持だった。

夜もふけそろそろ寝る時間だ。二階は二段のベッドになつており上のベッドの西側は窓から後立山連峰が一番よくみることができる。空には無数の星かきらきらと輝いて月が小蓮華の上に静かに浮んでいる。この時こそ本当に山へきてよかったなあと思う、今度来るのは冬の合宿だそれまでこゝともしばらくおさらばだ。

冬山合宿に入る、尾根には雪がおゝいかぶさり、まわりの木々や山々は雪におゝわれて大変美しい、今年の冬山は異常とかで晴天が長く続き一年は小屋にとまってスキーの練習となった。僕はスキーで足を怪我したのでスキーは出来ないが毎日留守番をして山を見る。上の方ではアタックか成功したというしらせが入り今度は天狗原に登りテント生活の経験をする。

風かびゅうびゅうなり雪がまいあがり湿っぽいテントと比較して小屋は暖かくのびのびとして落着いた気持を起させる。山小屋での生活の良さそれは、その人個人がそこに住んで味うものである。

ピーク 29 峰遠征日誌

2 月 17 日	尾藤、山本光、西川、兼涛及び荷物　kg、ＢＩLine「サーダナ号」で神戸出航
3 月 7 日	サーダナ号ラングーン入港。
	山本光、西川下船、飛行機にてカルカッタ着。
9 日	隊長、住吉、山本信、小秋元、羽田発。
10 日	隊長、住吉、山本信、小秋元、カルカッタ着。
11 日	健竜丸カルカッタ入港。
14 日	隊長、住吉、小秋元、カルカッタ発カトマンズ着。
	サーダナ号カルカッタ入港。（尾藤、兼清）
21 日	危険物を除いてサーダナ号積荷通関完了。
24 日	危険物通関完了
	尾藤、山本光、西川、山本信、兼清、カルカッタ出発。
27 日	住吉カトマンズ発ポカラへ着く。
	尾藤、山本光、西川、兼清、山本信、ノータンワ着。
29 日	隊長、小秋元カトマンズ発ポカラへ着く。
	尾藤、パイロワからポカラへ着く。
30 日	山本光、西川、兼清、ノータンワからバイロワへ移る。
4 月 1 日	全荷物バイロワに到着。
2 日	兼清パイロワよりポカラへ着く。（定期便）
	山本信バイロワよりポカラへ着く。（チャーター便）
	荷物の半数ボカラ着。（チャーター便）
3 日	山本光、西川パイロワよりポカラ着。（チャーター便）
	荷物残りの半数パイロワよりポカラ着（〃）
4 日	住吉、西川、偵察隊としてポカラ出発シンスワバザール泊り。
	兼清、カトマンズからボカラへ戻る。
5 日	住吉隊、チソコーラ泊り。
	本隊、ポカラ停滞。
6 日	本隊（隊長、山本光、山本信、小秋元）ポカラ出発アルブンビズブル泊り。

	住吉隊、ナルマ部落下の河原泊り。
7 日	兼清、ポカラ発シスワバザール泊り。
	尾藤、ポカラ発ポカラから二つ目の部落泊り。
	本隊、アルブンビズブル発、カルブタール泊り。
	住吉隊、バランコーラ泊り。
8 日	兼清隊、カループタール泊り。
	本隊、カループタール発ナルマ泊り。
	尾藤隊
	住吉隊、ムシコーラに入りツルベシ泊り。
9 日	本隊、ナルマ発、クディ泊り。
	尾藤隊、兼清隊合流しナルマの下の河原に達す。
	住吉隊、ダハレ泊り。
10 日	本隊、クディに留まろ。
	尾藤兼清隊、クディに達し、本隊に合流。
	住吉隊、チトラカルカ泊り。
11 日	尾藤、兼清、クディよりマルシャンディ左岸の尾根へ偵察に出発。
	山本光、山本信、ムシコーラへ出発ツルベシ泊り。
	尾藤山本両隊、途中で住吉隊からのポストランナーに出会い。通信文の内容により、偵察地域をチプラに変更の為、クディに引返す。（尾藤隊のみ）
	住吉隊、チトラカルの停滞。
	本隊、クディ停留。
4 月 12 日	尾藤隊、クディ発マルシャンディ左岸を通りポンダラ泊り。
	山本隊、ツルベシ発ダハレ泊り。
	住吉隊、チトラカルカからのキャンプ A にキャンプを進める。
	本隊、クディ停留。
13 日	尾藤隊、ダハレ発チトラカルカ泊り。
（ネパール元日）	住吉隊、キャンプ A より、キャンプ B 地点往復。
	本隊、クディ停留。
14 日	尾藤隊、タロチプラより西尾根を登り 3,300m に達す。
	山本隊、チトラカルカ発、キャンプ A 泊り。

	住吉隊、キャンプ A 発、キャンプ B 泊り。
	本隊。クディ停留。’
15 日	尾藤隊、3,300m のキャンプより 4,200m 往復。
	山本隊、キャンプ A より西尾根下部登路調査。
	住吉隊、キャンプ B より雲上カルカに達す。
	本隊、クディ停留。
16 日	尾藤隊、クディの本隊に帰着。
	山本隊　山本光、キャンプ A より慶応カルカ往復。
	山本信、キャンプ A より雲上カルカ往復。
	住吉隊、キャンプを雲上カルカに進める。
4 月 17 日	住吉隊　住吉、西尾根住吉コルに達す。キャンプ A に下る。
	西川、キャンプ A より慶応カルカに入る。
	山本光、キャンプ A より慶応カルカに入る。
	本隊、クディよりマルシャンディとムシコーラの合流点附近へ移動。
18 日	住吉、山本光、マルシャディとムシコーラ合流点の本隊へ帰還。
	山本信、キャンプ A より雲上カルカのキャンプに入る。
19 日	本隊、ムシコーラ入りを決定。
	西川、住吉コルにて。雪崩観測。
	山本信、雲上カルカの地形測量。
20 日	本隊、ムシコーラ出会いのキャンプ地より移動を再開、ツルベシ泊り。
21 日	本隊、ダハレ泊り。
22 日	本隊、チトラカルカ泊り。
23 日	本隊、雲上カルカに達す。
27 日	住吉、西川、住吉コルを越えてツラギ水河側に 300m 下った地点へテントを進める。
28 日	住吉、西川、ツラギ氷河の BC サイト往復。
29 日	兼清、山本信、住吉コルを越えて 300m 下った地点のキャンプに入る。
	住吉、西川、BC サイトにキャンプを進める。

30 日　　篠田、小秋元、雲上カルカより BC に入る。

尾藤、山本光、雲上カルカより住吉コルを越えて 300m 下った地点のキャンプに入る。

5 月 1 日　　尾藤、山本光、BC に入る。

6 日　　隊長全員に訓辞。

ポカラを出発して丁度一ヶ月、諸君の協力によってこの BC を建設出来た事を感謝する。BC を建設してからは、登頂という事であるが P29 のルートは、このアイスフォールを通過する以外にはない。しかし、このアイスフォールは非常に困難で危険なことは、諸君の知る通りである。従って、今の季節に於いては、このアイスフォールの通過は断念せざるを得ない。P29;という山は非常に困難であり、登頂は非常に大きな意義がある。従って、我々は将来の登頂の為の偵察を充分になすべきである。

5 月 8 日　　初めてツラギ氷河を下り、氷河湖下の台地に達す。

9 日　　尾藤、山本光、及び西川、山本信、両隊、BC を出て氷河湖下へキャンプを進める。（RC1）

11 日　　尾藤隊、マルシャンディ沿いの部落ナジエに達す。

12 日　　住吉、兼清、BC を出て、氷河湖下のキャンプに入る。

西川、山本信、6,700 峰 4,700m にキャンプをを進める（RC2）

13 日　　尾藤隊、ナジエを発ち、ドナコーラのゴルジュ迄戻る。

住吉 RC1 より RC2 往復。

兼清 RC1 より RC2 に入る。

西川、山本信、RC2 より RC3 への登路工作。

14 日　　住吉 RC1 より BC に戻る。

23 時過ぎ篠田隊長胃潰瘍による吐血。

尾藤隊、ゴルジュより氷河湖下のキャンプに戻る。

5 月 15 日　　尾藤、山本光、BC に戻る。

西川、兼清、RC3 より　に入る。

16 日　　西川、兼清、RC3 より　への登路工作。

17 日　　西川、兼清、RC3 を撤収し、　に入る。

山本信、RC2 より RC3 に上り、西川、兼清と共に下る。

18 日　西川、RC3 より BC に戻る。
山本光、BC より西尾根キャンプに上る。
カトマンズ放送、市大隊のランタンリルンでの遭難を伝える。
19 日　住吉、山木光、西尾根ピークに登り、BC に戻る。
兼清、山本信、6,700 峰偵察。
アンダンマン諸島にモンスーン発生を報ず。
20 日　住吉、西川、市大隊応援の為、カトマンズへ向けて BC を出発 RC1 泊り。
尾藤、小秋元、西尾根のキャンプへ入る。
兼清、山本信、6,700 峰偵察。
21 日　尾藤、小秋元、BC へ戻る。
山本光、BC より住吉コル往復（フィックス撤収）。
兼清、山本信、6,700 峰偵察。
住吉、西川、RC1 発ナジエ泊り。
22 日　兼清、山本信、BC へ戻る。
住吉、西川、キャンプをナジエよりダラパに移す。
23 日　篠田、尾藤、BC より樺高地へ下る。
住吉、西川、ダラパニ発ジャガード泊り。
24 日　尾藤、樺高地より BC 往復。
山本光、小秋元、BC より樺高地へ下る。
住吉、西川、ジャガード発ブルブレ泊り。
5 月 25 日　尾藤、樺高地より BC 往復。
山本光、道路工作のため、樺高地を下る。
住吉。西川、ブルブレ発ナルマ下の河原。
アジーバ、パサンテンバ、クーリーの手配のためナジエへ下る。
26 日　尾藤、樺高地左岸の尾根を 4,200 迄登り引返す。
兼清、山本信、BC より樺高地へ下る。
27 日　尾藤、山本信、兼清、棒高地より BC 往復。
住吉、西川、ポカラ着。
28 日　住吉、西川、カトマンズ着。
29 日　山本光、道路工作終えて樺高地に戻る。

30 日　　本隊、樺高地を撤収してキャラバンに移る。
ドナコーラを左岸へ渡る橋泊り。
31 日　　本隊、ナジエ泊り。
6 月 2 日　　住吉隊のシェルパ 4 人。ナジエへ戻り。本隊に合流。
3 日　　本隊、ナジエ発、タルー泊り。
4 日　　本隊、タルー発サタレ泊り。
（マルシャンディにかかる橋が流失していたため、これ以上進めず。）
5 日　　本隊、サタレ発ジャガード泊り。
（午后出発）
6 日　　本隊、ジヤガード発ゴプテ泊り。
7 日　　本隊、ゴプテ発クディ泊り。
8 日　　本隊、クディ発、ミディコーラ畔泊り。
9 日　　本隊、ミディコーラ畔発、ルヂイコーラ畔泊り。
10 日　　本隊、ハルディコーラ畔発、マディコーラ畔泊り。
住吉、西川、カトマンズよりポカラ着。
6 月 11 日　　本隊、マディコーラ畔発、ボカラ泊り。
（ネパール国王誕生日）
17 日　　篠田、尾藤、小秋元、ポカラよりカトマンズへ飛ぶ。
18 日　　山本信、荷物の一部と共にポカラ発カトマンズ着。
19 日　　西川、兼清、ポカラ発カトマンズ着。
21 日　　住吉、山本信、ポカラよりカトマンズ着。
22 日　　篠田、尾藤、小秋元、カトマンズよりカルカッタへ飛ぶ。
24 日　　篠田、尾藤、小秋元、カルカッタよりホンコンへ飛ぶ。
兼清、山本信、カトマンズ発カルカッタ着。
25 日　　篠田、尾藤、小秋元、ホンコンより羽田へ飛ぶ。
26 日　　篠田、尾藤、小秋元、羽田着。
27 日　　住吉、山本光、西川、カトマンズ発カルカッタ着。
7 月 2 日　　住吉、山本光、西川、山本信、カルカッタ発（サンゴラ号）。
28 日　　住吉、山本光、西川、山本信、横浜着。

大阪大学山岳会
ヒマラヤ登山隊

収 支 決 算 表

大阪大学山岳会

（Ⅰ）収入の部

1. 阪大山岳会々員拠出金			1,845,000 円
	A ヒマラヤ登山準備基金（1 口 1,000 円、計 24 件）	24,000 円	
	B 一般会員拠出金（1 口 10,000 円、計 55 件）	501,000 円	
	C 隊員拠出金（計 7 件）	1,320,000 円	
2. ヒマラヤ登山後援会関係拠出金	（東京放送、毎日新聞他計 45 件）		5,370,000 円
3. 一般募金	（日本山岳会関西支部、阪大体育会他計 19 件）		452,500 円
4. 雑収入	（銀行利息その他）		9,374 円
合　　計			7,676,874 円

（Ⅱ）支出の部

1. 外貨裏付円払旅費			1,235,572 円
2. 外貨購入費		(インドルピー)	2,845,941 円
	a.荷物輸送費	5,112.44RS	計 RS 37,532.05
	b.交通費	7,190.78 〃	
	c.滞在費	5,849.76 〃	
	d.人件費	13,537.71 〃	
	e. 通信費	1,473.67 〃	
	f. キャラバン費	1,342.75 〃	
	g.雑費	3,024.94 〃	
3. 円払経費			3,195,361 円
	a.装備費	1,661,249 円	
	b.食糧費	229,049 〃	
	c.貨物輸送費	133,371 〃	
	d.医療・酸素費	65,950 〃	
	e.梱包費	178,370 〃	
	f.観測通信費	56,098 〃	
	g.写真材料費	80,660 〃	
	h.保険料	141,900 〃	
	i.事務費（募金費用を含む）	648,717 〃	
4. 次期計画積立金			400,000 円
合　　計			7,676,874 円

文　献　邦　訳

高度の人体に及ぼす影響（その一）

L・G・C・ピュウ、M・P・ウォード　著

徳　永　篤　司

松　久　　博　共訳

坪　井　圭之助

一九五一、五二、五三年の三回に亘って、英国山岳会と英国地学協会より成るヒマラヤ委員会がエベレストに送つた遠征隊は、夫々が一連の関連をもつ隊であった。一九五一年エベレストの南面ルートが発見され、一九五二年チョ・オユウにトレーニングの為の隊が送られ、医学及び生理学的な問題、殊に酸素の使用に関する研究が行なわれた。そして翌一九五三年にエベレストが初登頂されたのである。

これらの遠征は計画を円滑に進めるために、高所順化、栄養及び酸素吸入器の使用といったものがどの程度効果があるかと云う事や高度の人体に及ぼす影響について観察する絶好の機会であった。

この三つの遠征の初期の部分、即ち初めの十七日間に一、二〇〇米から三、六五〇米程度のヒマラヤ前山を、二二〇キロから二五〇キロ行進し、高度三、六五〇米から三、九五〇米にベースキャムプを作る迄のアプローチ期間ではどの隊も全く同様であった。次の二ケ月半は主に五、五〇〇米から六、七〇〇米の高さで過したが、一九五一、五二年の時は、真直ぐに五、五〇〇米に登り、五・六週間そこに滞在し、一九五三年では、約一ヶ月間を高所順化期間にとり、数回五、五〇〇米との間を往復した。又この隊ではこの期間中に五、五〇〇米から六、八五〇米近くのクーンブ氷河上にキャムプした。最後の期間、即ち頂上（八、八四〇米）改画を含むローツェ・フェイス、及びサウス・コル（七、九五〇米）の滞在期間は約十四日続いた。一九五一年、五二年には七、〇〇〇米より上には達しなかった.

一九五三年の隊は、一九五一、五二年の隊よりも高所経験か豊富であったと思われる。何故なら隊員十二人の内、三人は前二回の遠征に参加しており、他の三人はその何れかに、又残りの内四人は過去にヒマラヤ経験をもっていた。

高度三、六五〇米迄

アプローチの行進中には特に有害な影響は認められなかった。六〇〇米から七五〇米位迄の登行速度は長い登りでも変化なく、これは三、六五〇米迄続いた。二、四〇〇米以上では、一律の登行で登攀中の脈拍の増加が見られたが、三、六五〇米に迫す

る迄、過度呼吸に気付かなかった者もあった。三、〇〇〇米より低い所で、睡眠中の人達にチエーンストークス呼吸が認められた。ベースキャムプ建設後最初の二十四時間以内に頭痛を訴える者は珍しくなく、高度の影響による徴候も見られたが、これらは問もなく消失した。

高度六、一〇〇米迄

高度五、五〇〇米に至る迄に、ヒマラヤ初参加の人達の大半は、激しい呼吸困難、全身倦怠、疲労に悩まされ、登攀に非常な努力を要した。或る者は頭痛、食欲不振、嘔気、嘔吐と言った急性症状に悩んだ。この高度で殆んど影響をうけなかったエバンス（ヒマラヤ経験者）の忠告で、バンド（ヒマラヤ初参加）は呼吸数を増すことによって歩行が楽になることを見付けた。ヒマラヤ経験者は初めての人よりも冒され難い。例えば、ロウは一九五三年の時には五、八〇〇米迄は殆んど高山病症状に見舞われなかったが、前年（彼の二回目のヒマラヤ行）には、同じ高度に達した日に著名な頭痛、食欲不振、疲労感に悩まされている。ヒマラヤのベテランである。シプトン（一九五一、五二年の遠征隊長）は六、一〇〇米以下の高度では全く苦痛を感じていない。

しかしチョ・オユウ遠征の際、本隊が五、二〇〇米の高度に到着後数日たって一行に後から加わったピュウは、平素隊員達が食事時やキャムプで示す陽気で無邪気な振舞いや活発さが見られなくなっているのに驚いている。シェルパは全く高度の影響をうけず、しかも毎日二十四瓩の荷上げをしても疲れた様子が見られなかった。チョ・オユウ遠征のこの時期には、呼吸器疾患と下痢が隊の行動を弱め、ある時には隊員の半数か病人であった。チョ・オユウでの次の四週間に得た印象では、ヨーロッパ人の体力は、機械的な動作の点でシェルパより劣っでいるという感じをうけた。しかし隊員達はそれを否定している。食欲はなくなり、二十六日間に平均四・九瓩体重が減った。隊員の或る者は罐詰の鮭、パインアップルの様な食物を望み、彼らの嫌いな食物は食べなかった。他方、甘い物に対する食欲は増進し、砂糖の消費量は一日一人当り、アプローチでは一七〇瓦であったのが三四〇瓦となり倍に増加している。彼らは又多量の飲物を摂り、飲料は平均一日三－四立であった。遠征の後半に低地で休養をとって后、隊員の体力は改善され、食欲は戻り、現地の食科の摂取最も増えた。

翌年のエベレストでは隊員の一般健康状態は一層良かった。高所順化期間に呼吸器疾患と下痢が起ったが、高度によろ症状は見られなかった。五、五〇〇米のベースキャムプでは倦怠と食欲不振が見られたが、これらは二週間で消失し、その後は健康であった。クーンブ氷河のアイス・フオールで撮った映画では、隊員連は正確にステッ

プを切り、正常のリズムとバランスで登攀している。しかし低い所よりも努力が必要で耐久力も低下していた。

五、五〇〇米以上の高度では、ある者は休息時も作業時も、四六時中過度呼吸をしており、六回位呼吸した後約一〇秒間無呼吸となる程度のシエーンストークス呼吸が休息中や睡眠中の人々に見られた。

ベースキヤムプ（五、五〇〇米）での食後の睡眠時に観察された記録によると、ヒラリーは一〇秒間の無呼吸をおいて三秒続く呼吸を二回、ロウは一〇秒間をおいて三回呼吸するという型であった。

作業中は非常に高い換気率が維持された。一九五二年の測定値では、六、一〇〇米に於いて普通のペースで登行する時の換気量は毎分七四－一二三立であった。呼吸は、持続的な登攀では、毎分四〇－五〇回、激動時では六〇回迄で、過度呼吸をつゞける為に、肋骨下縁に軽い鈍痛を訴える者もいた。六、一〇〇米に部分的に順応した五人の安静時脈拍数は、八〇から八八迄であった。（これらの人々の平地での脈拍数は五〇－七〇である）血圧は、一部の人々に見られた拡張期圧上昇を除いては、一般に影響されていない。高度六、一〇〇米での持続的登攀では脈拍は一二〇－一四〇であった。

五、五〇〇米に約二週間滞在後、頭を使う事柄に気乗りがしないと言った事はなくなり。平地でやるよりは時間も努力も一層かゝるけれども、複雑な頭脳労働を性格にやれる様になった。この高度では睡眠は長くとる必要があり、初めの時期には不安と発作性呼吸困難で睡眠が妨げられたが、大抵一〇～一二時間眠った。

六、二五〇米－六、七〇〇米（ウェスタン・クーム）ウェスタン・クームでは高度に対する抵抗力に個人差のある事が明瞭に現われた。隊員達は日によって、或は一日の内の時間によって、作業能力と気分に著しいむらがあるのに気付いた。

食事を摂らないで長い登攀をすると非常に疲労したが、これは砂糖を食べるとすぐに回復した。同様の事がアルプスでも起るが、砂糖の効果はヒマラヤの方が著明であった。精神活動には著明な減退は見られなかった。ウエストマコツトは、ある午后にタイム紙のクロスワードーバズルの三分の二を解いたと言っている。ピュウは一日六時間ガス分析を行ったが、後で照合してみると殆んど計算に誤りはなかった。しかしながら健忘症の為に、観察や図を直ちに記録しておく様に注意を払う必要があった。酸素吸入は五、五〇〇米から六、一〇〇米まででは、順化された人には大した効果はなく、休息時に呼吸が僅に減少し、登攀時におしピッチが上る程度であったが、登攀

中の換気は二〇～五〇パーセント低下した。又耐久力は非常に増し、活動力も増加した。

退去の遠征隊の食物摂取量は平均一日三、〇〇〇カロリー或はそれ以下であったが、今回は約三、九〇〇カロリーを摂り、新鮮な肉、卵、薯で作ったヨーロッパ風の混合糧食を使用した。又高度に伴う沸騰点の低下（例えば六、一〇〇米では摂氏八〇度）により料理に燃料や時間を多く食う様な高度でも、高圧釜や特殊なストーブでうまいものを作る事か出来た。ウェスタン・クーム、又はそれ以上の高度に過ごした四週間の平均体重減少は一・八瓩であったが、ヒングストン（一九二五年）や、ラットレッジ（一九三四年）の隊では、この高度でひどくやせ衰えていた。

六、八五〇米－七、九五〇米（ローツェ・フェイス）

この高度では疲労、倦怠、息切れかひどく、酸素吸入の効果が著明であった。高度に対する抵抗力の個人差は、氷瀑やウエスタン・クームに於けるよりも一層明瞭で、シエルバのアン・ロマと共に、六、七〇〇米から七、六五〇米の間で九日間行動したロウは、彼に高所衰退が起り始めたのは、この期間の終りになってからであったと述べている．これとは反対に二人のヒマラヤ未経験着は消耗し、休養にベース・キャムプ（五、五〇〇米）に降らねばならなかった。

この高度では、精神活動はかなり鈍くなっており、酸素を吸うと足許に注意が出来、又景色を楽しんだりする余裕が出来た。その時には気付かなかったけれども、記録映画では隊員達のステップ・カッティングがおそく、しかも弱いという印象が現われている。手慣れた仕事はうまくこなす事が出来るが、熟考を要したり、自主的にしたりする仕事は困難であった。例えばウォードは第七キャンプ（七、三五〇米）で肺胞内空気の一部を試料に採取するという仕事を支障なくやった。これは複雑な操作であったけれども、彼のよく手なれた仕事であった。しかしプリムスのストーブを修理する時には、それが簡単な故障であるのに、大変手間取った。

七、九五〇米（サウス・コル）

こゝで述べる資料は登頂直后に第四キャムプやベース・キャムプで記録されたものである。スイス山岳財団は登頂当時に書かれた報告と、本国帰還后に隊員達より語られたその後の物語りとの間に食い違いが起るかも知れない事を注意してくれたが、サウス・コルでは思考や行動が緩慢となり、感情の起伏が少くなるといった精神、身体両面に亘る活動力の減退が認められた。この例として、ボーティロンは、そこより五〇〇米低い処であれば二〇分で出来た閉鎖式酸素吸入器の修理を、ここでは一時間半

もかかったと述べている。思考や行動を始めようとすると非常な努力がいったが、しかし一度やり出すと最后迄続ける事が出来た。攻画隊をサポートするといった一連の予定された行動は注意深く行われたが、周囲の状況に適合した行動を行なおうとする能力は著明に低下していた様に思われた。こうした傾向は第七キャムプ（七、三五〇米）に於いても明らかに見られた。

☆

洞察力と判断力の低下は、五月二十七日朝のハントの状態に関するヒラリーの次に述べる物語りによって裏書きされる。

ハントはその朝迄サウス・コルに三日間滞在し、そこに居合せた者の意見では、明らかに最早それ以上そこに留って居れる能力はなかった。しかしハントは攻撃隊を指揮する為に止ろうと決心していた為に、丁度第七キャムプから登って来た元気なロウに降りる事をすゝめられても仲々応じなかった。この脈のハントの状態は酩酊様であったと、ヒラリーとロウは書いており。第七キャムプに下る為に、エバンス、ボーディロン、アンニマとアンザイレンし、よろよろ歩いていたにも拘らず、彼自身はパーティを安全に下降させるのに自分が最適任者だと思っていた。この時の状態について、ハントの本には、疲労とだるさを挙げているが自分の状態が危機に立っていたとは自覚していない様に思われた。

サウス・コル或はもう少し低い所では、思考力の鈍っている事か酸素を使って見るとよく判る。隊員達は彼らが酸素を吸った時に如何に周囲に対して興味がわき、登攀の面白さを感ずる様になるかを口を揃えて述べている。

テンヂンを除く四人のシェルパの内、一人だけがサウス・コル以上の荷上げに適し、他の者は弱って出発出来ないか、或は嘔吐でへばってしまった。この理由の一つは、睡眠用酸素を使川しなかった事にある。ヨーロッパ人の内では、ボーディロンが最悪の状態であった。エバンスと二人でエベレスト南峰（八、七四八米）から帰って来た晩彼は死んでしまうのではないかと思ったと述べている。翌朝サウスコルの台地を登って降りる時に、彼は疲労と足の感覚消失を訴えたが、しかし酸素の使用により、無事第七キャムプへ帰投する事が出来た。

酸素吸入なしに良く眠れたノイスを除いて、他のヨーロッパ人達は毎晩睡眠のために五－六時間酸素を用いた。酸素の使用により暖かく感じ、よく眠れ、充分疲労から回復出来た。登攀中は、酸素は体力を増し呼吸を楽にする他に著しく登行速度を速めた。エバンスとボーディロンは閉鎖式吸入器を用い、七、九五〇米から八、四〇〇米

へ、毎時二八〇米の速さで、十九瓩の荷物を背負い、ルートを見付けながら登った。これはその条件を考慮すると、アルプスでの標準の行動であると思われ、酸素が順化された人には大して有効でないという説に予備している。ヒラリーとテンジンは、第二次の攻撃で、同じルートを開放式吸入器を用い、毎分四立の酸素を吸い、サポート隊によりラッセルされた道を一時間に一九〇米の割で登っている。登行速度に及ぼす影響では、開放式は閉鎖式よりも悪かった。

酸素吸入を中止することによる悪い影響は（数分間）呼吸を整えてから呼吸器を外している限りでは見られなかった。登攀中、酸素の供給か突然止まると、呼吸困難、脱力、眩暈が現われ、二人に尿失禁が認められた。急に装置が故障すると意識消失が起る事は以前より考えられていた。徐々に起る故障は気付かずに過しがちであり、クライマーは吸入器が故障している事を知らずに、疲労の増加や息切れによって休むのであった。

八、五〇〇米以上

エベレストでの最終キャムプは約八、五〇〇米におかれた。ヒラリーとテンジンは台地を平らにしてテントを張るのに午后二時から五時迄かゝつた。彼らは数分ねに休みながら酸素なしで着実に働いた。その夜は四時間酸素を用い、翌日（五月二十九日）は一分間三立の酸素を用いながら頂上に登った。頂上ではヒラリーは酸素吸入器をはずし、十分間写真を撮った。彼は凍結の場合にはカメラのシヤッター速度を速くするという事も覚えていたし、その辺りを歩きまわったが苦しくはなかった。八分後疲労と酩酊感を感じ再び酸素吸入器をつけた。降りでは酸素はサウス・コルに着いた途端になくなった。彼らは登りがより困難であったと云う事を除いては殆んどその差を認めなかった。しかしロウは、ヒラリー達の状態は他の隊の帰って来た時よりも可成り良かったけれども、コルに到着した時の彼らは全く、くたくたになって歩いていたと報告している。

医学的検査

ローツェ・フェイス、サウス・コル、或はそれ以上からウェスタン・クームへ帰った時、ヨーロッパ人もシエルパ達も医学的検査をうけた。

五月一六日、第三キャムプ（六、二五〇米）

ウエストマコットは第五キャムプ（六、八五〇米）に四泊し、且つ前夜第四キャムプ（六、四五〇米）に泊り、第三キャムプ（六、二五〇米）へ帰った時検査をうけた。これは彼がヒマラヤで最初に経験した高度であった。彼はローツェ・フェイスで行動

し、深い軟雪の中での登行に非常に疲れていた。第三キャムプに着いた時、彼の足どりはよろめき、明らかに疲労困憊、の状態であった。
次の表は彼の脈搏数と血圧である。

時刻	血圧（mmHg）	心搏数	
12・00	86/	66	手、冷い
13・25	86/66	88	
	20 分間 4ℓ/分の酸素吸入		
13・48	86/66	88	手背静脈充満し、上腰での脈は簡単に触れ末梢血管の拡張が見られる。

之は極度の疲労に一致した低血圧状態を示している。
ウエストマコットの血圧は正常値 120/80 であった。

五月二十五日、第四キャムプ（六、四五〇米）

その日のうちに第七キャムプからサウス・コルへ酸素なしに八時間かゝって十八瓩の荷上げをし、更にコルから第四キャムプへ帰った三人のシェルパが到着 5 分后に検査された。彼らはそれ以前の五月二十二日にサウス・コルに登って居り、非常に元気そうに見えた。疲れてはいたが消耗はしていなかったのである。
次の表はその記録である。

シェルパ名	年令	心尖搏動	橈骨動脈における脈搏	心搏数	血圧（mmHG）
トプキー	18	乳線上	不規則緊張良	100～104	104/70
タワ・トンデユプ	49	変位していない	規則正良	112	120/84
アン・ノルブ	38	変位していない	規則性良	100	120/86

五月二十七日　第四キャムプ（六、四五〇米）

四人のシエルパがサウス・コル（七、八六〇米）から帰った時検査をうけた。ダ・ナムギャルだけが明らかに疲労していた。彼はサウス・コルで二晩過し、前の晩は第七キャムプに泊つてゝた。アヌルウとダ・テンシンは第七キャムプからサウス・コルへ荷上げし、その日の内に帰って来ている。
次の表はその記録である。

シェルパ名	年令	心尖搏動	橈骨動脈における脈搏	心搏数	血圧（mmHG）
バル		触れず	規則正	96	100/74
ダ・ナムギャル	35	触れず	触れず	108	86/70

ダ・テンシン	40	変位なし	規則正	100	140/100
アヌルウ	27		規則正	100	110/80

唯一人消耗していたダ・ナムギャルは五月十六日にウエストマコツトに見られたと同様の低血圧状態を示した。

五月二十八日、第四キャムプ（六、四五〇米）

エバンスとボーデイロンより成る第一次攻画隊が検査された。二人共マスクと眼鏡との間に、三角形の凍傷斑があり、エバンスには軽い結膜炎と刺戟性の咳敲があった。彼は少しチアノーゼがあり安静時脈搏数は八〇～九〇、他に異常な所見は見られなかった。

ボーデイロンも又少しチアノーゼがあり、安静時脈搏数は一一〇であった。ボーデイロンやエバンスと行を共にしたハントは非常に疲れている様に見え、又チアノーゼと刺戟性の咳漱が見られた。彼の安静時脈搏数は一〇〇であった。

五月三〇日、第四キャムプ（六、四五〇米）。

第二次攻画隊のヒラリーとテンジンは、登頂成功の翌日サウス・コルから第四キャムプに到着后一時間で検査をうけた。二人共非常に疲れてはいたが消耗してはいなかった。ヒラリーはテンジンよりも疲れている様であった。検査をうけた人では、誰れにも心臓の拡大、頸静脈圧の上昇や肺うっ血の徴候は見られなかった。之らの人々の記録は次の如くである。

人名	日時	高度 (m)	橈骨動脈における脈搏	心搏数	血圧（mmHG）
ヒラリー	4 月 6 日	760		64	100/58
	5 月 30 日	6450	触れず	88	80/60
	6 月 2 日	5500	触れず	80	106/84
ロウ	4 月 6 日	760		66	126/74
	5 月 30 日	6450	弱 不規則	104	115/90
	6 月 2 日	5500	弱 不規則	82	112/82
テンジン	5 月 30 日	6450	両 規則正	81	140/86

攻撃前と攻撃後の体重の変化（Kg）

	五月十四日	五月三十日
ヒラリー	六七、五	六六、六
テンジン	六五、七	六二、五
ロウ	六四、八	六六、六
グレゴリイ	五八、五	五七、六

血色数量（g/100mℓ）

	攻撃前	攻撃後
ヒラリー	一七、〇	二一、六
テンジン	一七、八	一八、四
ロウ		二一、一
グレゴリイ	二〇、一	

登頂後　五月三十日　第四キャムプへ帰った時の尿中のクロールの量

	mg per litre	g per litre
ヒラリー	一八〇、四	六、四〇
テンジン	一四八、三	五、二六

ヒラリーからの尿の試料は到着後 2 時間、午后 5 時に得られた。
冷却により燐酸塩の青白い沈殿物が見られたが、アルブミンはなく PH は 5.5～5.8 であった。
テンジンは 8 時まで試料を出す事が出来なかった。

人々は非常な高処から降りて来たにしては驚く程良好であった。ヒングストン（一九二九年）に報告した様な心臓の拡大は認められず、体重と尿中の塩化物の量から推測して脱水の徴候はなかった。ヒラリーとテンジンの血色素量は隊員の平均である二〇g/dℓよりも少く、両者共一週間後のティアンポチェ（三九五〇米）では増加を示していた。

ダ・ナムギャル、ウエストマコット、及びヒラリー見られた低血圧状態は興味深い。前二者は明らかに消耗して居り、ヒラリーは非常に疲れてはいたが消耗はしていなかった。彼は第四キャムプに到着して間もなく、オムレツ二個（卵四個）と鮭罐（二二四瓦）の三分の一を食べ、二時間後には更にポテト、コンビーフ、ビスケットを食べた。消耗していたならこの様に食べる事は出来なかっただろう。しかしながも血圧を測定した際、彼の上流の脈は触れるのがむづかしく、手首では脈は触れず、手は冷たかった。一方同じ条件の下にあったロウとテンジンは温い手をして居り、静脈は充分に満たされ、脈は簡単に触れる事が出来た。（テント内の温度は摂氏二〇度）だからヒラリーの症状は末梢循環不全の徴候であったのである。この状態は脱水によっては説明され得ない、何故なら約二瓩の体重減少は普通一日の行動分の登攀者に見られる程度であり、又尿の塩化物の量は正常であるからである。ウエストマコットの場合には酸素吸入が試みられた。一分間四立の酸素吸入を二十分つゞけると、彼の手は温くなり、静脈は充分満たされたが、血圧や脈搏数には変化はなかった。彼はいくらか楽になったと思ったが、少し良くなっただけであった。酸素吸入で消耗より回復させる為には短時間では余り効果はなく、一晩中八時間以上も吸入すると著しい効果を示した。（本論文は Lancet, Dec. 1. 1956 に掲載されたものであるが、昨年ピュー博士より論文の寄贈と翻訳出版の承諾を得たので順次掲戦してゆく予定です）

編　集　後　記

○遅延を重ね、第 12 号は遂に三年間の合併号とせざるをえなかったことをこゝにお詫びしたい。

○富士山における堀井昭彦君の遭難は、かえすがえすも残念でならない。こゝに新めて、彼の冥福を祈ると共に御家族にお詫びする。痛ましい遭難を繰り返さぬ様、この部報が反省の一助ともなれば幸いである。

○合宿報告、一般山行報告とも、頁数の関係から簡略にせざるを得なかった。詳細は部に記録ファイルが残されているので、これを参照されたい。

○ピーク 29 峰遠征記録は篠田部長及び OB の手により山岳第 LⅦ号及び山岳会会報第二一八号等に出されていることを附記すると共に、この度の第二遠征の成果を期待する。

○この部報を出すのに協力頂いた部長、OB 諸氏並びに部員諸君、特に広瀬 OB、高橋 OB、梶本 OB、三沢 OB 及び現役桑原、横尾、高田、秋濃の諸両君に対し感謝して記す。

○最后に各年度の編集責任者を記しておく。

一九六〇年度　　高　橋　雄　二

一九六一年度　　三　沢　日出夫

一九六二年度　　大　川　和　秋

一九六三年六月　（大川和秋）

大阪大学山岳会「時報」第12号
一九六〇年四月～一九六三年三月
一九六三年九月発行
発行所　大阪市北区常安町三六
大阪大学学生課内
大阪大学山岳会
編集人　高橋雄二
印刷所　大阪市西区江戸堀北通二　電停西
美研社
電話(44)五〇〇八番